
メロディメイカー

雨咲ひいら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メロディメイカー

【Nコード】

N3809C

【作者名】

雨咲ひいら

【あらすじ】

死に至る未来を、少女が祈る。絶望に彩られた未来を、少年が壊す。連鎖する憎しみを、連続失踪犯が断つ。不幸が続く現実を、共犯探偵が生きる。四人の少年少女が展開する、限られた未来の方法論。

祈願

医師は、物惜しそうに聴診器を耳から外した。

そして何度も使い慣らした言葉を、今日もまた、私の胸に置く。

「特に異常はありませんね」

無表情を努める彼は、視線を落として道具を鞆の中にしまい始める。

「……」

私は黙ったまま、その様子を眺める。

「早く 治れば、いいのですがね」

沈黙に耐えきれず、彼は漏らした。

「相変わらず見通しはたっていないようです。本当に…残念な事です」

彼は目元の手をあて、緊張した筋肉を解す。

「……」

私は沈黙を守る。

「何年になりますか？」

今日の彼は、よく喋る。

「ここに入ってから しばらく経ちますね。あなたも私も」

彼は黒革の鞆に両手を置き、私の目を探した。

私は窓枠に置かれた鳳仙花に視線を移して、それを避ける。

窓ガラスには、空の絵が描かれていた。

「夢、希望、情熱、使命、名声、技術。当時、僕が抱え、また抱えようとしたそれは、少しずつ零れていきました」

それは貴女も同じなのだ、彼は私に言いたいのだろう。

私は咳き込み、彼の言葉の続きを遮る。

目配せをして、彼に退室を求める。

「今日の分の薬です ちゃんと飲むですよ」

彼は、何としてでも一つの言葉でも残そうと、最後にそう言った。

私はそれに頷くこともせず、ただ黙って、彼の後ろ姿を見送った。そして、彼の白衣に染み付いた、きつい消毒液の臭いが部屋に残り、私の鼻をつついた。

私は最後まで、この匂いを好きになれなかった。

ある病気が流行っていた。

それは発病の後、全身の体温が低下と共に、血液循環の著しい悪化が観測される。

局部的に症状を現すそれは、歳月と共に範囲を拡大、成人を期に全身の機能を停止する。

後に「冷血病」と関係者の間に呼ばれるようになり、それは国土全体に瞬く間に広がる。

未成年者のみに感染するが、感染方法は判明していない。

対策として政府は専門病院を設立し、二次感染を防ぐために患者を強制収容したが、その数は急速に増えていき、やがて病院の数もそれに応じて増加する。

現在、感染者数は約二十万人。未だに退院者は公式に発表されていない。

冷血病に対しその治療法を発見したと、ある一般人の夫妻が発表。薬品等を一切用いない彼らの方法は、自らの血液を冷血病患者に飲ませること。それだけで冷血病おるか、全ての病気にに対し効果があると言う。

それについて、まだ正式な検査による確証は得られていない。

窓から入ってくる陽射しが温かい、と一生に一度くらいは言ってみたい。しかし残念だ。ここで生まれた私には、決して与えられない。

いものは数多くある。

空、土、太陽、全ては遮られ、模造されている。

だからこの部屋には窓が無い。施設内の何処を探しても見当たらないだろう。

首の運動も兼ねて、私は辺りを見回す。

四方八方が白い板で囲まれ、天井と床の区別もつかない。

部屋の四隅に空いている、肉眼でぎりぎり確認できる程の小さな穴は、この部屋の空調を機能させているが、空を求める私達の視覚を満足させることは無い。

世界から隔離されたこの病室は、時間の流れをも遮断し、私達がいっ、何をやっていたかという記憶も狂わせる。

それを防いであげますよ、とこっそり告げ口するかのように、壁に掛けられた小さな時計の針がカチリと動いた。

午前八時。

少しだけ早い定期検診を終え、私はいつもと変わらない朝と対峙する。

今日一日、ずっと寝ていようかと、回転の悪い頭で考えていた。

そんな腑抜けな私を丁寧にくるむ毛布は、絶えず身体を暖め、全てを微睡みに追いやってしまおうと誘っている。毛布の羽毛が薄い生地の寝巻きを通して私の肌を触れ、小刻みに刺激を与える。

私は誘惑に半ば負けながら、重くなり始めた瞼に対する抵抗を諦めかけたその頃、ドアをノックする音が私を覚醒させた。

「お早うございます、舞生です」

抑えながらもその若さが滲み出た初々しい声が、静けさを死守する病室に割って入る。

私はそのままの体勢で対応した。

「どうぞ」

「失礼します！」

ドアが開いた。その隙間から少女が見える。

彼女は丁寧に靴を脱ぎ、それらをしっかりと揃えると、笑みをこちらに振り分ける。

「おはようございますっ、アヤトさん」

私は彼女の姿を視界に捉え、片手を上げて簡単な挨拶をする。同じように片手で挨拶する彼女の身長は、私より低い。

顔は美人というよりは、可愛いと言った方が適切な顔つきだ。

子供のようにじゃれ合う風の一つ一つに、丁寧になびくそのさらさらのショートヘアは、私と一歳の差しか無いのだが、圧倒的な若さと初々しさを感じさせる。

「なんだ舞生、元気そうじゃない」

彼女も私と同じ、患者だ。

患者同士の出入りは自由で、舞生はしばしば私の部屋に出入りしてくれる。

「もお アヤトさん、またベッドの中ですかあ」

舞生は口を尖らせる。

「今日も格段と寒いんでね」

「それだったら、毎日寒いですよ」

舞生はベットの脇に立つと、腰を下げ、寝ている私に視線の高さを合わせた。私の手に両手を重ねる。

触れ合った指先から、私は舞生との大きな温度差を感じ、私は息を飲んだ。その様子に舞生は気付いたのか、「さっきまでテニスしてたんです。グリップ力が弱まっているんですよえ」とフォロワーを入れる。

私は「そうなの」と相槌を打ちながら、一つの感想で胸が一杯になる。

この娘は、まだ長く生きていける。

私は胸に溜まったそれを安堵として吐き出し、舞生の瞳の奥で静かに宿る炎を見た。

その炎は、舞生の眼孔越し私を温め、不思議な安らぎを与えてくれる。

「エアコンの温度、変えましょうか？」

「いや、大丈夫だよ。この体には少しくらい、喝を入れる必要があるんだ」

そう言っただけ私は上半身を引き起こし、エアコンのリモコンを舞生の手の届かない所に置いた。

設定温度は30。

季節が何であろうと、私はその温度を二度と変えることはないだろう。

舞生は、露わになった私の寝間着に毛布をかける。

寝間着の下で鳥肌になっていた私の肌は、毛布の温度の中で、静かに落ち着きを見せた。

「無理はしないでくださいよ。風邪でもひいたら、直人が困るんですから」

舞生は自分の弟の名前を出しながら、私を見つめ、心配そうに笑った。私が様態を崩して一番心配になるのは舞生だろう。悲しくなるのは銅で、寂しくなるのが直人だ。

「大丈夫。その時は、みんなに迷惑をかえないようにするさ」

私はそう言っただけ、毛布を体にかけてながら、両足をリベリウム張りの床に着ける。

靴下越しに床のひんやりとした感触が伝わり、私は直ぐに片足でスリッパを探った。

舞生はベッドから離れ、殺風景なこの部屋に唯一存在することを許された椅子に、ゆっくりと腰を下ろす。

「私は、人に迷惑をかけない生き方なんて、できないと思いますよ」
そう優しく言い放つ彼女は、過去にこの病院から三度の脱走を試みている。

両親の密告により、彼女はこの病院に強制入院された。

この病院は、ある一つの病気を患った者だけをかき集め、患者達を世間から隔離する。

感染の可能性を持つにも関わらず、その病気は外見に症状を現さ

ないため、発見は難しい。定期検診を除き、本人の自白か、本人以外の申告によつて病気であるかどうかを判断される。

舞生は自分がその病気にかかつていたという事と、それを両親が本人に無断で病院に連絡したという事実を受け入れられず、彼女は病院から抜け出そうとした。

が、しかし、彼女は何度も失敗し、その度に自分を見失つていった。

三度目の失敗の後、彼女は病院という枷を自分という殻に置き換え、その殻を自らの手で破こうとした。

自殺を遂げようとしたのである。

その時の彼女の様子を見た私は、生きる意志を喪失した人間の脆さを思い知った。

信じていた両親に裏切られ、出口も希望も無い施設によつて、全てを閉じこめられたのだ。舞生の目からは光が失われ、微弱に繰り返される吐息が、希望の予感を吸い込んで全ても吐き出していた。それはまるで、遊ばれることに疲れた人形のようにであった。

両親の信頼という大切なものを失った彼女は、自身が生き抜いていく上でも必要な力をも失った。

そんな彼女を、弟の直人が支える。

弟の直人もまた、舞生と一緒に入院させられていた。

常に直人は、自暴自棄になっていた舞生の側に立っていた。

やがて舞生は次第に言動を落ち着かせ、一人での日常生活が可能になるまで快復する。

直人という存在は、舞生にとっての必要不可欠なものになっていた。

舞生は自然に微笑むようになり、その隣では直人が穏やかな視線を彼女に送つては、満足そうに彼女と一緒に微笑んだ。

そんな彼女を見て、私は羨ましく思った。

生まれてから一度も、本当に大切なものを失ったことのない私にとつて、彼女の体験はかけがえのないものに思えた。

何かを失って初めてその大切さに気付くように、何も失ったことの無い私は、何も得ることはできない。

本当に大切なものも、そしてそれを心から守りたいと思うような気持ちも、私にはそれを得る資格は無いのだ。

舞生が直人に救われたように、私が誰かに救われる。

そんな事は絶対に起こりえないし、想像する事もできない。

私は一人で自分の命を使い果たし、一人で消えて無くなるのだ。

「アヤトさん？」

舞生が再び、心配そうな目と声色で私に問いかける。

「ああ、ごめんごめん。少しぼーっとしてたよ」

「何か、考え事でもしていたんですか？」

「ちよつとね。くだらない、昔の事さ」

「むかしのこと？」

流石に舞生の前で、彼女の過去を口に出すのは憚られる。

「私が竹刀を振り回していた頃の事。あの時は随分暴れたなあと思つて」

私は咄嗟に嘘をつき、わざとらしく天井を見つめながら、そう言った。

舞生は口元に手をあてて、声には出さず上品に微笑む。

「直人はそんなアヤトさんに憧れてましたけどね。僕もアヤトさんみたいな力が欲しいって」

「えっ」

私は年甲斐にもなく、ドキツとした。

舞生にまでその心臓の音が聞こえてしまいそうな程、私は驚いていた。

「竹刀一本で、悪い男の子達をバサバサ切り倒していったじゃないですか。直人だけじゃなく、私も憧れますよ。正義のヒーローなんですから」

ヒーローという言葉につっかかりを感じながらも、私は舞生に尋ねる。

「直人がそんなことを……………」

「ええ。まるで自分の事を言うみたいで、とても熱心に喋っていましたよ」

直人は基本的に情熱的な男だ。

人の話となると、自分の事より熱意を持って情熱的に語るきらいがある。

「 そうなんだ」

直人の真剣な瞳が適切な角度で覗ける横顔が脳裏を過ぎり、私はその想像にのぼ逆上せてしまうところだった。それを自ら立ち切るように話を切り出す。

「ところで、直人は元気そう？しっかり生きてる？」

「うーん……………元気ではあるんですけど」

言葉と共に重たい何かを吐き出しながら、舞生は少し俯き加減になった。

「何かあったの？」

「あ、いえ。大したことではないんです。直人ったら、最近、部屋に戻ってこない事が多くて……………」

「そうか。それで、本人は何て言ってるの？」

「理由は 教えてくれないんです。姉ちゃんには迷惑かけないから、の一点張りです」

となると、舞生がらみで、直人が何か暗躍しているのだろう。

直人と舞生は同じ部屋で生活している。この施設に定められた規則には反しているが、舞生の自殺未遂事件もあって、二人の同居は管理局に許可されている。

「朝には、しっかり私の隣で寝ているんですけど 何時頃に帰って来てるのかも分からないんです。一度、直人が帰ってくるまで待っていた事もあったんですけど、あまりにも遅くて」

舞生の俯いた顔に落ちた影が、深みを増していく。
深刻なのだ。

直人がそば側にいない時間は、舞生の心に不安を積もらせる。

それが例えほんの僅かな時間でも、毎日続けば、舞生の心の器は不安で溢れ出す。

それを知っている筈の直人は、一体何をやっているのだろうか？
「直人の事だから、大丈夫。 きっと、好きな女の子でもできたのだろう」

心にも無い事を、私は平気で言う。

「そうですかねえ……それはそれで、少し気になりますけど」
「幾分か、舞生の声に張りが戻った。」

「私達が気にすることもないさ。直人はもう十九になるんだし、色々やりたい事も増えてくる」

そう言っただけ私には舞生を説得する。

二人の間を取り持つのは、少しだけ疲れる。

まるで姉弟以上の関係を求める舞生を相手に、私などが割って入る隙もない。

けれど、舞生はどうしても人に放っておかせない娘なのだから、仕方がない。

精神的に不安定な舞生を放っておく直人も直人だが、私も私なのだ。

その時、激しいノックの音が、私と舞生の間を流れていた時間を遮った。

若々しい声が、ドアを突き破る。

「アヤト！勝負しろ！」

うるさい奴が来た。

私は深い溜息を吐きながら、「入りな」とドアの向こうの相手に投げやりに言い返す。

ドアを乱暴に開け、大股でベッドに近づいてきた彼は、持っていた二本の竹刀の片方を私に押しつけた。

彼の勢いに扇動された風が、私の長い髪を揺らす。

「寝てんじゃねえよ。お前は病人か？」

私は彼から差し出された竹刀を押し返しながら、答える。

「アンタこそ何よ、朝っぱらから。寝起きの私を襲って勝とうとするつもり？」

私と彼のやりとりを見て、舞生は驚いた表情のまま固まってしまった。

「寝起きのお前に興味なんかねえよ。変に色づきやがって」

そう言っている側から、私の体から目線を反らそうと必死になっている彼。

そんな分かり易い彼の名を呼び、年長者らしく、私は指導する。

「銅、試合を申し込みたいのなら、もう少し私の機嫌を取りなさい」

「お前の機嫌って、どうやったら良くなるんだよ？」

「そんなの知らないわ。人の機嫌って天気のようなものだから」

「ここからじゃあ天気も何も見えないだろ。そんなの分かるはずもねえよ」

「あら、随分と話に乗ってくれるじゃない？」

銅は眉を少し寄せて、困ったような顔を見せた。

そして逡巡の後、彼は答える。

「それがお前の機嫌取りなんかじゃないのか？」

「『名答』」

私は珍しく頭を使っている銅に感心する。

「小夜にはちゃんと挨拶したの？」

銅は私の言っている言葉が理解できないといった様子で、口をぽ

かんと開ける。

「は？なんでそこで小夜の名前が出てくるんだよ？」

「お前が私に怪我でもさせられたら、小夜が泣くじゃんか」

「んなこと、勝負する前に何で言わなきゃならねえんだ」

「戦に行く前にする事と言ったら、一つと決まっているんだよ」

そう呟きながら、私は彼の誘いに応じる事を決める。

「仕方ないな。今度はちゃんと予約しなよ」

童顔な彼の瞳が、本当の輝きを取り戻す。

「俺の相手をしてくれるのか？」

「なんだよ、急に下手に出て。あんたが持ち出した話だろう？」

やはり幼さを残しながら、銅の頬が緩む。

「よっしゃ！俺、道場で待ってるぜ！」

「はいはい」

「早くこいよ。あんまり待たせると、防具無しでやってもらうからな」

「望むところだよ」

銅は持ってきた竹刀の一つをベットに立てかけ、颯爽と部屋を出て行った。

一瞬で過ぎ去っていた嵐に舞生は目を見張りながら、ようやく動き始めた口で言葉を並べる。

「あの 彼って確か、銅君でしたよね？」

「そうだね。舞生から見ると一歳年下か。あいつのガキっぽさは、いつまで経っても変わらないよ」

「不良グループのリーダーだったんですもの。それでも大分変わりましたね」

「どのあたりが？」私は笑いながら訊ねる。

「そうですね、悪っぽさが無くなりました。邪気が取れた感じですね」

「無邪気になったと？」

「ええ。言葉そのままの意味ですけど、まさにその通りです」

「まあね。もとかからアイツは、あんな風な奴だったのさ。変に悪ぶってみちゃってさ、背伸びをしたがるんだよ。男の子って、大概そんなもんだらう？」

舞生は宙で直人の事を思い浮かべているのか、幸福そうに微笑みながら言う。

「直人は違いましたけどね。でも、他の男の子達が不良になりたがるのは、何となく分かるような気がします」

そんな彼女は、笑みで柔らかく動く唇で話を続ける。

「でも、アヤトさん。大丈夫なんですか？」

「何が？」

「銅君の誘いですよー。今から、剣道の試合をするんですよ？」

「え、あ、まあ、朝の準備運動のようなものだよ。それに暇つぶしにもなるし。流石に一日中ベットのの上というのも、不健康な気がするから」

かと言って、私はこんなことをしてはいられなかった。

私には、やるべき事がある。

残り少ない時間で、私は私のやりたい事を成し遂げたい。

一人で消える為には、たいそうな準備が必要なのだ。

私はそう考えながらも、ベットから立ち上がる。

部屋の隅で肩を狭くして立っているクローゼットに向かい、その扉を開ける。

中で並んでいる衣服は、ほんの僅かしか無い。

私には必要無いのだ。

見せる相手がいない私にとって、着飾る必要は無い。

自分を少しでもよく見せようなどは、考えてはいけなかったし、思わないようにした。

しかしそれは、つい最近までの事だった。

それまでは、そう考えれば良いと、真剣に思っていたのだ。

私は女として生きることが求められず、私も自分に女という性を求めなかった。

けれどそれは、ある一人の男性によつて、徐々に崩されていった。

彼は私を女として見てくれ、女としての私を期待した。

私は半信半疑で彼の言葉を聞いていたが、彼の言葉は、私が一人になった時間に限り、信憑性を重ねて増大させる形で何度も私に語りかけてきた。

「アヤトさんは、美しいんです」

いっそのこと、その言葉と一緒に彼を切ってしまうが良いと思っ

無限の言葉で私を惑わすその口を、塞いでしまえば良いと思った。その張本人の姉である舞生は、少ない衣類の中から私が纏う衣服を選ぶ。

動きやすい格好という私のリクエストを無視し、自分の部屋から持ち出したアクセサリ類を私に身につけさせる舞生は、何やら楽しそうだ。

「ま、アヤトさんに夢中な銅君の相手をするんですから。多少は気合いを入れませんかー」

終いに舞生は、アクセサリと一緒に持ってきた化粧品で、私に丁寧な施しを短時間で済ませる。

「いい加減、アヤトさんも自分のコスメくらい持ってくださいよー。いくら化粧の要らないくらい綺麗なアヤトさんでも、勉強くらいはしておいた方が良いでしょうから」

「はは、そうかもしれないね」

私は頷きながら、自分で自分の化粧を施すのは、死に化粧だろうと胸に決めている。

最初で最後になる、己を飾る作業。

この世から消えて無くなる為の儀式。

私は、成功するだろうか？

綺麗に消えてなくなる事が、本当にできるのだろうか？

私は葛藤しながら、竹刀を持って、銅の待つ道場へ向かう。

道場の空気は乾いていた。

私は大きく息を吸う。

鼻腔に絡みつこうとする臭いは、古く、かび黴臭い。

床に僅かに付着している埃は、空調が定期的に拭きかける息で小さなワルツを踊っている。天井には、快晴を模したスクリーンパネルが全面にはめ込まれていて、時折そのスクリーンに小鳥たちが舞

つては、互いに太陽の恵みを喜び合う。鳴き声は道場の四隅に設置された立体サウンドシステムの賜で、太陽の光はスクリーンに空いた僅かな穴から、大量の熱と光を伴って私達を照らし出す。

このような自然をエミュレートしている施設は、この病院内に無数にある。

一方、本物の空を見せてくれる区画は、この病院内には一つも存在しない。

私達の病気の感染方法が、空気によるものだと決めつけた結果がそこにあつた。

銅は、その道場の中央で正座をしている。

彼の身には防具が着用されており、真面目にかぶった面が彼の顔を隠していた。

私は彼に一步踏みだし、彼の注意を引いた。

彼は私の姿を見て、お決まりの台詞を吐く。

「防具はどうしたんだ？」

もはやそのやりとりは、銅と私が試合をするまでの一連の儀式となっていた。

私は、私の台詞で、いつもと変わらない調子で答える。

「当たらなければ良いんだよ」

私は私の技能を過信している訳ではなかった。

銅の技能を疑っている訳でもなかった。

私は、これまでの相手から直接的な打撃を受けたことは無い。

そして、私の太刀がかわされた事も無い。

よってどんなに成長を見せている銅でも、私の中でのその法則を破ることはできない。

私は防具をつけず、一撃にのみ全てを込める。

そのシンプル過ぎる戦略は、私らしさを表すものでもあり、私の生き方を代弁するに値するものだった。

「今日こそは、防具を付けなかった事を後悔させてやるからな」

「楽しみにしてるよ」

そう言われて銅は立ち上がった。

防具の擦れ合う音が、擬似的な環境音の中で、唯一、生物的な効果音に聞こえた。

私は左手で持っていた竹刀に右手をそつとあて、徐々に、精神を竹刀全体に集中させる。

精神が竹刀によって統一され、意識が高まっていくと、安物のボロボロになった竹刀は、私の手となり、肉体の一部として働き始める。

意識せずに人は呼吸をできるように、私は思考無しに竹刀を振り回すことができた。

頭を使う必要はなく、本能の赴くまま、私は私に剣の技を楽しませる。

それが私に許された、たった一つの快樂らしい。

「舞生、とりあえず、合図頼むわ」

後ろで私を見守っていた舞生は、緊張しているせいか、直ぐには返事を返せなかった。

竹刀の先を合わせた私と銅を見て、ようやく我に返り、舞生は小さな声で合図を出す。

「はじめ」

銅の両腕が、素早く、肩より上にかかげられた。まず始めに天を突く、銅の戦法だ。

私はそれを視認しつつ、半歩だけ引き下がる。そして戦いのピートはあつという間に始まっていた。

銅の竹刀が斜めに弧を描き、私の肩に食らいつこうとする。

私は下段の構えからそれを薙ぎ払った。二人の竹刀が空気の波を作る。

餌を取り逃した竹刀は、動きを補正され、弾かれたパワーを殺しながら中段の構えに移た。

私は振り上げた竹刀の勢いを生かしながら、軽く宙を飛んで、後方に身を引く。

銅の面に隠れた表情に、満足そうな気配を感じた。

私は余裕な素振りを見せる。

「勝機でも見えたの？」

構えを維持したまま、すり足で距離を詰める銅。

「始めから見えていない。　　だけど、楽しいんだ」

銅の二撃目が、私の小手をものにしようとしていた。

私はそれをかわそうとせず、逆に両手を銅の前に素早く押し出し、彼の持つ距離感を狂わせた。

空振りをした銅の竹刀は、私の胸の前で風を切る。

私は両手を前に差し出したその姿勢から、銅の頭を狙うかどうかの選択を迫られたが、あえて追撃を選ぶ事はしなかった。銅が間合いを詰めてきたからである。

私は彼の珍しく攻勢的な姿勢に感嘆しながら、私は構えを整え直し、銅との間合いを竹刀で調整した。

押されたままでは、何が起こるか分からない。

呼吸を整えながら、次の動きを考えていたその時だった。

後ろの方から、聞き覚えのある声が私の背中に伝わる。

「アヤトさん、珍しく押されてますね」

直人の声だった。

私は思わず、彼の方を振り返ろうとした。

そこに銅の追撃が、私の隙を見逃さずに打ち込まれる。

「つつ」

右肩だった。

それは明らかに銅の竹刀であったが、私にとってそれは密度の高い鈍器で殴打されたような衝撃を感じた。

生涯初めての打撲の痛みは、物凄く新鮮味のある刺激では終わらなかった。

打たれた右肩から倒れた私は、情けなくその場で竹刀を横たえる。

「つだ、大丈夫かよっ!？」

打撃を与えた銅自身が、私の瞳に映る三人の中で、一番の動揺を

見せていた。

私は、反復的に襲ってくる割れるような痛さに右肩を押さえながら、苦し紛れに答える。

「年なんだわ。骨もボロボロ」

私の冗談は銅の顔を青く染め、心配そうに私を見つめている舞生の目元には、涙が浮かんでいた。

私は、距離を置いて見守る直人に悪態を吐く。

「直人がこんなところに来たからだよ」

それを聞いた直人が、申し訳なさそうに片手で頭を掻きながら、「通りかかったただけなんです。まさかこんなところでアヤトさんがいるとは思いませんでしたよ」

手を差し伸べる銅に、私は、

「今のは肩だから無効だよね？」

と言いながら、彼の手を借りずに自分で立つ。

銅は差し伸べた手を所在なさに自分の方へ戻しながら、震える顎で頷く。

舞生は耐えきれなくなったのか、泣きじゃくった声で私達に叫んだ。

「もう、試合は良いじゃないですか！？アヤトさんの体調だって、もう、そんなに良くないんですよ………！それなのに」

私は彼女の言葉を遮って、

「良いじゃないか。それでも調子は良い方だし、今のうちにやっておかなきゃ、もう出来ないかも知れない」

興奮する舞生をなだ宥めながら、私は口惜しそうに唇を噛む銅に向き合う。

「だから銅も手加減するんじゃないよ。私にトドメを刺す勢いでかかってきな」

銅は竹刀を握り直し、姿勢を直した。

私は痛みに堪えながら、その場で私を見守っていた直人と舞生に、離れているようにと、注意を促した。

私と銅から距離を離していく直人達を背にして、私も竹刀を持ち直す。

「さあ、始めようじゃないか。お前のためにも、決着をつけさせてあげるよ」

私は回想していた。

何故だろう。

今は銅との試合の最中だ。

昔と比べ、格段に強くなった銅。

体が蝕まれ尽くされそうとしている私が、そんな彼を相手に余裕が出る筈は無いのだけれど。

私は今、試合とは別の事を考えていた。

正確には、思い出していた。

それはそう、少し昔の事だ。

その昔には、まだ直人はいなくて、誰とも出会っていない私はとにかく暴れていた。

暴力の限りを尽くし、この世界を牛耳る何かを壊そうとした。

手には竹刀。

随分すり切れ、風化してボロボロになった竹刀だった。

剣道場の倉庫から持ち出したそれで、私は手始めに医者を襲った。

医者では者足りず、管理官を襲い、看護婦、患者にまで斬りかかった。

人を壊せば、何かが変わるはずだ。

この世界を構成しているこの人間達を破壊すれば、世界も変わるはずだ。

私はその一心で手当たり次第に誰かを襲い、最後には武装した管理官にゴム弾を当てられ、気絶した。

決まって、監獄の中で私は目を覚まし、涙するのだ。

私が何をしようと、例え私が壊し得るもの全てを壊しても、世界は変わらない。

私が変わらない限り、世界は変わらない。

私はこの病院で生まれた。

そして私はこの病院で死ぬ。

その絶対的な法規が私の世界の全てで、その法を執行するシステムがこの病院だった。

だから、舞生の気持ちを知っていた。

舞生がこの病院から抜け出そうとして、失敗し、自殺を試みた事。

私はそれを、批難することはなく、理解した。

こんな世界になら、私は存在しなくていい。

私を苦しめるだけの世界なら、私は私を辞めてもいい。

私も舞生と同様、真剣に考えていた。

幾度となく監獄と病室の間を往復し、ゴム弾の痛みにも慣れ始めた頃。

私は親しい医師を騙し、刃渡りの長いナイフを手に入れる。

私はそれを、調理用に使うとも言った。

まったく料理をしない事を知っている医師は、私の取る行動を知りながらも渡したのだろう。

そして私は、そのナイフを隠し持って、新参者の男の子を捕まえた。

彼の胸ぐらを掴んで、女子トイレの個室に押し込む。

続けて私はそのナイフの柄で彼を殴りつけ、彼の顔を血で染めた。鼻血を流し、殴られ続けながら、その男の子は何も言わなかった。

私は彼を恐怖に陥れるために、更に殴り続けたが、彼は抵抗しなかった。

私はできるかぎりの低音で、彼に言う。

「殺すぞ」

そう脅して、彼はやっと生命の危機を感じたのか、ようやく動きを見せた。

私は心の中で満足に頷く。

彼の手は私のナイフを奪い、私に突き立てる。

私はそれに臆しないように装いながら、彼の腹部を蹴る。

狭い個室で、彼の背中を便器が受け止め、私の蹴撃は壁にぶつかり、激しい音を立てた。

私は彼の闘志をかき立てながら、挑発を続ける。

そして短い間に、私と彼の形勢は逆転し、血みどろになった私はトイレットペーパーを取り付ける金具に、頭を預けていた。

返り血で視界が遮られたのか、一度腕で目を擦った彼が、私に咳いた。

「 僕の目が見えますか？」

私は聞き逃しそうになつたその言葉を、彼の瞳の中に見た。

彼は続ける。

「 僕の目に映る、あなたの姿が 見えますか？」

その言葉は、怒りと悲しみが同じ分量で配分されているながらも、それとは別の感情の咆哮のようにも聞こえた。

「あなたは美しいんです。それを、僕を使って壊そうとするのは、あんまりだ」

銅の面が取れていた。

何故だろう。

続けて私は、自分の行為に疑問を持った。

銅の面は遙か向こうに飛ばされていて、銅本人は、それとはまた別の方角で大の字になって倒れていた。

私は私の両手を見る。

少しだけ汗ばんでいたその手は、その根本で微かな脈動を示して

いた。

「アヤトさん、やりましたね」

そう静かに勝利を讃える直人の声に、私は振り返らなかつた。

私はそのまま倒れている銅のもとに近づき、腰を下ろす。

銅の目はしつかりと見開かれていて、その瞳は曇り空に変わりつつあつた天井を捉えていた。

彼は言う。

「まだ、生きられるんだろ？」

その言葉は、偽りの空に吸い込まれ、暗澹と立ちこめる雲の一つになりそうだ。

「その調子なんだ。お前が死ぬなんて 考えられねえ」

私は垂れ下がる髪の毛を手で払いながら、銅の視界に割って入つた。

「残念だけど、これがお終いだと思う」

銅の溜息混じりの鼻息が、私の言葉を吹き飛ばした。

「残念じゃねえよ。せいせいするわ」

「そう。それなら私も同感だわ」

自然に微笑んだ。

二人の間の空気が、少しだけ味わい慣れたものになったような気がした。

「確かめたい事が、もう一つあつた」

銅は私から目を反らし、首を横に倒した。

「なによ？」

「直人」

「え、ああ そう」

「そう ってのは無しだぞ」

「だったらはっきり訊きなさいよ」

「 どうして、俺じゃ駄目なのかって」

私は銅の質問に対する答えを確かめるように、顔を上げ、直人を見た。

直人と舞生は私達の会話が聞こえないようにと、私達から適切な距離を置いていた。

そんな遠くに見える直人の顔は、埃っぽい空気で霞んで見える、

「ガキっぽい」

私はできるだけ銅が傷つくように、声のトーンを上げずに言った。それに対し銅は、当たり前事を言われたかのように平然とした顔で、私を見据えた。

「それだけじゃないだろ？」

「それだけよ。それ以外の事を言ったら、アンタが私より先に死にそうだし」

「死なねえよ」

銅の口先は尖り、その先から出てくる想いを、私は汲んだ。

「まあ、それほどアンタの事が嫌いじゃなかったから」

「は？」

「そのくらいで許してよ。相手してあげただけでも儲けものでしょう？」

銅は嬉しいのか口惜しいのか、複雑な表情をしながら、そっぽを向いた。

私は立ち上がり、銅に手を差し伸べた。

「お前って今、幸せなのか？」

起きあがりのさなか最中、銅が私に尋ねる。

私は銅の手を離し、床に体を叩き付けようとかと一瞬本気で考えた。

「さあね。アンタから見てどうなのよ？」

起きあがった銅は、背中についた埃を払いながら、素っ気なく答える。

「教えねえよ」

試合の後、私はまっすぐ部屋に戻った。

体中に疲労が溜まっていた。

体力が低下している。

それも、急激にだ。

少なくとも、数日前の私は、こんな軽い運動では何とも思わなかった。

それが今、大きな疲労と共に、無数の針で刺されているような寒気を感じている。

私は肩の痛みと疲労、そして悪寒と戦いながら、ベッドの中へうずくまる。

誰とも会いたくなかった。

毛布の暗闇の中に顔を埋め、全ての熱を自分のものにしようと必死になった。

そんな時、鍵をかけた私のドアをこじ開け、一人の男が入ってきた。

私はその足音を聞き、背筋を伸ばした。

彼はベットの脇に立ち、見下ろす形で私に尋ねる。

「本当は、どうなんですか？」

「寒いよ。特に、直人が入ってきてから急激に」

「それは悪い事をしました」

「そう思ったなら、私を暖めてよ」

私は毛布から顔だけを出し、困った顔の直人を愉快地観察した。

直人は私の腕に手を添えながら、言葉を選んだ。

「僕の手だって、冷たいんですから」

そういう直人の手は、決して冷たくはない。

年齢のせいでもある。

二十歳に近づくほど、私達の平熱時の温度は、低下していく。

しかし、十八歳にもなる直人の手は温かくて、同じ年齢の舞生の手は冷たかった。

私はその理由を憶測はしているが、直人本人には一度も言ったこ

とは無い。

私はその考えを仄めかすように、直人を茶化す。

「本当に冷たくても、今の私の手くらいなら、暖めることはできるんじゃない？」

直人は曖昧に笑い、その手を私の額に移した。

「熱でもあるんですか？」

私はあえてそれを拒もうとせず、直人のされるがままにした。

「あればあったで、嬉しい」

直人は何を考えていたのか、重たい息をふうつと吐き出し、私の額から手を除けた。

彼の目が、真剣さを帯びて静かに光り始めた。

「本題に入りますよ、アヤトさん」

「あーあ。せつかくのお楽しみをそうやって終わらせるのね」

「時間が無いんです。それはお互い様ではないんですか？」

「嫌な事を言う」

「アヤトさんに嫌われる事が、僕の仕事でもありませんから」

私は軋む上体を起こし、枕を腕の中に抱えた。

「日取りは明後日にします」

「突然だね」

「突然です」

そして、直人は表情を変えずに、

「姉さんは連れていけない事にしました」

と、平然とした様子で直人は告げた。私はそれを信じられず、問い返す。

「どうして？舞生と直人が一緒じゃなきゃ、意味が無いじゃない」

「よく考えた上で、決断したんです。姉さんは連れていけない」

悩んだ末の答えなのだろう。

「姉さんを危険に晒すことはできない。たとえ外に脱出できたとしても、姉さんを匿う自信と余裕は、僕には無い」

直人はこの病院を脱出する計画をずっと前から立てていた。

正確には、この病院に収容された時から考えていたらしい。私が直人を使って自殺を試みた時、直人は私を止める為に言ったのだ。

僕たちは閉じこめられたままの一生を、過ごす訳にはいかない。いや、正確には違って、その場をやりきるために繕った、ただの出任せだったのかもしれない。

けれど直人は、あの時から計画を少しずつ立て始め、その旨を私に伝えてきてくれたのだ。

この病院に生まれた私は、直人にとっての最も身近で、最も豊富な情報源であった。

必ず外に出られるんだ。

その言葉は脱出計画の打ち合わせの合い言葉であり、直人の祈りに違いなかった。

「本当は、姉さんを連れていきたい。僕を犠牲にしても、姉さんを外に出してあげたい。でも、それではみんなを助ける事はできないんだ。みんなを、そして姉さんを助けるために、僕は彼らと接触しなければならぬ。」

直人の言う彼らとは、私達の病気を治癒する可能性を持つ夫婦の事だ。

その情報は、ある患者が作成したラジオが受信した電波によるもので、それが噂として院内に広がったものだ。

信憑性はどこにもない。

そのラジオを聞いた人間の聞き違いであるかもしれないし、退院を夢見た患者の単なる妄想である場合も考えられる。

その後、患者が作った手製ラジオは没収された。

希望的な情報と、管理官による隠蔽で幕を閉じたそのエピソードは、噂として患者達の間で肥大しながら、今もなお私達の記憶の中にしぶとく生き残っているだけなのだ。

「僕はほんの僅かな可能性にでも、かけてみなければならぬ」と今でも思っています。絶望するなんて、僕たちにはできないし、許さ

れない。そんなのは、只の甘ったれなんだ」

熱く語る直人を、私は眩しく感じながら見つめる。

「脱出することができなくても、ここに僕たちが監禁されているという事実を、外の世界に伝えなければいけない。この奴らは、治療する気なんて全くない。患者という厄介者を同じ箱に詰め込めて、僕たちが勝手に死ぬのを待っているだけなんだ」

ここの医師達が、私達の病気を治す意志が無いというのははっきり言い切ることはできない。

しかし、私が過ごしてきた二十年の間に、本当に退院したという患者はいないのだ。

年に一度、院内放送で数名だけ退院した者の名前が読み上げられるが、その名前の人間は存在しないことを、管理室のデータベースにアクセスした直人は、しっかりと確認している。名前を読み上げるといふ作業も、私達に暴動を起こさせないためのマインドコントロールに過ぎないのだ。

「明後日、警備の手が薄くなることを小夜から聞きました。人事異動と、装備の換装についての会議で、院内の警備隊の殆どは会議室にいます」

「とは言っても、ほんの僅かな時間でしょ。それに、外の警備とは無関係だし」

「今回の会議は特殊で、外の警備も多少は手薄になるそうです。チャンスなら、その時にしかありません」

チャンスはその時にしかない。

その言葉は語弊があるだろう。発言した直人自身もきつと気付いている。

チャンスは何時だってあって、私達はそれを逃して、のうのうと生きているだけなのだ。

そして今というチャンスも、私の死期に合わせただけの事だ。

私が潰える前に、私と直人は、私を活用しなければならぬ。

「そうだね。やるならその時か」

「はい。使用するルートは、C 4フロアのトイレのダクトから入って、第二管理室に落ちる第三案です。数人は警備員がいると思いますが、力押しします」

「男子トイレ？それとも女子？」

「状況に応じて、です」

もはや三年前の出来事になるが、中坊上がり直人は、女子トイレに連れ込まれた時、内心は心臓がはち切れる程、焦っていたに違いない。

「まあ、それが妥当といったところね。その後はどうするの？」

「警備員室から非常口用の鍵を入手し、外に出ます。鍵の場所は、既に確認しています」

「外に出た後は？」

「そこからは未知です。できるだけ見つからないように走って、病院から離れます。夜の闇が味方をしてくれますが、予報では満月になるそうです」

「月までは、私達の味方をしてくれないってわけね」

「そして、逃げ切った後、民家に駆け込みます。通報されないよう、説得し、もっと遠くへ逃げる手段を探します。場合によっては、追っ手をどうにかしなければならなくなるでしょう」

「一般人を説得するって それに応じてくれなかったらどうするの？通報するかもしれないんだよ」

「その時は、脅すまでです」

「随分乱暴ね」

「覚悟さえできれば、大抵の事はできます」

「そう言う直人の目は少し遠い。」

「度胸あるじゃない」

「じゃなきゃ、計画すら立てられませんよ」

「そうして直人はその後、警備隊の装備の説明を始めた。」

私はその説明を聞きながら、毛布の影で、直人から見えないように必死に両手の指を動かす。放っておけば、今にも脈が止まり、凍

ってしまいそうだ。

「 以上です。荷物は最低限に留めてください。僕は記録用の手帳しか持って行きません」

そう言っただけ直人は、胸ポケットからすり切れた革でかろうじてカバーの役割を果たしているくたびれた手帳を取り出した。その中には、何度も消しては書いた、この病院の事実が記録されていて、本人にしか解読できない粗末な文字たちの、居慣れた住まいと化していた。

「私は何も持って行かないから」

「 そうですか」

少し残酷な事を訊いてしまった。

直人の顔にはそう書いてある。

私が最後まで持つて行ける荷物とは、すなわち物理的法則に従わないもので、往々にして私達が容易には手にすることができないものの事だ。

「ま、私が最高のプレゼントをあなたにあげるから。そう心配そうな顔はしないで」

そう言った私だが、語尾はどうしても上手く発音できなかった。

本当のところ、この計画が上手くいくとは思っていなかった。直人も私に強気な姿勢を見せてはいるが、実際のところはそれほど自信が無いに違いない。

それは直人が立てた計画だから、という訳ではなく、私自身がこの病院の警備の固さを、身を持って知っているからなのかも知れない。

死を許した者以外に、この病院から脱出できたものはいない。その事実は絶対なのだ。

直人は私の顔を見て、何を思ったのか、急に声を強めた。

「生き残るんです！僕も、アヤトさんも」

私はそのように真剣に語る直人を思わず笑い、目元から溢れた涙を震える手でそっと拭いた。

「あ、当たり前じゃない。私、あんたより先に逃げるんだからね。力の無いあんたなんかすぐに置いて、いちもくさんに逃げるんだから」

言葉の角をうまく言い表せられなかった。

どうも言葉は喉の奥で濡れてしまつて、変な丸みを帯びて外に出てしまう。

そんな私を気遣つて、直人は私に手を差し出す。

私は毛布の奥に手を隠し、それを拒んだ。

しかし、直人は諦めず、私の手を追つた。

逃げ惑う私と、それを求める直人の手が一瞬触れ合う。

電撃にも似た衝撃を、その一瞬の中で存分に味わつた。

私は観念し、強く目を閉じる。

二人の温度差を埋めるものは何も無い。

私はその事実を否定するように、閉じた瞼に力を入れる。

この熱を、誰が納得のいくように説明してくれるのか。

直人の熱を、誰が受け入れていいものだろうか。

その両者にも当てはまらない私は、深く、本当に深く息をつき、

直人の手を両手で包み込んだ。

「行こう　そこにきつと、僕たちの未来がある」

そして直人にとっての未来は、私にとってのこの瞬間であつた。

埃だらけのダクトから落ちた私達の先には、会議に出席していたはずの銅と小夜がいた。

その二人の側には数人の警備員がいて、直人が言っていた通りの武装をしていた。

「　皮肉なものだね」

その私の呟きに、直人が頷いたかどうかは見えなかった。

私は誰よりも先に動き、警備員達の動きを制す。

警備員と言つても、院内の患者で構成された、ただの子供である。患者が患者を取り締まるといふシステムのは非を私が論じる事はできないが、少なくともこういうケースに直面した場合、一番の苦勞を強いられるのは彼らなのだ。

銅が私の薙刀をギリギリで受け止めながら、叫ぶ。

「人の巡り合わせつて、こんな残酷なものなのかよっ！」

銅のらしくない発言に私は少し楽しくなりながら、銅の脇腹に薙刀の柄を強打させた。

胃液を吐き出し、銅が倒れる。

「あかがねっ」

自分の吐瀉物に顔をつ突つ込んだ銅を見て、彼の幼なじみである小夜が、目の色を変えた。

銅に駆け寄る小夜。

私は彼女の背後に回り、素早く間接を外した。

力を一気に抜かれ、小夜はその場に立つことができなくなった。

ふなふなと倒れ、銅に重なった小夜は、目だけで直人を追う。

「最後まで、逃げ切っ」

その声が他の警備員に聞こえ切らないよう、小夜の頭を薙刀で強く突いた。

彼女の意識は、一瞬の苦悶の末、銅の腕の中に落ちる。

鍵を手にした直人が、私の手一つで倒れた警備員達を見て、声を落とす。

「ごめん 銅、小夜」

できれば、お前達と一緒に逃げたかった。

直人はそう言いたかったのだろう。

小夜は舞生の親友で、直人とも交友が深い。

彼女と長い付き合いである銅も、直人とは顔見知りで、決して争うべく関係には無かった。

計画の予定にはなかった二人の登場に、私も少し動揺しながらも、直人の背中を追う。

直人が非常扉の鍵を回した。

乱暴に、その扉を押す。

開けた非常扉の向こうには、夜の黒が無遠慮に広がっていた。

その黒を、星々が点々と装飾し、闇の台紙に掲げられた満月は、嫌味な程に輝いている。

不安で塗り固められたその未踏の地に、一筋の光を注ぎ込むように、直人は足を一步先に踏み出した。

私も続いて、闇の中に足を踏み入れる。

初めての空気だった。

初めての風だった。

直人の吐く息は白く、私の吐く息は黒い。

私はその事実には驚きを隠せず、直人の白い息を見て、年甲斐もなくはしゃいでしまった。

「直人の息って、白いんだ」

「そんな事を言っている余裕はありません。今から走ります」
「私達は鉄か何かでできた固く冷たい階段を急いで駆け下り、生の土を踏んだ。」

私の足はその感触に違和感を覚えながらも、前へ前へと進む。

どこからともなく、季節の知らない風が身を切るように強く吹きかかり、私は足を持って行かれそうになった。

倒れそうになった私を、直人が支える。

「大丈夫ですか？」

「あ、ごめん。実はもう、やばかったりするんだわ……………」

直人の支える手が、二人の接点であり、同時に私の温度計になっていた。

私の体温の低さに、直人も気がついていいるんだろう。

「つつすらとですが、ここからもっと行った先に塀が見えます。あそこまで行きましょう」

私はその言葉を頼りに立ち上がり、自分に呼吸を促した。

咽喉に入ってくる空気すら生ぬるく、私は今もなお、季節の感覚

を掴む事はできない。

私達は走り、私は何度も転んだ。

その度に、直人が優しくゆっくりと起こしてくれる。

もう、起こさなくて良いから。

その言葉が胸につかえて出てこない。

私を置いていけば、もっと遠くへ行ける。警備の奴らだって、今に私達の後から現れるだろうし、あの向こうの塀にも、ゴム弾の詰まった銃を持って、今か今かと私達を待ち受けている。

「諦めないんです　アヤトさんは、強い人なんですから　負け
てはいけない人なんですから」

直人の声にも息切れが交じり、体が少しずつ傾斜し始めていた。そんな直人にも必死にならなければ付いていくことのできない私は、転ぶたびに削り取られていった体力を大事に抱えながら、冷えて麻痺しつつある手足を懸命に前へ押し出す。

私達は必死に走り続け、真っ平らな人工芝で続く辺りの景色も変わり映えを見せていた。

直人が息も絶え絶え、叫ぶ。

「もうすぐです　もうすぐ走れば」
その声が、飛来する何かに遮られた。

直人の体かくの字に曲がり、私はその光景を見る。

塀を目の前にしたその前方には、月夜を背景に並ぶ人影が群れを成していた。

その前列の数人だろうか、この距離でもはっきり見て取れる事ができる不気味な黒光りを放つ銃器を、私達に向けて構えている。

直人は私に抱えられた格好のまま、腹部の痛みに悶え苦しんでいた。

私はその腹部をさすり、それがゴム弾による肋骨の骨折であると触診した。

「ちよつと休んでて」

私は直人にそつと言葉をかけ、後ろ手で刃渡りの長いナイフを抜き出す。

薙刀は外に出る前に捨てていて、私にはその武器しか所持することを選ばなかった。

そのナイフは、日本刀の様な妖艶な輝きを放ち、月光と共に周囲の視線を釘付けにする。

勝ち目などない。

私が戦いという言葉を使う場合、それは相手との圧倒的な力の差を感じた時だけだった。

私の戦いに、勝ち目はない。

その予見を覆すこと。不可能と思うことを不可能にすること。

勝てる筈のない相手に勝った時、それが私の戦いにおける勝利だ。

私という人生においての、最大で真実の勝利だ。

だから私は、まだ一度も、勝負に勝てた相手はいない。

この病院を相手にしたってそうだし、この病院にいる私自身にだってそうだ。

本当に勝つということは、絶対にはできないという諦めに近い失望の淵から始まって、希望を道しるべに、その至難で困難な登山を果たすことなのだ。

そして私は、この状況を前にして、二つの負けを認めている。

やはり、この病院という箱庭から出られないという事。

そして、直人に自分の気持ちを告げる事ができなかったということ。

私が私に負けた理由は、直人を好きになってしまったからで、それを伝える事が出来なかった事だ。

どんな人生であれ、必ず何かに限られている。

それは時間的にも、空間的にも。

外の世界の人間は、一見自由奔放に見えて、実際は私達と同じように閉じこめられているのだ。

その人間の人生を制限する正体は、きつとただの現実という檻に過ぎない。

どんな場所でも、どんな時でも、私達人間に現実がつきまとう限り、人間は脱出し続けなければいけない。

こんな絶体絶命な状況を前にして。

今にも凍り付きそうな想いを胸にして。

私はそうやって冷静に考え、思う事ができる。

体だけではなく、静かにそつと冷えて冴えていく私の思考。

そしてその私の気持ちは、一つの希望と願いで収束を得るのだ。

その希望。その願い。

それが、私への、私達患者への、私達人類への、確かな祈りだ。

直人を、脱出させる。

直人を外の世界に逃がさせ、外からこの箱庭を揺すぶるのだ。

祈願（後書き）

未来を限定された少女が
可能性のある少年に全てを託します。

破壊

今、目の前に女性の屍がある。

真夜中、静かな光をたえた満月の下、彼女はそこにいる。

俺は彼女の元に歩み寄り、静かに腰を下ろした。

その顔を、確認する。

それは予想され、想像し尽くした事ではあるが、目の当たりにしてもやはり受け入れ難いものだった。

頬を撫で、触れることのなかった唇に指を沿わせるが、その端正な顔のラインは重力に逆らうことなく、また低く掠れたハスキーな声も、月明かりに照らされた青い夜の空気を振るわせることはなかった。

口の中に薬指を入れる。

薄紅色の唇の中から覗いた白い歯は、唾液でまだ艶やかに濡れていて、節の太い俺の指を抵抗せずに受け入れた。

顎を少し下げる。指先に舌が当たる。

それはまだ確かに温かく、滑りを失っていない。

俺は指でその舌の上に小さな渦を描き、それを徐々に大きくしていった。

指に絡みつくように受動する彼女の舌は、まるで生きているようだと、錯覚する。

錯覚が目的か。

躊躇いもなく二本目の指を入れる。

手の中で最も長く見える中指は、舌の根を弄び、薬指は舌先と戯れた。

二本の指の間で踊らされ、ひたすらに捻られ、揉まれるそれは、その時ねちりと音を立てた。

快楽の末か、苦悶の末か、どちらともつかない唾液の分裂音は、俺を身震いさせた。

そこまでに　するんだ。
そう自分に言い聞かせた。

それでもダンスを止めない指は、既に脳の情報伝達を拒否していたが、俺は諦めずに彼女の声を思い出した。

馬鹿。

死んでも治らないとはお前の事だな。

小夜はどうしたんだ。お前とは一緒じゃないのか？

心から想いを寄せていた女性が、今までに二人いた。

一人は五年前、そしてもう一人は、たった今、俺の前で別れを告げた。

どうもふられてばかりである。

二人とも勝手に行動し、勝手に答えを出し、お前には少しも興味がなかったと、それ以上に正確で残酷な表現が無い方法で、俺に伝えるのだ。

五年前の話をしようと思う。

俺と、幼なじみの小夜、そしてある一人の女性の話だ。

それはまだ、この施設に送られる前の、壁の無い日常生活を送っていた頃の事。

今のように組織の訓戒に縛られることなく、青空と雲を眺めることができた日々の話だ。

俺は唾液で濡れた左手を拭い、右の手を彼女の胸の上に乗せた。

組織の仲間が駆けつけてくるまで、俺はその話を彼女に聞かせようと思う。

彼女に教えて欲しいことがあるのだろう。

俺はそう自認する。

しかし、彼女は口を動かす事もできないし、例え動いたところでまともには答えてはくれないだろう。彼女は冗談が好きだし、俺を

からかうのが心底楽しそうだったからだ。

ただこうして、俺から離れ去っていく者に自分の考えを投影させることで、俺は少なからず救われようとしている。

満月が雲に隠れ始めた。

俺の回想を見守るつもりなのか、闇の時間がたった今始まった。

目を閉じる。

思考を腹に据える。

人は何故、命を他人の為に使うのか？

他人の為に自己を犠牲にすることが、自己の欲求実現なのだろうか。

答えはもうすでに自分の中に持っているのに、俺は彼女に問いかけ始めていた。

闇と、この二人だけの時間が、できるだけ長く続けられれば良いと願う。

*

五年前の母の命日、俺は近所の青果商店から購入したキャベツとピーマンとタマネギを炒めていて、その台所のテーブルの上で小夜は学校の宿題をやっていた。それはもう大分前から続いている日課で、夕方の六時半頃には小夜は野菜の詰まった袋と勉強道具を持って部屋に押しかけるのだ。彼女は言う。今日こそは私が作るんだから。

その時に放送していたテレビから、ある一つのニュースが流れていた。ここからさほど遠くない距離にある大学付属病院の大量虐殺事件についてである。入院していた患者や、その場に居合わせた見

舞客、清掃員、技師、製薬会社の社員、そして教授である医師や研修生、看護師の総勢五百名のうち、三百十七名が負傷、百八名が散弾銃の弾丸や爆発物で死亡した。犯人は十数名からなるグループで、一人を除いて全員が覆面をしていた。

防犯カメラの設置場所は、彼らが進入する前に全て把握されており、破壊されて機能はしなかったが、銃弾を肩に受けて負傷した目撃者が、その一人の似顔絵を書いた。

年齢不詳で、目線がいつも遠く、冗談が好きなのかその緩んだ口元は、俺が仏壇の上で毎日見るその人の表情によく似ていた。その人は五年前、病気で亡くなった事になっていた。

玄関のチャイムが鳴る。

反射的に立ち上がる小夜を制して俺は玄関に向かう。ピンホールを覗き、訪問者の正体を確かめようとしたが、それは相手の指で塞がれ、穴は一切の光を禁じられていた。

再度チャイムが鳴り、ドア越しに声が響いた。「隣に越してきた者ですけど」

俺の後ろに不安げに立つ小夜の視線を感じ、俺は怪しいと思いつつも、そのドアを開けた。

目の前に現れたその女性は、深く頭を下げている。

その姿は小柄で、顔が見えないので年齢は特定できないが、服装から判断すると、それほど年を取っていないように見えた。

顔を上げた時、彼女は後ろ手で持っていた何かを俺の頭を目掛けて振り下ろそうとしていた。反射神経が人一倍鋭い俺は、その不意打ちを避けることができたが、玄関の側に置いてある冷蔵庫にそれはヒットし、一瞬で不快になるような不協和音が六畳二間の空間に広がった。小夜が小さな悲鳴をあげる。冷蔵庫を強打したそれが、楽器であった事に気付いた時、彼女は次の攻撃を繰り出そうとしていた。

ギターのネックを両手で握りしめ、頭上に掲げたそれをそのまま真下に振り落とす。

その単調な動きを読んで、俺は一步後ろに下がると、そのギターは玄関に置かれていた小夜のローファーをもの凄く早さで叩き潰していた。近くにあった俺のスニーカーも弾き飛ばされ、靴の密集した足場に小さな隕石が落ちた様になった。その衝突音として響く四弦の和音に、今度はひびが入ったような弦以外の音が混じる。彼女はその音に重ねて呻いた。

「あああ、やつちゃった」

フレットボードのネック側から数えて丁度十二番目くらいだろうか、丸い印が二つ記された板の部分に、大きなヒビが入っていた。無理もない。石製のタイルで固められている靴置き場にボディを直撃させたのだ。ネックを力点とする以上、高い割合で割れてしまうだろう。

彼女はそれを自分の子供が負った怪我を扱うかのように何度も手でさすり、痛かったね、ごめんね、すごく痛かったよね、と何度も謝っていた。

俺と小夜はその光景を、距離を置いて訝しく眺め、彼女の次の行動を見守っていた。

「素直に当たってればこんな事にならなかつたのに」
そう言つて鋭い剣幕で睨み付けてきた彼女を見て、俺は極めて強い既視感を憶えた。

ニユース、似顔絵、仏壇、写真、そして目の前にいる女性。

その時彼女は、何かに気付いたのかビクツと身を仰け反り、「ああ」とだらしない声を漏らした。そして薄紅色のマニキュアが塗られた爪の指先で俺を刺し、叫んだ。

「ゴメン！人違いだ」

すっかり冷めてしまった野菜炒めを食べながら、俺と小夜は指板にひびの入ったベースギターの行く末を案ずる。小夜から言わせれ

ば、それはアコースティックベースギターと呼ばれるもので、アコースティックギターと同様、生の音でベースギター特有の低音を出すことができる楽器だという。そう言われれば確かにボディの部分はアコースティックギター同様、木で組み立てられた厚みのある作りになっていて、中は空洞である。試しに弦を一つ弾いてみると、床そのものを振動させるような低音がボディ全体から伝わり、確かにCDで聴くようなロックミュージックに使われるエレキベースの音と比べたら、音色や音の滑らかさが全く違っていた。

玄関先で突然襲いかかってきた彼女は、勘違いをして襲いかかったお詫びとしてそのベースギターを俺ではなく小夜に渡し、そのままそくさと去っていた。隣に引越してきたというのは本当の事であつたらしく、隣室に消えた彼女を確認した俺はドアを閉め、鍵を掛けた。小夜が小さな声で同意を求める。「あの人、もしかしたらニューズで映っていた」

ベースギターに強い興味を示す小夜に対し、俺は触ったら駄目だと釘を刺し、次の日にはその楽器を隣の住居区のカミ集積所に出していた。ここなら小夜には見つからないだろうと考えた上での選択であつたが、偶然なのか必然なのか、そのベースギターの元持ち主がそこに現れた。

彼女は体のラインを見せるタイトなジャージで、まるでそこが偶然にもジョギングコースに入っていたという素振りであつた俺に近づいてきた。身構える俺に、彼女はカラカラと笑う。

「この前はごめんねえ。君のお父さんにちよつと恨みがあつたから、少しガツンとぶつけてあげようと思つてさ。そしたら君がいるんだもんね」

俺は訊ねる。

「親父とはどんな関係？」

赤縁の眼鏡のずれを、真っ直ぐ伸ばした右手で上品に直し、彼女は答える。

「知らない方が良い関係」

俺はベースギターを収集箱の中に放り込み、その場から逃げようとした時、彼女は俺の背中に言葉を投げかけた。

「私、明日から先生になるから。クラスも持たせてもらって、もしかしたら君の担任かも。それって良いのかな？」

俺は振り返らずにそのまま部屋に向かい、母の写真を探した。母の顔を、もう一度確かめようと思ったからだ。しかし、写真は見つからない。父の筆筒の中にも、母が作った俺のアルバムのの中にも、母が映っている写真だけが抜き取られていた。

昼間からお酒を飲みながらテレビを眺める親父に、その事を尋ねた。親父は裏返った声で「しらない」と返し、お尻をスラックス越しにポリポリと掻いた。すぐに小夜に電話をし、確認してみると彼女も同じだと言う。

マスコミは新たな情報を散布していた。

舞台は変わっていない。大量殺戮が起きたその大学付属病院である。

ある夫婦が、自らの血液が全ての病気を治す薬になると発表する。現代の医療で治療が困難である病気の幾つかをその方法で完治させており、実証済みであると。今後はその治療のメカニズムを解析し、ゆくゆくは彼らの血液と同等の効果を持つ薬剤を作製すると、ある有名な製薬会社と大学の研究期間が発表した。続いて、県警からは先日の上野の殺人事件は、その夫婦を狙ったものだと説明が入る。俺は中学二年としての初の登校の最中に、腕を組みながら考えた。そもそも夫婦がその事実をマスコミに伝えた意図とは何か。金、名誉？マスコミを利用することで彼らと高値で取引する研究団体が現れるのが狙いだろうか。果たしてそれで本当に現れるだろうか？もしかしたら現れるかも知れない。けれど、それには意味があるだろうか。そもそも、彼らは金を必要として自らの体売っているのか。報

道されなくても、彼らはその能力を使い、十分に儲ける事ができた筈ではないか。

彼らの意図は？彼らの真意は？そんなことは一介の中学生に分かるはずもない。その夫婦が俺の身内でもないし、知り合いでもない。何分、情報が少なすぎるのだ。ニユースの上に突然現れた、不治の病を背負った患者にとつての望みの星は、患者の目に触れることでもますます輝きを増していくのだ。

もしかしたら、それ自体が目的なのか。患者に期待を持たせることが狙いなのだろうか。

思考の方向を修正する。病気に対する不安を無くすこと、それが結果だ。きつと必ず何かが起き、結果はそうなるのだ。近いうちに誰もが望みを捨ててしまうような病気が、これから多くの人々を襲う。俺たちはそこで、何ができるだろうか。その病気に対して、何ができるだろうか。

やはり、結果だけが推測できても、対処はできないのだ。推測が必要なのは原因だ。一斉に多くの人間が病気になる方法とは何か。ウイルス、化学兵器？戦争を前提としたそれは平和ボケした俺たちにとつて真実味に欠け、想像すらできない。

俺がここまで真剣に考えるのにも理由があつた。

小夜の事があるからである。

一連のニユースで小夜は必要以上に怯え、何かを恐れていた。

これから不幸な出来事が俺たちに降りかかる。それはきつと、間違いないのだ。

今、俺にできる事は、それが訪れた時に感じる苦しみを軽減することだ。そのためには備えるしかない。

始業式が終わり、担任の発表は行われた。クラスの担任は、隣に越してきた謎の女性だった。

教室に移動した後、彼女は担任挨拶を行った。

一通りの定型句を述べた後、それは彼女の口から伝えられる。

「近々ね、あなた達は病気になるわ。みんながみんな、その病にか

かるとは限らないけれど、殆どの人が抗体を持っていないと思うの。残念だけどね」

俺は立ち上がったって訊ねた。クラスの視線が俺に集まる。

「そんなことを突然言われても、みんなは信じないと思います。俺もそうです。根拠はあるのですか？」

彼女は緩んだ口元を少しだけ引き締め、瞬きをした。一瞬の沈黙が、教室の空気を緊張させた。

「まあね。あなた達の担任になったばかりの私が、何を言っても信じてくれないとは思うけど」

そう彼女が言い淀んでいた時、隣のクラスのざわめきが、廊下越しに伝わってきた。

中には女子生徒の泣き声も聞こえる。

「この発表はね、オフィシャルなの。始業式で校長が発表すれば一括で済んだのにね。腰抜けは、責任の重さによっては本当に歩けなくなるんだわ」

おかげで担任教師の最初の仕事は、随分大変なものになったようだ。俺は思った。

「そしてね、愛するあなた達には、私だけのおきおきの情報を教えるわ。他言しない限り、この情報は一年くらい隠蔽されるはず」

先生はそう言って、死んだと父から教えられていた母親の名が書かれた黒板の隣に、その病名を綴った。

「冷血病。このネーミングセンスのかけらもない病気は、あなた達の未来を奪うわ。あなた達が生きれるのは二十歳まで。そしてお節介なことに、死期が近づくにつれてあなた達の体温は下がっていくの。最後には凍死に近い状態になるらしい。どうかしら。これって、できれば知りたくない情報よね」

その日の夜、小夜の弟が突然血を吐き出し、病院に運ばれたが問

もなく死亡した。背面に現れた死斑の異常色から、毒物による死とまでは確定できたが、それが一体何の物質によるものかは解剖をしてみなければ分からなかった。宗教上の関係で遺体の引き渡しを拒んだ小夜の両親は、その犯人の説明をも諦めていた。弟が吐血したその夜、弟は二階の自室にいて、誰も出入りをしていないことを母親が確認していたからである。「自殺なのかも知れない」小夜の姉の一言が、両親を決意させた。十三歳の弟は学校から帰宅した後、すぐに部屋に閉じこもっていた。階段ですれちがった姉は、弟の涙を見たという。

絶望で彩られた放課後の空の下に、鈍い流れを続ける河がある。

山の麓の上流では光る水として近隣住民に愛されてはいるものの、中流の生活排水、下流の工業排水によって、光を吸い込む濁った水となる。そのまだ完璧な汚れを身につける前の、中流と言えるそこに一本の細い橋が架かっていた。大型車が並ぶと橋全体が撓むというその早急な改修工事が求められているその下に、俺は小夜の背中を見つけたのだ。春の夕方、下校中の出来事だ。

「アカガネ、偶然だね」

その声は弟の死を迎える前の、普段の調子に近づけるように発声された。

顔は一つの方向を向いて動かない。小夜の両手には捨てた筈の楽器がる。

人は弱っている時こそ、強がる傾向がある。

今の彼女がその時なのだと言いつつ聞かせながら、俺は小夜の隣に座った。

肩が触れるか、触れないかの距離。

「もう少し、もう少しそばに来て欲しい」

楽器を演奏する手を止めず、音の粒と粒の間に、小夜は切なそう

に零した。

俺は演奏の邪魔にならないよう、小夜の背中に身を寄せる。

小夜の演奏する曲は、マイナーコードを多く取り入れていて、明暗の抑揚がないそれは、どのような空気を演出する曲なのか良く分からなかった。

彼女は言う。

「アカガネ、そこから見えるかな。私の正面から、三メートルくらい先の、草むらの中」

小夜が言い示すそこに、放置された雑草の影に隠れて、何かが小さな呼吸を繰り返していた。

彼女は続ける。

「死期が近づいたら、ネコって飼い主のもとを離れるんだよね。この子も、もしかしたらそうなのかも知れない」

革の赤色の首輪が、首もとについている。その鈴はほとんど錆びていて、音鈴を響かせるかどうかは疑わしい。

「ここなら確かに誰にも見つからない。 そうだよな」

この橋の下を死に場所を選んだこのネコは、小夜の演奏の前に、今、何を思っているのだろう。俺は足の膝に肘を寄せ、腕を伸ばして手のひらをネコに見せる。俺の手も、きつと見えていないだろう。ネコの視界を占めるのは、橋架下の影による闇なのか、迎えの国から溢れ出る光なのだろうか。

でもどうして、その楽器を？

俺のその問いは、言葉に出さずとも小夜の耳に届いた。

彼女はふう、と長い息を吐き出しながら、ゆっくりと説明した。

「先生が来た日から教えて貰ってるの。あなたには素質があるって。今まで楽器にはまったく興味がなかったけれど、先生が持ってきた楽器には、凄く惹かれるものがあった。初めて触ったとき、私は何も弾くことができなかった。何も感じていなかったからかも知れない。そんな私に、先生は言ったんだ。今は無理かも知れないけれど、いつか必ず楽器が必要になる時がある。楽器がなければ苦し

くてたまらない時がくる　って」

俺は目を擦り、額を手で抑えた。

「それはそんなに遠い日の事じゃなかった。弟が死んだあの時、とてつもない量の何かの感情が胸の中に一気に沸き上がって、自分で自分を抑えきれなくなったの。その時、偶然先生がそこにいて、私に楽器を渡した。持った瞬間、手が勝手に動いたの。何も考えていない。次にどんな音を出そうとか、まったくそんな意図はないの。ただ勝手に動く体に気持ちを委せているだけ」

コンクリートをも震動させるような低音を響かせるそのベースギターは、四弦だけとは思えない音域を作り、小夜の指は指板の上でしなやかなステップを踏んでいた。その指は、小夜とは別の意識を独自に持ち、彼女はそれに従っているようにさえ見える。

「今なら、このギターだけじゃなくて、他の楽器も演奏できるのかも知れない　」

しかしそれには全く意味はないと、小夜の暗い声色はそう言っていた。

小夜は俺に尋ねる。

「　アカガネは、やっぱり反対なの？」
別に構わない。俺は言った。

「　いいんだ。小夜がそうしたいのなら」

うん、と彼女は頷き、少しだけ表情が緩んだ。

俺は小夜の演奏を聞き入ることにする。

風は優しく、夕陽は温かく、その中で浮遊する音楽は儂く脆い。

楽章があっただろうか。物語が展開するような曲調の変化は、もしかしたら猫の一生を追憶しようとしているのかも知れない。

「練習しようと思って、持ってきたんじゃないんだ。ただ、音が出したかっただけなの。音が胸の中一杯になって、あふれて、どうしようもできなくなっただけ」

小夜は続ける。

「死に対して、私は本当に何もできない。この子にだってそう。こ

うやあって、届くかどうかも分からない音楽を奏でて、それで私自身が満足しているだけ。この子の気持ちを知ることにはできないし、ただ楽になって欲しいと私は願うだけ。その願いを、音にしているだけなんだ。この子、苦しんでいる。今、凄く苦しんでいる。」

死は誰にでも訪れるし、苦しいのも変わらない。

小夜はそれを和らげようとしているだけなのだ。その行為に一切の罪はない。

胸を大きく上下させ、必死に呼吸を続けるネコはその音に耳を傾ける気力も見当たらない程弱り、苦しんでいた。

しかし小夜は諦めず、音楽を奏で続けた。

橋の上では絶え間なく車が騒音を立て、河の流れる先にはセメント工場の煙がうっすらと覗ける。空は次第に夕焼けの赤に色濃く染められ、闇の衣を羽織っていった。

俺はその空間を全て小夜に預け、ただ黙ってじつとしていた。

ネコの体の弾力が失われたのは、星の瞬きが覗け始めた、夜になってからだった。

水葬を提案した俺は、小夜の「不安だから」の一言で説得され、土を掘っていた。その子を埋め、墓標代わりの大きめな花崗岩を置いた後、二人で手を合わせた。

暗闇の中、小夜が云う。

「アカガネは、私に涙を見せたことがないね」

もしかしたら、本当にそうなのかも知れない。

母が死んだと親父から告げられた時、俺はそれを受け入れることができず、声をあげて泣いた記憶があるが、それ以来は確かに涙を流したことはなかったのかも知れない。

「私はさ、アカガネになら見せても良いと思うんだ。恥ずかしい気持ちもあるんだけど、アカガネには私の弱い部分をちゃんと見せておきたいから」

小夜は俺の返事を待たず、足をくるりと反対方向に向けた。

俺との距離が徐々に広がっていく。

「でもね、でもね」

今は小夜の背中しか見えない。それも、闇の中でぼやけて見える程度だ。

「弟の時、私、涙が出なかった。悲しかったのに、泣けなかった」
その声はどうだろうか。俺は感覚を研ぎ澄ませようとする。

小夜のその声は、既に泣いてはいないだろうか。

「胸の中にはね、音が詰まっていたの。悲しいという気持ちが強くなればなるほど、私の胸は音で膨れて、苦しくなった」

小さな背中が震え、俺はその肩に手を伸ばす。

「本当は泣きたかったの。泣こうと思ったの。そうすれば楽になれる。悲しみを証明することができる。けれどね、それができなかった。私にはもう、泣くことができなくなった」

涙を失った代わりに、音を零す。

それは残酷なことなのだろうか。悲しむべきことなのだろうか。少なくとも、それは俺が判断することではないだろう。

それをすぐに受け入れるのは、今の彼女にとって悲しく辛い。それが事実だ。

俺は闇の中で寂しく漂う小夜の背中を捕まえ、手を握った。そして云う。

「悲しみの証は必要ない。俺には、今、小夜が泣いているように見える」

小夜は俺の手と一緒に、自身の胸を苦しそうに掴んだ。

胸の中で何かが暴れ、外に出ようとしているのを必死に抑えているようだった。

ふと、考えてみた。

俺は小夜の代わりに涙を流すことができるだろうか。

小夜が悲しいと思った時、俺はそれを慰める涙になれるだろうか。後ろから小夜を少し強く抱きしめ、空いていた左手で彼女の手を掴んだ。

その手で、俺の頬を確かめさせる。

「泣いてるの？」

訊ねる小夜に、俺は小さく頷く事ができた。

未成年の犯罪が全国的に増加していた。連日のようにメディアを通して報道が繰り返され、社会問題として扱われ始めていた。その内容は国会の議論にも度々登場するようになり、法案の作成が幾つか開始される。冷血病そのものの存在は政府によって隠匿されているせいか、事件の動機は全て「将来への不安」とされていたが、カムフラージュとはいえ、おそらく事実からそれほど離れてはいなかった。冷血病は一つの未来しか約束してくれないのだ。どんなに願おうとも。

遠い都心のニュースだけではなく、実際に地元でも頻繁に起きていた。万引きや恐喝の数は増え、煙草やお酒はほとんど全員が体験し、性体験も同様だった。クラスの四分の一の席が空き、そのうち三名が自殺、一名が他殺された。教室全体の空気が日毎に重みを増し、交わされる会話も乾いていく。

残された者たちが絶対に口にはいけない言葉がある。「どうせ死ぬのだから」「大人になることはできないのだから」「それを理由に努力することを諦めたら、その後何が残されているだろうか。何も残らなくなった者から学校を去り、人によっては生きることすら諦める。

「閑散としてるわね」

新学期が始まった三ヶ月後、先生は朝のホームルームでそう言った。

様々な攻撃的な視線が先生に集められる。

当然の事だった。大人の体にとってはまったく害のないこの病気

は、子供と大人の溝を深くし、頻繁に激しい対立を繰り返していた。死者が出ているのは子供だけじゃない。子供とほぼ同じ数の大人が殺され、中には自ら命を絶つ者もいる。人間は未来がないと知っただけで、何故こんなにも弱くなってしまう生き物なのだろうか。遠いか近いが、ただそれだけの問題ではないのだろうか。

「三ヶ月前のニュースを覚えてるでしょ。あの病院から、天琴夫妻が現れたって話。みんな、どうして信じないんだろうね。病気そのものだって信憑性がないから、そっちだって信じようがないのに。隣国がウイルスを散布したとか、どこかの実験施設から漏れてしまったとか、そんな事実はないんだよ」

原因が不明なのに、結果だけが告知される。あなた達はたった今、病気になりました。突然のその宣告が真実味を持つ筈がない。それが政府からの各教育機関に伝達されたために、みんなが信じているだけだ。先生はそう言う。

「選民試験なのかも知れないのにね。デマを流して、それに煽動されて自ら命を絶つ人は失格。生き残りは合格ね。あ、でも、国民に不安を与える政治ってのもおかしいか」

先生はそう呟いた後、出席を取り、欠席している十数名の名前にチエックマークを入れた。

「そうね。今更だけど、もうそろそろ私も仕事をしつかりやらないとね。せっかくあなた達の担任になったんだもの。あなた達に教えなきゃいけないことを、私はまだ教え切れていない」

黒板に白のチョークが擦り付けられる。その白線が示した二つの漢字は、今の子供達にとっては禁句であり、見たり聞いたりするだけで圧倒的な不快感を感じる言葉だ。

「未来。未来の事を教えなきゃね。あなた達の未来」
教卓の上に両手をつき、先生は身を前に乗り出した。

「それはね、とっても辛いものなの。別に大人になれないとか、死んでしまつとか、そういう意味で辛いんじゃない。ほとんどの人はね、大人になつてから苦しい思いをする」

朝のホームルームは5分だ。一限目の国語が先生の担当であるため、授業に食い込ませるつもりだろう。

「正確には社会という、大人のシステムの一つに構成されてしまうこと。これが最も不幸で大変なことなの。生きるためにはお金が必要であり、お金の為に大人達は労働をする。それが適職ならば良いけれど、人の数だけ個性と適正がある以上、仕事の種類がそれに全て適合する筈がない。絶対に誰かが自分に合わない仕事をしなくてはならないし、それで食べていかなければならない。それが嫌なら職業を転々としていけば良いのでしょうけど、適職が見つからない可能性だって十分にある。むしろ見つからない方の確率が遙かに高い」

彼女の癖なのか、先生はまっすぐ伸ばした中指で眼鏡を直す。

「そんなことにならない為に学校があつて、学生という猶予期間で社会に飲み込まれる為の準備をしなくちゃだめ。とりあえずあなた達はそんな状況下にいるの。もちろんそれはみんな知ってるよね。ただあなた達には危機感が足りない。まだ中学生だからって、自分の将来を定めなくていいと、私は思わない」

十四歳で未来を定める。もちろんそれができる人もいるだろうが、中には一生できない人もいる。

「未来つてね、できるだけ限られた期間の中でイメージした方が良いの。例えばそうね、プロ野球選手になる。男の子の定番ね。これを漠然と目標にしても、なかなかアプローチを立てにくい。野球選手なるには何をすれば良いか。その具体的な方法っていうのはなかなか見えないの。でも未来がもし五年弱しかなかったとして、そこを基準に目標を立てた時、あなた達は何ができるかな。同じ野球選手の手道だったら、18歳で甲子園、19歳でプロデビュー、20歳でメジャーかな。もし、自分がいつ死ぬか分からなかったら、そこまでハードで高い目標は立てられないわ。限りがあるからこそ明確な目標が立てられて、明確な目標だからこそ、目的を達成するため努力ができる。目標を達成できたら、また直ぐに次の目標を立て

る。それって、未来が無いって言えるのかな？むしろ、あなた達は未来を与えられたのではないかしら」

ある男子生徒が立ち上がり、「御託を並べてるんじゃないやねえ」と叫んだ。そのままその生徒は先生に掴みかかり、教卓と先生を倒した。激しい音が鳴る。女子生徒の悲鳴が聞こえた。

嫌な記憶が蘇る。親父の暴力。それは、まだ俺が本当に幼くて、母親がいた頃のものだ。父は母を殴り、母は俺を守って、父のされるがままになっていた。その直後だろうか、母親は俺と一緒に家を出たが、俺は父親に連れ戻され、母は突発的な病気で死んだと教え込まれた。

止めに入った俺は、その生徒を後ろから羽交い締めにしようとしていた。しかし彼が先生を殴ろうとした腕に鼻が直撃し、俺はそのまま後ろに倒れて星を見る。そうしてから他の生徒が動いたのか、周囲は机や椅子のパーカッションで更に激しい音が鳴り、怒声や罵声、悲鳴や泣き声がその中に入り交じる。

先生はどうなっただろうか。天井を仰ぎながらそう思う。

鼻そのものが麻痺しているせいか、その芯の感覚はないものの、周囲がじんわりと温かい。鼻から出る血までが熱く煮えたぎっているようだ。血が熱い　そうか。血が熱いのか。

俺はそれを可笑しいと思った。そしてそれは次第に大きくなり、しまいには声を出して笑ってしまう。だって可笑しいじゃないか。この血が、凍るほど冷たくなる。そんな病気が本当にあるだろうか。

保健室で治療を受けている最中、先生はドアからひよっこり顔を出した。その顔は無傷でケロっとしている。先生は保健医に何かの合図をし、入れ替わりに保健室に入って俺の隣に座った。

「アカガネ君は、良いね。好きだよ」

鼻に張った絆創膏と、頬にできた痣を見て、彼女は目を細めて云う。

俺はその言葉を無視する。

「父親はあんな男なのにね。君は遅しいよ」

腰を寄せ、鼻先に香水の香りが触れる。香水だけではない、大人の女性特有の柔らかい体臭が、潰れた箸の鼻を刺激していた。

「何のために、あなたはここにいますか？」

彼女は窓の外に視線を逃がし、俺はその目を追う。

「あなたは、どうして帰ってきたのですか？」

その質問に、彼女は答える権利は無いといった素振りです、首を横に振った。

「アカガネ君、君たちを救うためだよ。生きる量ではなくて、質を変えるの。それがあなた達を救う方法」

そんな言葉、誰にでも思いつき、誰にでも言えた。

今の大人の誰もが、子供達をあやす為に使う常套手段だ。

「先生は捕まるはずなんだ。あの病院で起きた殺戮事件。あの犯人はあなたの筈だ」

先生は周囲を見渡して保健室に誰もいないことを確かめ、頭の角度を少しだけ落として、目を閉じながら笑った。それは嫌らしさよりも、悲しさが圧倒的に勝った、大人の表情だった。

「そうね。それはアカガネだけじゃなく、他の人も気になっているに違いないからね。それだけは答えておこうか」

先生がその答えを明かしたその日の夕暮れ、一人の女性が空を舞った。デパートの駐車場に咲いた深紅の花は、その三時間後、跡形もなく清掃される。目撃者は地上と屋上、どちらにもいなかった。遺書も残されず、また友人や恋人に残したメッセージも、それを連想される言葉はまったくなかった。しかし遺族は、それを自殺とし、長女の肉体を早急に火葬した。小夜は二人分の位牌を小指サイズの小さな瓶に詰め、机の奥にしまう。「未来ってなんだろうね」小夜が呟く。「未来って、そんなに大事なのかな」

事件が増え、クラスメイトは減り、今までの日常は、ゆっくりではあるが確実に壊れている。それでも季節は残酷にも同じ速度で移り変わり、死の宣告を受けた春は既に遠い過去のものになっていた。そして、小夜の弟や姉が亡くなった夏も、騒がしい蝸の鳴き声だけが耳に残り、後は全て忘却を望まれていた。

午後の教室から、グラウンドを覗く。

授業の声は遠いバググサウンドミュージックとなり、その一切を気に止めることなく、耳の穴から抜けていく。授業をちゃんと聞いている生徒が何人いるだろうか。全国で行われている模擬試験の平均点は、問題の試験の難易度に関わらず低下の一途を辿り、またその受験者数も急激な勢いで減少していた。

紅葉の始まった桜の木の側に、二台の大型車が止まっている。

一つ下の一年生達が、体操着を着て列を成している。その列の先は、二代の大型車に飲まれていた。車のマークは国が運営している医療機関のそれだ。定期検診と公の場で言われるその検査は、半年に一度、二十歳以下を対象とした全員に行っていくのだと言う。先月、議会で提出案が通り、法整備が整ったらしい。表向きは成人病の予防検診だが、その実態は誰もが勘付いていた。

ついにやってきたのだ。不安が確証に変わる。本当に、心から絶望できる時がやってきたのだ。

定期検診を受けなければ、いずれ患者達と同じ末路を辿ることになっていた。冷血病と分かった患者は、最寄りの専門施設に送られる。その施設の名前と所在地は公開されていないが、この地域では、事件の起きた大学付属病院内に建てられた特別棟に収容されることになるだろう。そこに絶対治癒の力を持った天琴夫妻がいると言われ、彼らとの協力により治癒薬を作製することができれば、退院ができると囁かれている。

定期検診の三日後、結果が分かる。陰性、すなわち冷血病にかかっていなければそのまま学校生活を続けられるが、陽性と結果が出てしまうと、これまでの日常は完全に失われてしまう。その確率は六割。約五人に二人しか助からないと、俺は先生から話を聞いていた。とにかく落ち着いていれば良いのだと、先生は何度も俺に言う。何をどう講じようとも、結果は変わらない。後はその事実をどのように受け入れるかだけであると。

教室の前のドアが開き、一年生の生徒が緊張した様子で診察の順番が回ってきたことを告げた。授業は中断され、生徒達は男女二列になって校庭に出る。二台の車の前にはまだ長い列が続いていて、俺が並ぶ列の隣に別の組のクラスが並ぶ。俺は無意識に小夜の顔を探していた。

体育の授業中だったのか、体操着を膝の上にかぶせて寒そうに座る女子達の中に、秋空を見上げて何かの曲を口ずさむ少女がいる。俺は列から離れて、彼女にそっと近づいた。

「血液を採るんだって。先生が言ってた」

小夜は詠うように俺に囁く。それは迷いなのだろうか、目の色は薄く、空の遠い青を映して濡れる。

「私、検査を受けちゃだめだって先生に釘を刺されてる。絶対に良くないことが起きるんだって。今以上に悪いことってあるのかな。もう十分過ぎるのに」

それは先生の脅しなのだろうか。小夜に検査を受けさせない。それはすなわち、病気であろうとなかろうと、病院に送還されることになるのだ。そうなってしまった以上、本当に未来はない。

「先生の言うことは、信じなくていい。あいつが戻ってきた理由、小夜は聞いていないのか？」

小夜は首を振った。

彼女は全てを知っている。そして全てを否定するように首を振る。小夜は全てを教えられたのだ。俺よりも早く。

「でも、私にはこうすることしかできない。私のやるべきこと、そ

れは自ずと分かってくるって先生は言っていたのに、私にはまったく分からない」
その言葉の後半は歌になる。楽器が持てない時には、よくそうしている、

それは認められない現実を前に、ただ泣いている状態と同じだと小夜は嘆く。

涙は何に対して効果を發揮できるだろうか。音楽は誰に対して強く作用するだろうか。

物理的な力を持たないそれは、それを持つ者は、これまでも、これからも、虐げられる。

「私、先生から渡されている薬を飲んでいるの」
そう俺に耳打ちした時、小夜の番が回ってきた。

暗い顔で俯きながら車を出る生徒が、小夜の前を通り過ぎる。

「もしかしたら、私は弟や姉さんみたいに死んでしまいかもしれない。だけど、良いの。もとから未来があるとか無いとかじゃない。単純にそれは受け入れようと思っている」

小夜は俺を正面に据えながら、少しずつ後ろに下がっていた。まるで、今から崖の上で身を投げるかのように切迫している。残念ながらそれは比喻でも何でもなく、実際に小夜は死に対する恐怖に立ち向かおうとしている。

「だけどね、アカガネ。アカガネの未来は、確かにあるんだよ」

小夜の入っていった検診車は、小夜を乗せたままその扉を閉めた。生徒や先生達が困惑している中、その車は徐行を始めた。もう一台の車もそれに続く。検診は打ち切られ、小夜を攫っていった。

ぼうつとそれを眺めながら立ちつくす俺に、先生は後ろから口キックを入れてきた。

一度転び、制服についた砂を払っていると、先生は、

「そんなことやってる隙じゃないでしょ！今から追いかけるわよ」
と叱咤しながら俺の背中を掴み、駐車場へと引つ張られた。赤の軽自動車、車高は低く、シートは二つしかない。先生はリモコンで施錠を外し、俺を助手席に座らせた。「さあ行くわよ」彼女が座席に座ったとほぼ同時に、車は発進していた。急激な移動による反作用により背中中はシートに食い込む。低い音を立てて唸るエンジンは彼女のペットでもあるかのように従順で、無理なステアリングに対しても柔軟に対応するこのマシンは、既に何らかのチューンが施されているのだろう。

カーブの度に車体は俺の体を激しく揺さぶり、三半規管が痙攣し始めてきたところ、ようやく目の前に黒字のナンバープレートが付けた二台の大型車が現れる。「見つけた！」先生はそう叫ぶと、アクセルをより深く踏み、車を加速させた。車体は振動を始める。道路は両側二車線の国道で、正午を二時間過ぎた今ではそれほど交通量は多くないが、法定速度を大きく上回る時速を出す車は危険そのものであった。

先生は目標と車との間にある三台の車を全て追い越し、目標の隣に車を並べると、その軽自動車の薄い金属板で、体当たりを敢行し始めた。鉄と鉄の擦れ合う音が耳を貫き、またそこから生じた火花が膝元に跳ねる。俺は先生の正気を疑い、先生は自車の頑丈さを疑っていた。俺は先生が握るハンドルがそれ以上左に寄らないよう固定し、ブレーキに足を伸ばした。あまりにも無理がある。俺はそう訴え、左のドアが既に内側に反れ曲がっている事を示す。彼女は、それは分かっている、当然の事だという目で俺を睨み返し、アクセルをもっと強く踏んだ。

車は検診車の前に入る。

そして先生はアクセルを離し、ブレーキを叩きつぶすように踏む。強い衝撃が背中を襲った。ガラスの破片が飛び散り、エアバックが作動する。

俺が気絶状態から立ち直った時、ドライバーシートに先生はいなかった。後ろを振り返る。検診車からは煙が立ち上がっていて、中から数人の病院関係者が出てきては咳き込んでいた。

俺は身体に異常がないか軽く確かめ、内傷を気にせず体を動かさうとした。とりあえず、まだ平気のようだ。今のところはまだ痛みは少ない。

何かのセンサーが壊れたのか、それとも正常に動いているのか、警告が鳴り続ける車内から俺は出る。野次馬が、ぼつぼつと現れ始めていた。

小夜と先生は消えていた。

俺は事故現場から素早く離れ、身を隠し、学校の友人に連絡を取って二人の安否を確認した。事故のどさくさに紛れて、先生は小夜を連れて行ったらしい。どこへだろうか。そもそも何故彼女は危険を顧みずに小夜を連れ出そうとしたのか。

その理由はずっと前から予想はできているものの、納得はできなかった。

それも最後まで、彼女に最後に再会するその時でさえ、彼女は何も俺に伝えなかった。

訳が分からないだろう。

彼女の本心が分からない以上、俺がこの出来事を語る上ではどうしても情報が足りないのだ。

最後にもう一つ、思い出してみよう。

これが最後の事実で、彼女の意図を憶測する最も重要な材料になる。

事故のあったその晩、小夜から俺に電話がかかってきた。

その声は、涙が流れなくても、明らかに泣いていた。

「死んじゃったの　アカガネ、私、殺しちゃった　」

俺は小夜からその場所を苦心して聞き出し、その場に駆けつけた。
なんてことはなかった。

その場所は教室である。

秋の夜の闇に雷雨。学校が作り出す必要以上に濃い闇と、天井を叩く激しい雨音に、視覚と聴覚が奪われるその場に、小夜は椅子に座っていた。その小夜に向かい合う形で、先生はいた。背筋を伸ばし、両膝に手を揃えて、目を閉じていた。その睫毛は長く、闇の中に深い影を落とす。

「先生は、私の血を飲んだの。私は拒んだ。だけど、先生が私の腕にかみついてきて　。私の血が、先生の体に流れた」

小夜の血を飲んだ後、先生は整然とした態度で椅子に座った。小夜には向き合って座るよう指示をする。先生の結末を知る小夜はそれに従い、先生は微笑んでこう言った。

「最後の授業をしましょう」

世の中はどうしても上手くできていない。

先生は繰り返し説く。

そう思うようになった瞬間から、君たちは社会というシステムに揉まれ、心を抉られ続ける。それに耐え、何かの手段で削られた心を埋め、再び心は社会によって部分的に破壊される。

だとしたら、どうやって心に付けられた傷を埋めればいいのか。もしくはどうやったら傷付かずに済むのか。その方法はとてもはっ

きりしている。

先生は学校に来る前、例の病院で大量殺戮事件に関わっていた。犯人の目的は、冷血病の患者を収容するシステムの破壊である。システムそのものは冷血病患者を施設に収容し、治療を目的とするものだが、患者を施設に収容することに反対する意見もあり、犯人も収容に異論を唱える人間の一人だという。システムの要は絶対治癒能力を持った天琴夫妻で、彼らを中心にプロジェクトメンバーが構成された。その陣頭指揮を執っていたのが俺と小夜を産んだ母だった。母は十八歳の頃、許婚と結婚し小夜と小夜の姉をもうけたが、小夜を産んだ十ヶ月後に俺の親父に強姦されていて、俺を胎内に宿した。それを夫の子供と誤魔化そうとした母だが、それを見破られ夫に離婚を迫られた。そして母は仕方なく俺の親父のもとに住み着くが、無論、長くは続かなかつた。その間に小夜の父親は再婚相手を見つけ、婚約者に小夜の弟を産ませ、俺の父親は酒に溺れながら日々を摩耗していた。

犯人の目標はプロジェクトメンバー全員を殺害し、その計画を破壊することで、それ以外の殺しは陽動に過ぎなかつた。犯人は国外から傭兵を雇い、病院を襲撃した。先生は言った。

「どの時代、どの場所にも決まり事があって、それを守る者と破る者がいるでしょう。後は規模の大小の違いしかないの。喧嘩も革命も、物理的な闘争を無くしては解決できないの。人間って、本当に痛々しい」

結果として天琴夫妻は助かったが、プロジェクトのリーダーは行方不明になった。そして、犯人も消える。そうして犯人の目的が半ば達成された。しかし、院内で事件に巻き込まれた一般患者は、大量殺戮が行われている混乱の中、犯人の顔を目撃したと云い、その証言を元に似顔絵が起こされた。しかし、事実、犯人の中に顔を伏せていない者など誰一人いなかった。その目撃者が見たのは犯人を返り討ちにしている、先生の顔だった。先生は、犯人の一人を殺してしまつたという。

「その時はもちろん必死だったから、自分が何をしているかなんてほとんど意識できなかったけど、心の奥底では、その行為がとても自然なもののように感じられたの。つまり、使命みたいなものを感じて、それに突き動かされた。自分の身を守りたいという気持ちは少なからずあったけれど、もしそれだけだったら、殺す必要はなかった」

報道には先生の似顔絵が流されたが、警察はその事情を知っていた。そして先生はマスコミに流れたその情報の訂正を求めず、むしろそのまま報道を続けて欲しいと頼んだ。犯人は先生の親友で、その娘は生まれながらにして冷血病になっていた。

「システムに対抗する存在を破壊者と呼称するけど、それは何故か交代制なの。それも命が果てたら、次の人にその使命を移譲するようになってきているみたい。それはとても不思議なもので、いつ誰が破壊者になるかは良く分からないのだけれど、私のように手を下した者に移る時もある。まったく関係ない人に移る時もある。その親友は、本当に突然、破壊者になってしまったと私に告白してきたのでもそんなの、自覚できるわけがないじゃない。急に反政府、反社会的な思想に目覚めた、という事もないから。ただ破壊者に判るのは、破壊者の対となる存在、保護者の存在がなんとなく意識できるようになるらしいの。正義と悪の二軸があるとすれば、何故か自分がその悪の軸側に立ってしまったている。それがなんとなく判ってしまう、感じてしまうものなの。だから、そうなってしまった以上、存在として対立する保護者を否定しなければならぬ。まったく自分の意志とは関係のないところでその使命感はどんどんエスカレートしていつてしまう。嫌な宿命なのよ」

その後、先生には小夜の存在を強く感じるようになったと言う。娘としてではなく、自分と正反対に対立する存在として。否定しなければならぬ、敵として。

「教員免許を持っていたのは私自身の夢だったからそれは必然だとして、アカガネのクラスの担任なれたのは幸運だった。タイムリミ

ツトを設けられた子供達に、私は未来を教えなかったから。アカガネには小夜自身を、そして小夜には音楽を、それを守っていくことの大切さを伝えたかった。保護者はね、なにか特別な力が備わっている場合がほとんどらしいの。システムを守るための手段ね。小夜にはそれが音楽として与えられたと私は思う。だから私は、小夜に楽器を与えた」

それは小夜がまだ幼い時、子守歌の伴奏として使われた楽器だった。低音の響きが、小夜の睡眠を導入したと言う。

「一方でね、私は破壊者としての仕事を全うしていた。小夜の弟、それは私の息子ではないのだけれど、あの子に小夜の血を飲ませた娘にしても同じ。私は彼女を屋上に誘って突き飛ばした。小夜の血にはね、体の中には絶対に入れてはいけない物質が含まれている。それは保護者である以上、能力をもつ故に背負わされる負荷なのか、それともそれが破壊者を制する武器の一つなのか、良く分からないし、確かめる術もない。ただ娘の小夜に、そんな血が流れていることを私は否定したかったし、普通の子であって欲しかった。アカガネにだってそう思う。こんな理不尽な病気に、狂気じみた政府の対応。あなた達から全てを守りたかった。病気とは無縁の生活を、送らせてあげたかった」

よく分からない。

小夜はそう言った。

事實は母親の現れた、とうの昔に告げられていたし、弟や姉を殺したのも、前の母親であることは知っていた。だからこそなのかも知れない。今こうやって、目の前の女性が自殺を遂げたという事が、よく理解できないのだ。俺は言う。

「おふくろは、言ったんだろう。お前の存在を否定したかった。その保護者としてだかなんだかは知らないけど、小夜の体に流れる血

の事を認めたくなかった。だから弟にも飲ませたし、姉さんにも迫った。弟や姉さんはお前のことを信じていたし、おふくろもそうだった。そんなので死ぬはずがない。そんな悪の根源みたいな血液が存在するはずがない。それを、体を張って証明した」

俺は続ける。

「だけど、それは否定できなかったし、小夜の姉さんも自殺をした。おふくろが突き飛ばしたって言ったのも嘘で、本当は小夜の血が原因で死んでしまった。多分、人それぞれ死ぬ方法が異なるんだろう。今とても辛いだろうけど、小夜はそれを認めなくちゃならない。それは乗り越えなくてはならない。こんな事言われて辛いだろうとは思うけど、俺はそう考える」

「嫌だよ」

小夜はそうはっきり言った。

「私、このままでは生きていけない」

小夜は椅子から立ち上がり、顔を歪めて俺に叫ぶ。

「どうして？どうして人に害を与えてまで、私は生きていかなくちやならないの？私にそれほどの価値があるの？私が生きていく価値って何？生きていかなければならない理由が、わたしにあるの？」

俺は返答に窮した。己が存在する理由や価値など、誰にだってすぐに見出せないのだから。存在意義を見つけるために、俺達は色々なものを失い、その過程の中に生きる価値を見い出していくのだ。

俺の沈黙が、小夜の決意を促した。

小夜はその場から逃げ出すように教室を出た。

教室に取り残された俺と先生の死体は、瞬間にして訪れた圧倒的な静寂にただただ飲み込まれた。

俺は俺に問う。

どうすれば良いのだろう。この事態から、どうやって未来を見いだせば良いのだろう。

全ては壊れ、また既に壊れている者も必要以上に壊れ、それらはもう修復が不可能なところまで及んでいる。

小夜は、求めている。彼女の大切なものが、彼女の意志とは関係のない所で次々と奪い去られていく。それも、彼女自身によって。事前にこの事態を読み、押しとどめる事の出来なかった俺は、今こそ、小夜を助けなければいけないと強く心を感じる。小夜が好きだからというわけではなく、大切な妹としてでもなく、一人の親友として、あるいは言葉には言い表せないそれ以上の関係で、俺は小夜を守りたいと思う。

お袋、教えてくれないだろうか。

俺は先生の前に立ち、膝を付いた。

小夜の未来とは、一体何なのか。

それを守らなければいけない俺は、一体何をすればいいのか。

先生は、お袋は、それを教える為に俺の目の前に現れた。

俺はまだそれを、教えて貰っていない。既に教えて貰っていたとしても、それを理解していない。

だから、もう一度。もう一度、教えてくれないだろうか？

俺はリノリウム張りの床に拳を叩いた。

その時、血痕がうつすらと見えた。

俺は先生の口元をもう一度視認する。

それは小夜の皮膚を突き破ったせいかな、少し血で汚れてはいたが、吐血したようではなかった。

俺はもう一度、先生に願った。

教えてくれ。俺は今、どうすればいいんだ？

その問いかけに、先生の口が開いたような気がした。

それは同時に、俺が既に持っていた答えを、自ら反芻しただけなのかも知れない。

小夜は職員室の電話を使って、病院に連絡を入れていた。後数分で学校に着くという。

それを聞いて胸を撫で下ろしてしまった自分に嫌悪する。

「小夜、逃げよう」

俺はそう言ってみたものの、俺自身がその言葉を空空しく感じた。小夜は困った顔で微笑みながら、詠う。

「もう、駄目だよ。逃げ場所がないよ。アカガネにはあるかもしれないけど、私にはない。どこに行っても同じ。私は私自身を変えなければいけない」

俺は小夜との距離を詰めた。

なんてことのない、たった数歩の空間を狭めた時、小夜は一步、後ろに下がった。

「だめ。だめなの」

その言葉に俺は応じない。

逃げだそうとする小夜を、俺は半ば飛び込むような形で捕まえる。

「どうにもならないよ。もう、どうにもならない」

そして俺はその唇を奪い、言葉を遮った。

見開いたその目からは、確かに涙は出てはいなかったが、高鳴る心臓の鼓動を俺は感じた。

やがて彼女の脛がゆっくりと下ろされる頃、俺は小夜のその小さくて薄い唇を噛んだ。

小夜の全身が強ばる。

俺はその硬直した体を解すように、「大丈夫、大丈夫」と諭しながら抱擁する。

そしてゆっくりと唇を離し、俺は小夜の血の味を確かめながら、言う。

「小夜と一緒にいく。そうしなければ、未来は開かれない」

仲間が到着し、彼女の死体は回収された。

その当人に間接を外され動けなくなっていた小夜は、息を切らせながら遅れてやってきた。

「大丈夫か？」

小夜に訊ねると、小夜は黙ったまま頷き、俺の隣に立った。

俺は夜の空に満全と輝く星々を眺めながら、小夜が何かを言い出すのを待つ。

「もう、演技しなくて、良いんだよね」

遠慮がちに確認をする小夜に、俺はできるだけ明るい声で返す。

「ああ。今となっては演技かどうかも分からなくなってしまうけれど、もうアヤトに対して別の人格を装う必要はなくなった。昔の俺に、戻らなくちゃな」

小夜は夜月の様に青白く、綺麗に笑みを浮かべ、

「いいよ、無理しなくて。私の前だけで、アカガネのありのままを見せてくれれば良いから」

そして俺は小夜に言われた通り、少し引きつったような笑い方で目を細めた。

「アヤトは、お袋に似てたんだ。だから俺は、あの時できなかった態度を、アヤトに対してやってみた。対決なんて、俺自身にも良く分からなかった。けれど、結局のところ、俺はお袋に甘えたかった」

「
言っているうちに少しだけ恥ずかしくなって、俺は小夜から目線を逸らした。

その様子を見逃さなかった小夜は、俺の胸に小さな頭を預ける。言葉を並べて会話をするよりも、こうやって体同士を触れ合わせていた方が、遙かに簡単に素直な気持ちを伝えられる。

「うん。いいじゃない、それで」

深い呼吸で隆起する胸の上で、小夜は続けた。

「誰だつて、誰かに甘えたいもの　私も、同じ」

中学二年の秋、小夜は自らの病気を訴え、この病院に入院した。小夜の血液を口に含んだ俺も、彼女の病気に影響を受けた患者として、無理を言つて同行した。

病院の中は、予想していたものよりも遙かに大きく、また広かった。生活に必要な施設は完備されており、部屋も殆どが個室となっていた。一般家庭水準以上の衣食住が提供されているため、俺の生活は以前よりも格段に裕福なものになった。

小夜の病気に關しては、治療よりも先に検査が行われていた。冷血病とは全く異なる病気であるのかかわらず、小夜の病気がこの病院に扱われるということは、何らかの關係があるのだろう。

小夜の担当医であり、医長でもある三十代半ばのその男は、小夜と俺に一つの提案を持ちかけた。患者だけで構成された警備組織を作り、院内の警備力を高めて欲しい。そしてその報酬として、極秘裏で開発されている冷血病の治療薬を得ることができるといふ条件。それはいかにも胡散臭い話で、医長の本当の目的はその治療薬の被験者を捜しているだけのようにしか思えなかった。担当医の依頼で断る事ができない小夜を不憫に思い、俺もその組織に協力をするといふ形で参加したが、小夜は過酷な使役労働に關わらず、常に笑顔を見せていた。俺はアヤトに出会つてから、彼女を治すためとして動機を轉換したが、小夜にとってはずっと同じモチベーションで続けていた。彼女は言う。「アカガネと一緒にいれるなら、私はどこでもいくし、何でも言うことを聞くかもしれない」小夜は冗談が嫌いで、自分で言うのも苦手だ。相手を気遣いながらも、思った事を素直に言ってしまうタイプ。嘘も嫌いだから、そういう人間は利用されやすい。だから俺は、小夜の側について、小夜を利用しようとする者達から守らなければならない。

アヤトと同行して逃走を企て、塀の外に脱出した君高直人に関しては、外部の警察へ捕まえるよう指示を出したが、捕まえたという連絡は未だに帰ってきてはいなかった。

直人の脱走が行われてから二日後、次の要注意人物として彼の姉である君高舞生の名前が会議の中で挙げられる。君高舞生は過去に脱走を試みた事が三度あり、いずれも院内で捕まり重い処罰を受けていた。その彼女が、弟の不在により入院当時同様の不安定さを抱えていると担当医から診断されていた。

君高舞生の監視役として、小夜が抜擢されたが、彼女の親友である小夜にそれが務まる筈もなく、君高舞生は小夜を刺して脱走する。その日もまた、お袋が死んだ、雨の日の夜だった。

刺された小夜は、雨に打たれながら冷たいコンクリートの上で仰向けになっていた。胸には果物ナイフが突き刺さっており、その柄の部分にはガムテープが二重、三重にと巻かれていた。彼女はまた得意の困った笑顔で、駆けつけた俺に言う。

「やっぱり、人を傷つけてまで生きる勇氣、私にはないみたい」

俺は無線で小夜の担当医に連絡をし、直ぐに来てもらうよう叫んだ。

雨は強く、また無情な程冷たかった。

小夜は、ああ、ああ、と呻きながら、手探りで何かを探している。俺はその手を掴み、「どうした？」と訊ねた。すると小夜は不安が拭い去られたのか、笑みを浮かべ、「良かった」と、吐息と共に言葉を放った。小夜の瞳孔が縮小していき、その色も次第に褪せていった。遠くなる視線に、俺は強い不安を覚えた。自然と小夜を握る手が強くなり、その握り返す力も俺の力に反比例して、次第に弱まっていた。

「早く、こうなれば。こうなってしまうえば、良かったのに、どうして、私は、気付かなかったんだろう。どうして」

小夜は気付いた。何に気付いたのか。

俺はそれを訊ねる勇氣を持てなかった。正しくは、それを聞く残

酷さを、俺は持つことができなかった。小夜は細くなっていく呼吸の合間に、

「ああ、そう、そうなんだ。アカガネ、アカガネ　？」

俺は更に小夜の手を強く、優しく握り返す。

「私、我が儘、なんだよ　わがまま、だった　許して、許して、私を、許して　くれるよね」

小夜の担当医から冷血病のワクチンを貰った。彼の運営する警備組織に長年勤めていたという経歴もあるが、やはり小夜の一件が大きく関与していた。彼は言う。「君は冷血病に感染している訳ではないから、この薬を飲んでも効果はないだろう。だが、念のため、飲んでおいて欲しい。これから君が復讐を果たすためには、冷血病が完治したことを保証しなければならないのだから」

俺はその薬を飲み、眠りについた。

次の日の朝には目覚め、支度を調べて病院を出る。

君高舞生を探すのだ。

彼女を見つけたら、まず始めに訊かなければならない。

お前は、誰の何の為に生きているのか？

その問いに、答えてもらわなければならぬ。

お袋は小夜の為に命を使った。

小夜はお前の為に命を使った。

だとしたら、俺は誰の為に命を使えば良いのか？

むろんその問いの答えは、ずっと前から教えられていたのに、俺はそれを自覚できなかった。

誰かの為に、命を奪って良いことがあるだろうか？

大切な者のために、誰かに大切されている者を、葬っていいのだろうか？

俺は思う。何かを奪うそれに、良いも悪いもない。

奪われたら取り返す、それしかないのだ。取り返すことのできな
い命でも、それは同じだ。そこに虚しさしか残らなくても構わない。
人は誰かの為に生きることにはできる。
それが分かった今、俺は実行に移す。
そして未来は、たった今、開かれる。

破壊（後書き）

母親、幼馴染を奪われた少年が
未来は復讐のために開かれるものだと悟ります。

連鎖

高校卒業前の二月に殺される事が決まった。
私が、である。

そこで改めて、未来について考えることにした。
私個人の未来についてだ。

しかし、何も浮かばない。

未来へと続く道を照らす蛍光灯は、一本だ。

それも寿命間近なのか、薄暗くぼんやりとしている。

あと一年と五ヶ月という距離感はなんとなく分かる。

その間に何をすべきなのか、良く分からない。

霞を掴むようである。

私は思考を切り替える。

この時間的制約がかかる前に、私は未来について何を望んでいたのか。

それを、思い出そうとしてみる。

しかし、何も浮かばない。

マズローの欲求段階を引き合いに出してみる。

生理的欲求、安全の欲求、親和の欲求、自我の欲求、自己表現。

全て、クリアしている。

死すら私の欲求を妨害していない。

そもそも私は、何も望んでいない。

そういうことだった。

私は、再確認するようにそれに気付いた。

大きく息を吸い込む。

小さく胸が膨らむ。

「私は、未来に、何も望んでいない」

高校三年生、十七歳が晩年となる私は、帰路に着いていた。私の傘の中には、雨音に溶けるような希薄さで少女が並ぶ。

笹川雛。私は彼女を雛と呼んでいた。

艶やかな黒のお下げ髪と控えめな口元が愛らしく、小柄だけれども均整のとれた体つきだ。

大人しく、徹底的な奥ゆかしさを持つ、私とは正反対の彼女だ。

私はそんな雛に惹かれ、気が付けばいつも行動を共にしていた。

私は彼女を羨望の目で追っていて、彼女のようになればと、何度も願っていた。

「今日ね、彼に話しかけてみたんだよ」

微風のような小さな声で、雛は言った。

彼女から話を持ち出すのは意外だという素振りで、私は大げさに驚く。

「……彼は、たしかあの、着メロマニア？」

雛は頷いた。

同じクラスメイトで、着メロを趣味で作成する男子生徒がいた。

まだ「着うた」が出回っていない頃だった。彼はダウンロードできない楽曲の作成を依頼されては、少額の報酬を得て、新たな機種を買い求めていた。

そんな彼に、雛は惹かれていた。

「作って欲しい曲があるって、お願いした」

「それじゃあ、普通の仕事の依頼と変わらないじゃないか」

私は雛の横顔の柔らかい曲線を眺めながら、指摘する。

「……そう、なんだけどさ」

「まあ、でもあれか。それ以外の事で話しかけるの、難しいからね。あいつ、取っつきにくいし」

「うん」

「それで、何の曲をお願いしたの？」

「それがね、これなの」

彼女は鞆からCDを取り出し、私に見せた。

クラシックのようだが、音楽に詳しくない私には良く分からなかった。

「この第二楽章がね、どこにもないの」

「でも、考えてみれば、雛って着信音設定してないよね」

「うん。携帯電話の音色って、不完全だから。聴いてて気持ち悪くなるの」

「それはまた高尚な理由」

雛は困ったように微笑みながら、CDを戻した。

「それでどうしようね。この後、どうやってアプローチをかけていくか」

「アプローチなんて、そんな……。自然な成り行きに任せたいよ」

私は悩ましく額を抑えて、苦し紛れにアドバイスする。

「うーん……雛もあいつも、奥手だからね。なにかバイアスかけないと、絶対このまままで進展ないよ」

「うん……」

「まあ、そのために私がいるんだからね。一肌脱ぐよ」

「えええ、いいよ、そんな」

そして私達は雛の家の前に着く。

雛は遠慮がちに、私に傘を持たせる。

「忘れないでね」

私は「サンキュ」と返して、それを受け取る。

雛は綺麗に畳まれたシルクのハンカチーフを広げて、頭に乗せる。

「それじゃあ、また月曜日」

私は彼女に手を振って、玄関に消えていく後ろ姿を見送った。傘を強く握る。

雛に月曜日は来なくて、私はこの傘を返すことはできない。

彼女の晩年は、私より早い十五歳である。

事の発端は、一つの暴行事件だった。

高一の夏休み、第二週目の金曜日。

灼熱の太陽が西の空に落ちかけた午後、私は陸上部の練習を終え、プールで全身を解していた。

休日の前とあって、開放されたプールには誰一人いなかった。

誰にも干渉されない流体の中、身体から力を抜き、私は水の音に耳を傾けていた。

羊水の中をイメージする。胎児に戻っていく自分の姿を描いていく。

それは数少ない私の趣味の一つだった。この音を聞くために、水泳部に籍を置いていた。

その音が、男子生徒達の忍び笑いで遮られた。

私は閉じていた目を開き、プールサイドに注意を向けた。

男子の数は七人で、そのうちの二人が唯一の出入り口を塞いでいた。

忍び笑いが下卑た笑いに変わる。

そして私は、蹂躪される。

プールの中で三人が私に入った。

彼らは恍惚としていた。

その後、私は制服に着替えさせられた。

私はその時ようやく、悪い趣味だなと思った。

合宿所に置いていた、私の制服だった。彼らはそれを持ってきていた。

プールの管理棟の裏に抱え込まれ、私は草むらの中で再度犯される。

時折、茜色のそよ風が思い出したかのように産毛を撫でた。私はその匂いを確かめるように鼻から深い呼吸をする。彼らの息切れが子守歌になり、眠気すら覚える。

口元に貼られたガムテープが剥がされた頃には、既に陽は完全に

落ちていて、私は放心していた。

力のない脅し文句を吐き捨て、彼らは逃げるように去る。

その後、私は立ち上がるうとしたが、上手く足に力が入らず、地面に身を預ける形になった。

その様子を密かに覗いていたのか、彼らの中の一人が、辺りを気にしながら私に駆け寄ってきて、手を差し伸べた。

私はその手を拒む理由を見つけれず、彼の補助を受け入れた。

彼は言う。

「早くパンツを上げた方が良い」

私は力なく笑って、

「拭くやつ、持ってない？」

彼は首を横に振る。

「気持ち悪いけど……仕方ないか」

のろのろとショーツを上げていると、彼は草に埋もれていたブラジャーとシャツを見つけてきて、私に着させた。

「意外だったな」

彼はつぶやく。

「私が処女だったってこと？」

「最初の奴は何も言わなかったし、水の中だったから分かり難かった」

私は緩慢な動作でボタンを閉めていく。

「夕焼けに水面が照らされていて、橙色に染まっていた。その中で、赤い筋が無軌道に揺れているのを見たんだ。最初、それが何か分からなかった。煙のように見えたんだ。もしかしたら、それは俺にしか見えなかったのかも知れない。お前の、感情が具現化されたようだった」

真剣に語る彼に、私はついに吹き出してしまった。

「面白いこと言うんだね」

私は続けて、

「けどね、誘導尋問だよ」

彼は首を傾げた。

「処女膜が破れて血が出るって思われがち。あんな乱暴な入れ方されたら、処女じゃなくても血がでる場合があるんだよ」

私はプールを囲うトタン板に背中を預けて、気怠げに息を吐いた。

「それは後付のような言い回しに聞こえるな」

「まあ、そんなことはどうでもいいの」

彼は背中を向ける。

「痛くなかったか？」

「大したことはないよ。痛いには慣れてる」

とは言いつつも、一度診察してもらおう事を考えている。プールの中はまずい。ヒリヒリと、今でも膣の中で激しく炎症が起きている。

彼は離れる。私は云った。

「……雛」

彼は立ち止まらない。

「雛には何も言わないから」

速度も落とさない。

一度も振り返らなかった。

彼はその後、雛の自殺によって姿を消した。

連続失踪事件の最初の被害者になった。

雛に返せなかった傘をさして、私は歩いていた。

雨は止む気配を見せず、一向に降り続けている。

彼女は、今日のような静かな雨の日の放課後に現れる。

彼女の傘を差して帰ろうとすると、いつの間にか隣に並んでいる。

俗に言う、霊というやつだろうか。

彼女はある空間に記憶されてしまったかのように、姿、声を全く変えず、その場で再生される。

私はその映像に合わせて、一緒に歩き、話し、お別れをする。彼女の記憶は、彼女が死んだ一昨年の夏で止まっているが、会話は日によって変わる。

口数が少ないので、何も喋らないまま別れが来る時もある。大抵は私から話題を提供する。

その話題が、彼女の死後の出来事であっても、彼女は相槌を打つ。まるで、今も彼女が生きているような錯覚をする。

死んだのは私じゃなかったのか？

時々、そんな気がしてならない。

むしろそうであつて欲しいとまで思う。

雖が生きて、私が死んでいたら、どれだけ多くの人が喜ぶのだろう。

私は傘を閉じた。

雨を全身に受ける。

そして私は、軽く屈伸運動を行う。アキレス腱を伸ばす。

濡れた髪の毛が肌に張り付いたが、無視する。

私は走り出した。

目の前は病院沿いの一本の大きな通りとなっていて、その長さは一キロメートルを超える。

私の生前に流行りだした感染症の、隔離病棟だ。

それは四方約一キロメートルの塀で囲まれていて、千人は収容できそうな病棟が四つ並列している。その中にはおそらく、病院を機能させる各専門棟があるはずだが、高さにして三メートルの塀は、その詳細を覆っている。

アスファルト上の水溜まりを、固いローファーが弾いていく。

跳ねる雨水が、容赦なく白のソックスに染みを作っていく。

私は加速していった。

生温い風を感じる早さだ。

手に持つ、傘、鞆が空気抵抗によって邪魔になる。

もっと早く走れる。

この状況下でなかったら、私はもつと早く走る。理由はない。

走りたいから、走るのだ。

真っ直ぐな道がある。

走ることができる、道がある。

目の前に道からあるから走るように、明日があるから今日を生きる。

ふと思う。

未来とは、そのような、ごく単純なもの。

明日を落としてしまったら、未来になど意味は無い。

その時、私は目の前の道を見失った。

視界が急激な速度で変化し、一色に染まる。

均一な灰色だ。

それが空だと分かるまで、少し時間を要した。

転んだようである。

上半身を起こし、鞆と傘を確認する。

鞆はしっかり手に握られていて、傘は明後日の方向に飛んでいた

が、折れてはいなかった。

私は安心する。

そして、怪我がないかどうか確かめる。

両肘両膝を軽く擦りむいてはいるが、大した傷ではなかった。

私は立ち上がりながら、泥で汚れた全身を見て、息を吐いた。

汚れる事は嫌いじゃないが、何もない道で転んでしまったのは屈

辱的だった。

辺りを見回す。

もしかしたら、私が転んでしまう要因がそこにあるかも知れなかった。

そこで、私は、彼女に再会する。

雛は私のベッドの上で、唇を紫に変えたまま震えていた。

私は執事から薦められて着替えはしたものの、彼女が心配で、側から離れられなかった。

頭の上にタオルを被りながら、私は彼女の手を握る。

「雛様に似ていらっしやいますね」

執事がタオルと冷水の入った容器を持って、部屋に入ってきた。

私はそれに頷くことはせず、黙って彼女の顔を見つめていた。

額の上のタオルを、執事が取り替える。

「年齢も、お嬢様に近いようです。雛様が生きておりましたら、ち

ようど、このようなお姿だったのではないでしょうか」

「……そうね。そうかもしれない」

執事は、彼女の自殺の理由を知らない。

彼女の両親ですら知らない筈だ。

何故ならそれは、私が殺したからだ。

「お嬢様が彼女を担いで帰宅なさった時には、本当に吃驚致しました。お嬢様も大変汚れていらっしやるようでしたし、彼女も怪我を

されてしまったから」

執事は毛布を上げて、彼女の左太股に巻かれた包帯を確認した。

出血は多くなかったが、拳の大きさほどの痣ができていて、その中心には皮膚を破ってできた窪みがあった。

「……誰かに、追われている。そんな気がしない？」

私の問いかけに、執事は黙って長い瞬きをした。

「病院の側で彼女が倒れていた。足には怪我をなさっている。もしかしたら、あの病院から抜け出して来たのかも知れませんが」

ハンガーに干された、彼女の衣服に目をやる。

それは患者衣には程遠い、至極一般的な女性の普段着だった。

デニムのミニスカートに、フリルの入った黒のブラウス。そして白のミリタリーコート。秋にしては厚着だ。雛の趣味とは少し異なる。

「冷血病、って言うんだっけ？あそこの取り扱っている病気」

「はい。今から二十一年前に発生した感染型の進行性低体温症を、あの病院では専門に扱っています。感染方法に様々な説があります。一番有力なのは空気感染です。主に、十代の少年、少女を中心に発症しているようです」

私は彼女から手を離し、膝の上に手を組んだ。

「確か、段階的に体温が低下していったって、成人前後には中枢体温が二十五度を切るんだよね」

「そうです」

執事は厳かに頷いた。

そして彼女の体温を測り終わった彼は、無言でそっと、私にその温度を見せた。

私は誰にも聞こえないよう、独りで呟く。

「それじゃあ、私より長生きできるね」

翌日の朝、彼女の意識は戻っていた。

部屋に入ってきた私を見て、彼女は毛布で顔を覆う。

「取って食べたりしないよ」

私は執事に渡された朝食を、ベッド脇にある床頭台代わりの簡易デスクに置いた。

「寒くない？」

私は椅子に腰を下ろす。

掛け毛布からひよいと顔を見せた彼女は、ふるふると首を振り、私と目を合わせた。

その目もやはり、雛に似ている。

「ここ、どこですか？」

遠慮がちだが、意志の込められたその明瞭な声に、心地良さを感ずる。

「私の家。あなたが倒れていた所から、それほど離れていない」

私の言葉の意味が分かったのか、彼女は少し不安げに肩を潜めた。

「でも、大丈夫。警察にも病院にも連絡してないから」

「……分かるんですか？私の病気のこと」

「さあね。私は何も知らないよ。それに、あなたの名前もね」

彼女は瞳を閉じ、ゆっくりと息を吐いた。

その息は、その青い顔色のせい、細く見えた。

「……マキ。君高舞生」

私は反芻する。

「マキちゃん。マキさん、なのかな。おいつつなの？」

「十八、です」

「そっか。年、同じだね。私はトイロ。十の色と書いて、トイロって読むの。昔のあだ名はジュッシキだったけど、今じゃ誰も呼ばないな……。性は春川」

本当は十六歳だ。留年か、留学したことにしておこう。

「じゃあ、トイロさん、って呼べば良いのかな？」

「あ、いいよ。年が同じなんだし、お互い呼び捨てにしようよ。その方が楽だし」

私は笑って見せた。

彼女もぎこちなくではあるが、笑う。

「足、痛くない？何かで撃たれたみたいだけど」

「うん。ちよっと痛むかな。動かすことはできるから、大丈夫だよ」

「立てそう？」

「さっき歩いてみたけど、平気だった」

「そっか」

私は忘れないうちにトイレの場所を覚えておく。そして執事の事も紹介しておく。

「両親はいないから、彼に色々面倒みてもらうことになると思う。」

私も頑張るけど、炊事、掃除、洗濯は期待できないよ」

「それって、全部だよ」

そうだね、と頷きながら、相性は悪くないなと思った。
彼女が雛では無いことを、自分に言い聞かせる。

舞生の顔色が良くなって、食事もしつかり摂れるようになった。

「いつまでも、ここにいてはいけないよね」

舞生がそう呟いたのは、彼女を匿って一週間後の夜だった。

私は彼女の側で絵を描いていて、一つは学校に埋めている桜の抽象画だった。もう一つはある少女の肖像画である。

「そうかな？外は危険でいっぱいだよ」

私は、私が通う学校で連続失踪事件が起きている事を簡単に説明した。

舞生は少し怯えた様子で、

「そんなことが起きているんだ……」と呟いた。「けど、お世話になり続けるのは悪いよ」

「私は迷惑じゃないよ。それに、舞生がいた方が楽しいから。遠慮しないで」

舞生はベッドから立ち、窓際に立った。

レースのカーテンの隙間から、外を眺める。

「十色、私ね」

「……なに？」

「やらなきゃいけないことがあるの」

私はデッサンを続けながら、彼女に答える。

「そのために、病院を抜け出してきた」

「……そう。危険を覚悟だった。関係のない人に感染させてしまうかもしれないかった」

明るい声で、

「ま、私に移るなんてことは、全く心配しなくてもいいからね。この通り元気だし」

私は笑って見せたが、舞生の表情は暗いままだった。感染していない根拠は何も無かった。

「だから、次の行動に移らなきゃ、と思う」

舞生は私を見据えて、

「弟を捜しているの」と言った。

私は鉛筆を彼女に向けて、「オーケー」と答えた。「手伝うよ、それ」

舞生は目を見開いて驚いた。

「そんな……二つ返事なんて、おかしいよ」

「確かに」

私は不敵に微笑んで見せた。

「逆に怪しいと思われるかもね」
続ける。

「けれどさ、この通り私は暇なんだし、舞生の病気についても、抵抗は無い。少なくとも、精神面でね。まあ、移ったらそれまでと思ってるから、その点は気兼ねしないで」

「おかしいよ、十色。この病気、最後は死んじゃうんだよ」

その声には力が入っていた。初めて聞く、力強い声だ。

「死ぬこと自体よりも、何もしないで死んでいく方が恐ろしいよ」

舞生の目は少し潤み、何かを言おうとする。

「というのは誰でも言えるから無しにしといて」

「え？」

「論理的に言うとな、舞生にはあまり外を出歩いて欲しくないのよ。それこそ、感染者が増えたら良くないじゃん。だからね、舞生は家でじっとしてて、弟さんは私が連れてくる。それで目的を達成したら、病院に連絡する。それで、どうかな？少なくとも、他の人に迷惑はかからないでしょ」

でも、と舞生は逆接を使おうとする。私は遮る。

「どうせ迷惑がかかるんじゃない。誰がどう生きたってさ。それなら、進んで迷惑を引き受ける人に任せるのが、理に適ってるんじゃない」

ないかな」

舞生は少しの間、胸の中で言葉を転がしていたが、

「……いいの？本当に、いいの？」

と上目遣いで確認する。

「良くなかったら、こういう提案はしないよ」

私はデッサンを再開する。できれば、笑顔の彼女を描いてみたい。

「とりあえず、弟さんの名前、教えてよ」

「……」

舞生はしばらく躊躇っていたが、ついには決心したのか、その名前を述べた。

「……ナオト。君高直人。弟も病院から抜け出しているの。今から、三ヶ月前」

地下焼却炉で分解した肉体を焼きながら、私は面倒な事になったと思った。

舞生の弟捜しを引き受けたものの、最初から手がかりが全くなかったのだ。

独り、また息を吐く。

まだ焼いていない部位が五つ程残っている。

乾燥機に入れられた死体は四肢と頭、胴に分解され、胴は三つに切断される。

焼却炉の投入口に大きさを合わせる為だ。

分解された部位は紙袋に入れて、保管しておき、順番に焼いていく。

煙は外には出るが、目立たないよう、敷地内に設けられた複数のパイプから放出される。

匂いについても問題は無い。敷地外には絶対に漏れない構造になっている。偶然上空を通過したグライダーが少し疑問に思うくらい

だろう。最も、上空を通過するのは飛行機くらいだ。

「お嬢様」

地下室の厚い扉を開けて、執事が私を呼ぶ。

「そのような仕事は私にお任せください」

私は首を振って、「責任を感じてるから、やりたいの」と断った。

「舞生様の事で、ですか？」

執事は訊ねたが、私は答えなかった。

その代わりに、質問する。

「弟の直人君の事、何か分かった？」

「申し訳ありませんが、同姓同名の方なら、まだ病院にいることになっっています」

「君高直人は入院中だと」

「その通りです。ですが……」

執事は白くなつた眉に手を添える。

「過去三ヶ月間に住民登録した方の中で、年齢が同じ人間は絞ることができました」

「何人くらい抽出できた？」

「この地域で絞れば、千人前後です」

「それを風潰しで当たっていくのは、骨が折れるどころか、舞生が灰になつちやいそうだね」

私は焼却炉に目を移して、自分の冗談に、つまらないなと思った。

「それに、そのくらいなら警察の組織捜査で瞬時に分かりそうだね。もしその千人の中に弟さんがいたとして、偽名を使っていたとしても、見つかるのは多分、三日もかからないだろうね。だとしたら、彼は本当に病院の中にいることになる」

「ですが、役所に行つてない可能性の方が高いと思われれます。捕まつていないことを前提として考える時、警察が持っている情報と我々が持っている情報を比較すると、むしろ有利です」

「舞生がいるからね。容姿はもちろん、行動分析も容易い」

「しかし人手に関しても、振興所に依頼をするという手があります

から、立場に違いはないかと」

「そうだねえ」

と私は了承して、

「お金を持っていて良かったと思うのは、こういう時くらいだね」

「失った時に、ますます大切さが身に染みて感じるかと思われませう」

「そうでしょうねえ」

私は手に着いた灰を払いながら、決断する。

「とりあえず、三人ほど雇っておきましょうか。市内に残っている可能性と、市街に逃げた可能性、そして捕まった可能性を検討しましょう」

「承知しました。仰せのままに」

一礼して、執事が部屋から出ようとした。

その時、開けた扉を通して、上の階から舞生の声が聞こえた。

それが悲鳴だと分かった時、私は駆け出していた。

彼女の部屋に向かう。

ノック無しで部屋に入ると、彼女は窓際で床に腰を落としていて、口元に手を当てていた。

私は彼女の肩を抱き、何があったかを訊ねた。

「……彼が、彼が、私を見つけたの……私、逃げなきゃ……今すぐ、逃げなきゃ……」

私は閉められたカーテンを押し分け、乱暴に窓を開いた。

正面に正門が見える。

その真ん中で、黒のネクタイとスーツ姿の男が立っていた。

こちらを睨んでいる。

よく見ると、手には少し湾曲した棒を持っていて、その光沢が一瞬だけ太陽光を反射した。

刀を納める鞘に見える。

男の目が私と合うと、彼は驚いたのか、少し身を仰け反らせた。そして直ぐに逃げ出す。

私は「待つて」と叫ぶものの、それで立ち止まらない事は分かつ

ていたので、彼を追いかける事にした。

一階に降り、陸上部時代に愛用していたランニングシューズを装着して、飛び出すように外に出た。

そして彼が逃げた方向へ、ウォーミングアップ無しで走る。

結局、彼を捕まえる事ができなかった。

彼は誰だったのだろうか。

舞生を知り、舞生を追いかける人物。

身なりは警官のそれとはかけ離れていたし、年も若かった。私と同じか、それ以下だろう。

となると、病院関係者になる。病院は政府直営だから、政府が出てきてもおかしくない。

相手にするには、大きすぎるのかも知れない。

そう考えながら戻ってきた私を、執事が迎えてくれた。

逃げようとする舞生を、取り止めてくれたと言う。

私は礼を言つて、彼女の部屋に事情を聞きに行こうとした時、執事から封筒を渡された。

彼が残したものだと思われず、と執事は意見を添える。

安全確認の為に、執事が既に封を切つて中を確認した。文章は読んでいないという。

私は固唾を飲んで、それを読み始めた。

短い一文だった。

“君高直人は天琴家にいる”

天琴という姓に聞き覚えがあった。

確か同級生に一人、いたような気がする。

執事に確認してみる。

「天琴の姓は非常に珍しく、数も多くありません。おそらく、かの有名な絶対治癒能力を持った夫妻の家でしょう。もつと天琴夫妻とその長男は事故で亡くなっていて、長女しか生き残っておりません」「絶対治癒能力って、一時マスコミに囃し立てられた超能力でしょ」

「事実を目で確認しなければ分かりません」
「そうだね、と私は同意した。」

「……とりあえず、天琴家に、舞生の弟さんがいる？」

「天琴家はここから遠くないところにあります。そこに潜伏するのは、距離的に不可能ではないでしょう」

私は首を傾げる。

「しかし、舞生を追ってる奴がこの情報を提供するなんて、おかしくないかな？そもそも、君高直人だって、舞生と同じで追われる身じゃない」

「確かに仰るとおりです。従って、畏である可能性は十分にございます」

「困ったな。逃げていった彼が何者か分からない以上、こっちは動けない」

「舞生様はご存じのようでしたから、とりあえず伺ってみては如何でしょう？」

「そうするよ。敵の事はなるべく知っておかないとね」

私は階段を昇って、舞生の部屋に向かった。

今度はノックをして、許可を取る。

舞生のか細い声が不安げに響いて、私はドアを開いた。

部屋に入ると少し薄暗かったので、灯りのスイッチをつけた。

瞬間、椅子の上に座っていた舞生はビクツと震えた。

窓にはカーテンがかけられ、鍵が閉められていた。

私は、彼女を安心させるよう努めた。

「もう大丈夫だよ。私が追い払った」

私の手を握り、濡れた瞳で問いかける。

「本当？」

「……ええ。話は聞くことができなかったけど、しばらくは来ないよ」

私は彼が置いていった便箋を開いて、彼女に読ませた。

「畏だとは思うんだけど、行くしかないんだよね」

彼女の目は、手紙のその一文から離れない。

「あの人の事で何か知っていたら、どんな些細な事でも良いから教えてくれないかな。今度会った時さ、どんな対応すれば良いのか分からないから」

手が震えている。

「十色つて、本当はさよ小夜なんじゃないの？」

「え？」

舞生の口から知らない名前が出てくる。

「小夜、本当は生きてたんだよね？私を逃がしてくれるために、わざと刺されて……」

「ちよちよちよ、ちょっと待って舞生。そのサヨって誰よ？舞生のお友達？」

「小夜、もういいよ。もう演技しなくてもいいんだよ」

舞生は私の両腕を掴んで、今度は激しく、私を揺さぶる。

「あかがね銅は私を捜しにきたの。捕まえるとかじゃなくて、きつと殺されると思う。小夜が私に殺されたと思ってるから。銅は復讐しようとしてる」

ここで私は舞生に落ち着かせる前に、私自身が冷静になろうと思った。

彼女の話を整理してみる。

まず舞生は、私をサヨという人物に見立てようとしている。容姿が似ているのだろうか。

そして舞生は、そのサヨの死に関わった。事件が事故かは分からない。

最後に、アカガネという人物だ。憶測だが、先ほど私が追いかけた人物がアカガネなのではないだろうか。アカガネは舞生を捜している。その目的は、サヨの復讐を遂げること。

「まあ、私も舞生が本当は雛だったら良いなあとは思っただけだね」と思わず独りごちた。

「お願い小夜！銅に会って！」

彼女の懇願が、他人事のように頭に響く。

「私、このままだと、直人に会う前に殺される……」

力んだ両腕から薄く青い血管が覗け、生きものだなあと、ぼんやりと思った。

とりあえず、私は返事をする。

「わかったわかった。とりあえず、弟さんのところに行つてくるよ」
その言葉を聞いて安心したのか、舞生の拘束がやっとで解かれた。
「舞生はずっとここにいるんだよ。外に出ちゃだめだからね」
「うん」

私は彼女の肩を軽く叩いて、部屋を後にした。

廊下で待機していた執事に簡単に説明した後、私は自分の部屋に戻り、外出着に着替える。

突発的な運動に備えて、動きやすい服装で揃える。

デニムのハーフパンツにノースリーブを着て、上から薄地のシャツを羽織る。少し寂しいので上からアンシンメトリーのスカートを被せるが、ランニングシューズとの相性を考え、止める。代わりに派手で幅広いベルトでポイントを補う。アクセサリも忘れない。リングはいざとなれば武器になる。

バッグを持ってロビーに出ると、執事がスタンガンと地図を持って、私を待っていた。

「天琴家までの道のりと、緊急時のスタンガンです」

「サンキユ」

私はそれを受け取って、礼を言う。

「電話をかけてみましたが、無言で相手側から切られました」
そっか。靴紐を固く結びながら、応える。

「代わりの者を使わせるという話なんだけど、私じゃなきゃダメみたい。さっきの彼、私と一度会わなきゃいけないみたいだから」

執事は「承知致しました」と言って、頭を下げる。

話が早くて、本当に助かる。

私は館を後にした。

直線距離は近かったが、車は使わない。地下鉄で一回乗り換えて、最寄り駅に着く。

お金があっても、楽はしたくないのだ。

天琴家の前に立つ。

夫婦で一財産を稼いだとは聞いていたが、その住まいは思いの外質素だった。一軒家ではなく、老朽化した木造アパートの一室に、天琴と書かれたネームプレートはあった。

私はインターフォンを押す。マイク、スピーカーは無い。押した後に、それがただのベルであることに気が付く。

二度目の呼び出しで、中から物音が聞こえてきた。

私は少し身構える。

「……だれ？」

それは男の声だった。鼻にかかった声のせいか、少し幼さを感じる。

「春川です。天琴さん、天琴ナキさんはいらっしゃいますか？」

直ぐに反応は無く、中から男の声が聞こえてくる。誰かに話しかけているようだが、男の声しか聞こえてこない。

「ナキとは、どんなかんけいですか？」

「同級生です。少しお話したいことがあって、お電話を差し上げたいんですけど、会話ができなくて。それで直接お訪ねしたんです」

ドアが開いて、中から少年が現れる。

少年といっても、彼もまた、私と同じくらいの年齢に見える。

短髪で精悍な顔立ちではあるが、目にはどんよりとした、頼りない光があった。何かを失い、意志力に欠けたような、諦めに満ちた雰囲気を感じさせた。

私は警戒する。

「……なんのはなし？」

「この住居人について、です。失礼ですが、どちら様でいらっしやいますか？」

彼は私の言っていることが良く分からないのか、困った様子で息を吐いてから、ゆっくり答えた。その声にも、やはり力が無い。

「……よくわからない」

「どういうことですか？あなたの名前をお聞きしたいんですが」

「……わからない。おぼえてないんだ」

はあ、と私は仕方なく相槌を打った。

「でも、ナキが知っている」

変な話になつてきたと、私は内心笑う。

「では、ナキさんとお話させて貰えませんか？」

「……ちよつとまって」

彼はドアを閉め、再び誰かと相談し始めた。しばらくして、再度ドアが開く。

「なかにはいつて」

私は軽く挨拶をして、部屋の中に入る。

まず始めに異臭が鼻を突いた。

複数の匂いが混ざっているが、分解していけば、その一つは食品の腐った匂いだ。学校のゴミ集積所で近い匂いを感覚したことがある。

そして、この異臭を最も異臭たらしめているのは、もうひとつの要素だった。

ワンルームの奥に敷かれた布団と、その周囲に散らばったティッシュペーパー。それらから、汗と精液の濃厚な刺激臭が漂っている。プールの消毒液を濃縮して、それに長期間放置して腐らせた食料の上に乗ぶしたようだ。窓は開いていない。

「天琴さん？」

彼女は布団の上に座って、肩紐の外れたキャミソール姿で私を見つめていた。

スケッチブックを抱えている。片手には黒のマジックペン。

もしかしたら、と思った。

校内で広まっていた噂が、今更になって記憶に蘇ってくる。彼女がスケッチブックのページをめくる。

“こんにちは。かみかわさん”

それは可愛らしい丸字だ。

「もしかして、本当に喋らないの？」

彼女は小さな顎を、縦に落とした。

「……そっか。だから電話に出られなかったのね」

噂は本当だった。三ヶ月くらい前から立ち始めただろうか。

彼女は喋らない。喋られないのかも知れないが、事実、彼女は喋らない。

「ちよつと息ができなくて、窓を開けて欲しいのだけど、お願いできるかな？」

彼女は首を横に振った。

ナキの手を煩わせない為か、隣に立っていた彼が代わりに説明する。

「よくわからないけど、かくしたほうがいいみたい」

その為に窓を開けないという。

気候は晩秋で、温度はそれほど高くないが、換気の足りない空気はあまりにも不快だった。

私は一度外に出て深呼吸をした後、もう一度中に入る。

“どうしたの？”

彼女が書き足したものだ。会話を予測して書かれたものではないようだ。

「ちよつと酸素が足りなくてね」

私は本題に入る。

「君高直人を知らないかな？」

彼女は少し悩んで、ゆつくりと書く。

“きみたかなおと？”

「そっ」

彼女は、立つのに疲れて壁に寄りかかっている彼を見て、答えた。
“ なおと しってるよ ”

そして彼女が指を差す。

まさか、とは思ったが、それは当然の帰結だった。

「ぼくが、ナオト。ナキはぼくをそうよぶ」

摘んでいた鼻から、手を離す。

「君が、君高直人」

彼は頷く。

「…そう、らしい。けれど、ぼくはなにもおぼえていない。ナキにあつまえのことはなにもおぼえていない」

話は妙であるが、簡単だった。

三ヶ月前、天琴ナキは下校中に倒れている君高直人を見つける。

彼をその場で介抱し、家に連れ帰る。

そしてこの状況だ。

君高直人は自分の名前を含む記憶を失っていて、天琴ナキは言葉を口から発することができなくなった。

彼を助ける前までは普通に喋れたと、ナキは言う。

私は天琴夫妻が超能力として取り上げられていた、治療の方法を思い出す。

手のひらにメスを軽く引き、血を皮膚の外に出す。そしてその血を患者に飲ませる。

そうすることで、たちまちに患者の様態が快復するのだ。

折れていた骨は接合し、血管のつまりや悪性の腫瘍は取り除かれる。遺伝子の塩基配列まで変えると噂されたその能力は、様々な検証によって効果が証明されたらしい。

部屋から出てアパートの錆びた階段を降りようとすると、そこに黒スーツの男が立っていた。

私と舞生から逃げた、その人だ。

「君高直人の所在を教えたのは、あなたなの？」

彼は質問には答えず、

「お前は小夜なのか？」

と逆に訊ねてきた。

頭が痛い。

けれども私は機嫌の悪い頭をどうにか動かして、情報を収集することに努めた。

ここは、演じきってみよう。

「そうね。記憶は不確かだけれど、あなたが誰なのか、私は分かる。あなたはアカガネ」

「お前まで、脳に障害が出たのか……？」

その声は、本当に心配しているようだった。

復讐のために舞生を殺そうとしているのだから、小夜という人物は、このアカガネによほど大事に思われていたのだろう。

「……うん。目が覚めたら病院の外にいたの。その前の事はほとんど覚えていない」

彼は視線を落とした。

「舞生に刺されたお前は集中治療室に運ばれた」

彼は続ける。

「……五時間くらい経った後だった。お前の担当医が出てきて、小夜は死んだ、と告げた。俺は居ても立つてもいられなくなって、彼から薬を貰って、病院を出る決意をした。君高舞生を殺すために」

私は平静を装った。

心の中では、小夜という女性を必死に模造しようとしてみるが、あまりにも情報が少ない。

「……そう、なんだ」ようやく出てくる言葉も、ただの同意でしかない。

「そしてようやく君高舞生を見つけた時、お前が現れた。お前は、君高舞生と一緒にいるのか？」

私は恐る恐る頷く。

「うん。前の事は、よく覚えていなかったから。彼女がどんな人か、知らなかったの」

「……そうか。でも、良かった。生きていて、本当に良かった」
そう言っつて、彼が私に近づいて来たので、私は思わず姿勢を構えた。

眉が寄せられる。

「……無理も、ないか」

そんな私を見て諦めたのか、彼は寂しそうに呟いた。

「俺の事は、あまり覚えていないのか？」

私は肯定する。

「名前だけ。あとは良く分からない」

背後を確認した。

いつでも逃げ出せるよう、間合いを置く。

「舞生にお願ひされてるの。直人と会わせて欲しいって」

私は思い切っつて言い出してみる。

「どうして、アカガネは、直人の居場所を教えてくださいなの？アカガ

ネは、舞生が憎いんじゃないの？」

「直人はもう、直人じゃない。別の人間になったんだ」

彼は説明する。

天琴ナキは夫妻の力を受け継いで、病気を治す能力がある。

しかしその能力は不完全で、治療対象者と自身に副作用を残す。

君高直人は記憶を失い、天琴ナキは言葉が喋れなくなった。

「直人は一度病院に戻されて検査を受けたが、冷血病は治っていた。

絶対治療を受けた以上、テストケースとしても価値は無い。だから

彼はここに放置されている」

私は胡散臭い話だと思った。

そもそも万物の病気を治す方法が存在すること自体、非科学的だ。

ましてやその方法が、血液を飲ませるなんていう安易過ぎる。

臨床実験にて立証されているものの、そのメカニズムが解明されない以上、私は信じることはできない。

「ナキ。天琴ナキも、どうしてここにいるの？彼女は政府にとって重要な存在のはず」

「それは分からない。力が不完全だからかも知れないし、政府は既にその技術を解明したのかも知れない。いや、既に解析は終わっているだろう。俺が飲んだ薬も、その技術によって作られたんだ」

「そうだ。もしメカニズムが解明され、治癒のメソッドが確立されたら、表沙汰に出すわけにはいかない。それは国家に独占されるはずだ。場合によっては外交のカードになる。」

「ともかく、二人は誰にもマークされていない。俺たちは感染を防ぐために、君高舞生を殺す必要がある。いや、そんな建前じゃない。俺はあいつに復讐しなきゃいけないんだ」

「でもちよつと待って」

私は反論する。

「私はこうやって生きていくわけだし、舞生を恨んでない」

「それでも、お前の記憶を奪った。そしてまた、お前に接近して何かを企んでいる。俺はそれを未然に防がなきゃいけない。お前の為にも」

私には何も言えなかった。

確かに、舞生が本当は何を考えているのか分からない。

もしかしたら、冷血病から逃げるために何かを謀っているかも知れない。

しかし彼女は言った。「弟を捜している」と。

怪我まで負って、病院から脱出してきた。

だとしたら私は、なんとしても舞生に直人を会わせたい。

「舞生を、直人に会わせた方が良いよ」

「直人に記憶が無いのは確認しただろうか？」

「そうなんだけど、私を殺そうとしてまで、直人に会おうとしたんだもの。舞生はまた抵抗すると思う」

「……抵抗を受けなくて済むなら、そうしたい」

「でしょ？それに、舞生に会わせることで、直人の記憶が戻るかも

知らない。その後、病院に戻ってもらうのも悪くないでしょ？」
そう言いながらも、舞生が病院に戻ることは大きな抵抗があった。

まだ一週間しか共に時間を過ごしていないのに、別れを思うと胸が苦しい。

難に再会できた。

人違いであるのは分かっているのに、私には嬉しいという感情が生まれた。

きっと彼が小夜という女を私に見ているように、舞生もまた、直人を求めているのだ。

背後からドアの開く音が聞こえた。

私が振り返ったその時、中から君高直人が飛び出してきて、私達に体当たりした。

私はその不意打ちに対応できず、階段まで飛ばされた。蹠跟めきながら立ち上がるうとしたとき、近くに階段があることに気付かず、足を踏み外した。

バランスを失った私の身体は、階段を落ちていく。

衝撃の連続を背中に受けた後、頭に何かがぶつかり、そのまま私は意識を失った。

目が覚めると、私は自分の部屋のベッドに倒れていた。

時間の連続性を取り戻すために、時計を探す。

日付は変わっていないかった。しかし、君高直人を探す為に出発した時間から大分経っており、三時間ほど意識が無い状態が続いていたことを知る。

ベッドから立ち上がり、状態を確認する。

服装はそのまま、怪我をしている部分はなかった。

触診して見るが、出血している訳でもなく、また捻挫もしていな

い。
階段から落ちたところまでは覚えている。頭をぶつけて、気絶した。

私は頭髮に軽くブラシをかけてから、一呼吸ついて、部屋を出た。下から話し声が聞こえる。ロビーの方からだ。階段を降りていく。

会話の内容が徐々に明らかになる。

「……だから、覚えてないよ」

直人の声だ。舞生の声が反発する。

「いい加減にしてよ、直人。お姉ちゃんを忘れるわけがないでしょう?」

直人と舞生がソファに座り、舞生は身を乗り出して直人を問いつめている。

ロビーに降りた私に気付いた執事が、私に声をかける。

「お嬢様……！お体は平気ですか?」

「へいきへいき。怪我も全く無いみたいだから、心配しないで。それより……」

執事は私から聞かれるまでもなく、説明を始める。

「お嬢様を助けてくださったのがアカガネと名乗る少年で、彼がお嬢様と直人様をこちらに運んで下さいました」

「アカガネは、どこにいます?」

「申し訳ありません。行き先を聞く機会を得ぬまま、去ってしまいました。連絡先も分かりません」

「ま、また会う事になると思うから、彼の事はいいや。それよりも、直人君だね」

「はい」

「記憶が全くないんだって。病院から出た後の記憶しかないみたい」
「舞生様との会話内容から、そのように察しておりました」

「あれじゃあ、舞生も浮かばれないよね。せつかく命がけで弟を追ってきたのに、その弟がああ様だからなあ」

舞生からの質問に疲れ切っていた彼は、投げやりに返答して、何日も洗濯をしていないようなぼろぼろのスウェットパンツの上から、膝小僧を搔いていた。

「お嬢様を突き落とした理由なのですが……」

「うん」

「直人様はアカガネ様を敵視しているようでして、アカガネ様から逃げようとした際、お嬢様にぶつかったそうです」

「あはは。良い迷惑だね」

私は乾燥した笑いを堪えない。

「敵視する理由は……そうだね。監視されてたからかな？」

「そのようです。一度監視された経験があり、その時に直人様がアカガネ少年を見つけ、衝突したことがあるそうです」

「もう、ほんと、よく分からないね。この状況」

私はソファーに移動し、舞生の隣に座る。

激しく直人を質問責めしていた舞生は、その勢いで私に訊ねる。

「小夜！大丈夫なの！」

ああ、しまった。

私は舌打ちする。

まだ、小夜という認識を舞生から剥がしていないことに、面倒臭さを感じた。どう説明しよう。

「めちゃくちゃ平気。それよりも、どう？感動の再会とまでは、言い難い状況だけど」

舞生は溜息を吐いて、

「まるで人が変わったみたい。前みたいにモノをはきはき喋らなくなったら、態度もだらしくなっちゃって……」

声がますます暗くなる。

「記憶が無い、というのは一時的なものなんだよね？」

舞生のその問いは誰に向けられているか分からなかったが、とりあえず私が答える。

「そうだったら良いんだけどね。何かの拍子に思い出すかも知れな

「い」
場合によつては、一生思い出せないかも知れない。でも、それは
言わない。

「直人、小夜だよ。小夜を見ても、何も思い出せないの？」

直人は私をちらつと見て、

「さつきはごめん」と直ぐに視線を逸らした。

なかなか悪い印象を与えてくれる。

私は少し苛立って、

「何も覚えていないようだね。そもそも私は小夜じゃないんだけど
舞生が慌てる。」

「さ、小夜もね、記憶がないみたいなの。直人と一緒」

「へえ」

気のない返事をする直人。

「直人君と一緒にいたナキさんのことだけど」

直人の関心をひいてみる。

「なんですか？」

「彼女とは、助けて貰ってからずっとあの部屋で？」

「うん」

「素晴らしい性生活を営んでるみたいだね」

「な、な、何の話ですか？」

間に入ってくる舞生を、手で制する。

直人は額にかかる前髪を邪魔そうにかき上げて、答えた。

「ナキのこと、すきだから」

「それは構わないんだけどね。ちゃんと避妊させてるの？」

「ひにん？なにそれ？」

「舞生さ、弟にちゃんと性教育させた？」

舞生は顔を赤らめる。

「知りませんよ！そんなの」

「ま、記憶ってここまで落ちるものなのかなって。確認までにね」
「ぼくがなにか、わるいことしてるの？」

「うん。最悪だね」

私は足を組み直して、

「ナキ、いくつか知ってるの？」

「知らない。どうでもいいよ」

「愛は年齢を超えられるかも知れないけど、経済問題は解決できないと思うな」

そして私は、今日何度目か分からない溜息を吐いて、

「子供できても、面倒見てくれる人がいないでしょ」

「ぼくとナキでじゅうぶん」

「は？何が十分よ。そもそも、あなた、働いているわけではないでしょう？」

「おかねなら、ナキがもってる」

語彙力に対して、理解力はあるようだ。私はそれを不自然に感じる。

「両親の財産はあるかも知れないけど、問題はお金だけじゃないよ。子供を育てるのだから、色々な知識とか、人の助けが必要だよ」

舞生は事実がうまく飲み込めていないのか、啞然としている。

「ともかく、ふたりでやってく」

私は少し考えてみた。

もしかしたら、今この場で、未来に可能性を残すのは彼だけなのかもしれない。

それを考えると、私が口を挟む権利は無いように思えた。

私は来年にはいないし、隣の舞生だって、二十歳までが精一杯だ。

「舞生、どう思う？」

私は舞生に意見を求める。

彼女が、直人に記憶が戻ることを願っているのは明らかだった。

直人に記憶が戻らない事を前提とした時、舞生はどうするつもりなのか。それが聞きたかった。

残された未来は僅かしかないのだ。

「私は、直人の記憶が戻るまで、諦めない」

直人をしっかりと見据えて、彼女は言う。

「それまで、病院に戻りたくない」

執事がようやくアールグレイを持ってきてくれて、私はそれを受け取った。

私は執事に確認する。

「この館の住居人があと二人増えたら、問題無いか？」

「全く問題ありません」

眉を少したりとも動かさずに答える彼に、私は信頼を重ねる。

「ねえ、こういうのはどうだろう」

私は舞生と直人に提案する。

「直人君とナキさん、この館に住む気はないかな？」

直人はどうして？と言葉に出さず顔に出した。

「舞生は直人君と一緒にいたいと思うし、直人君もナキとは離れられないと思う」

二人は、躊躇いがちではあるが、確かに頷いた。

「今の状態だったら、舞生が直人君の所に通い詰める事になると思う。だけど、それだと舞生がいつかは見つかって捕まってしまう。」

それなら、住まいごと移して欲しいと思うんだ」

直人は反論した。

「ぼくは、いきたくない。ナキだってそういう」

予想通りだ。

「二人であるまま生活していると、病気になって死んじゃうよ？」

脅してみる。

「びょうきにはならない」

「生まれた子供は、そうとは限らない。あなた達には生活能力がないもの」

そういう自分も家事能力がゼロなのは、この際棚に上げておく。

「うちはお金もあるし、家もこの通り広いから、何人来たって平気なの。むしろ賑やかな方が楽しいし」

直人は考え込んでいるのか、俯いた顔は上に上がらない。

「ナキさんも、きつと助かると思う」
舞生が加勢する。

「直人、とりあえず小夜のお世話になろうよ。それから、今後の事、考えよう?」

直人は首を縦には振らなかった。

代わりに、私と舞生を見てこう答える。

「ナキに聞いてみる」

そして直人と私で天琴ナキの部屋に向かうが、そこには彼女がいなかった。

その代わりに、体液が十分に染みた布団の上に果物ナイフが突き刺さっていた。近づいてみると、便箋が貫通されているのが見えた。私はナイフを抜いて、折りたたまれた便箋を開いた。

“天琴ナキと君高舞生を交換したい。今日の午後十時、向かいの神社にて待つ”

決闘状みたいだな、と思った。中学の時の頻繁に受けたそれを、苦い記憶と共に思い出した。

私は窓を開けて、換気がてら、“向かいの神社”を確認する。

確かにそこには、私の館の敷地と同等の広さを持った神社があった。外灯の数も少ない。表沙汰にできない取引をするには格好の場所だ。

直人が「どういういみ?」と私に聞いてくるが、私は何も答えない。

「ナキはどこにいった?」

「知らないよ」

「おまえが、ナキをかくしてる?」

それは面白い言いがかりだ。

「そうかもね」

「けど、よく考えてみなよ。私がナキをさらって、何の意味があるのさ？」

「いみなんかない。ナキがほしいから、ナキをかくした」
直人は鋭い目で私を刺す。

「あ、そっか。ナキが欲しい理由、私にはあるんだ」

ナキの絶対治療能力。それを使えば舞生を治せる。

今日の前にいる直人が、現に治ったらしいのだ。

「ナキを捕まえて、舞生に血を飲ませる」

窓枠に腰を乗せて、腕を組む。

「私には無理だよ。ナキを連れ去る時間はない。ナキに何らかのメッ
ッセージを残して、後でさらうという手もあるけど、私には彼女へ
の連絡手段が無いよ」

胸元の栗色の巻き毛につい指を絡める。私が考える時の癖だ。

このような事態にならなければ、もしかしたら私はナキを攫って
いたのかも知れない。

「普通に考えてみなよ。あのアカガネってやつだよ。ナキを誘拐し
たのは」

「アカガネ？」

「ああ、そっだよ」

アカガネ、アカガネと直人は繰り返しながら、部屋の周りをぐる
ぐると回り始める。

直人の足で押し退けられるカップラーメンの容器と割り箸の山が、
汁をこぼしながら崩れた。

私は鼻孔を塞ぐ。

「あいつはどういうつもりかは知らないけど、やはり舞生に復讐し
たいんだろう。小夜の記憶を殺された。おそらく、そんなところか」
「アカガネは、どこにいる？」

「こつちが聞きたいよ」

体が重くなる。思考するのが億劫になる。

「とりあえず、家に戻るよ。ちゃんと作戦を練っておこう。今午後

五時だから、あまり時間ないよ」

事態の展開は早く、明らかにおかしい方向に転じていた。

一日の出来事にしては退屈しない内容だけれども、私は緊張感に欠けていた。

つい欠伸が出る。

現実味に欠けているせいだろうか、茶番のような気がしてならないのだ。

執念の籠もった眼差しで前を歩く直人を余所に、私は止まらない欠伸をかみ殺した。

私達は舞生が待つ館に戻った。

そして直人は、記憶を取り戻した。

約束の時間が来て、私達は五分前にその場に揃った。

私と舞生、直人の三人だ。

既にアカガネは境内に居て、ナキの手を握っていた。もう片方の手には、いつも持ち歩いていると思われる、鞘のようなものがあった。丁寧にも鍔や柄の部分も覗ける。

ナキの姿を見て、直人が「ナキ！」と叫んだ。

その声に応じて、ナキも「なあと！」と涙混じりに叫ぶ。

私はやれやれ、と思った。

たった数時間しか離れていないのに、二人にとってそれは大きな苦痛であったようだ。

「アカガネさーん。舞生の事情で警察呼べなかったけどさ、これは犯罪だからね」

小夜を演じるのも煩わしかったので、素の姿でアカガネを挑発する。

「とりあえず舞生を貸すからさ、あとでちゃんと返してね」

私は怯える舞生の手をとって、アカガネに渡す。

舞生は言われるままにアカガネの前に立つ。

動かないアカガネをよそに、私はナキを連れ帰る。

「……アカガネ君。……ごめんなさい」

舞生が口を開いた。

直人の手に戻ったナキが、嬉しそうに胸に飛び込む。

「……ごめんなさい」

繰り返す。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

舞生はアカガネの前にしゃがみ込んで、両手で顔を覆う。

アカガネは彼女を見下ろしているが、その目は虚ろだった。

泣き出した舞生を見て、私は二人の間に入る。

「小夜は死んだよ」

感情を込めるつもりはなかったが、その言葉は思ったより機械的に出てしまったように思えた。

「私は小夜じゃない。春川十色。一介の女子高生」

アカガネが私を睨む。

私もアカガネを睨み返す。

「その小夜って人に似てるかも知れないけどね、勝手な幻想と私を重ねてもらったら困るんだよ。合わせた私も悪いけどさ」

アカガネが舞生に確認する。

「本当なのか？」

舞生は頷く。

「小夜さんは死んだって、お医者さんに言われたんですよ。お医者さんとお母さんの言うことはちゃんと聞かなきゃだめだよ」

舞生が腫れた目で、アカガネを見上げる。

「……私が、殺したの……ごめん……ほんとうに、ごめんなさい……」

アカガネがゆっくりと空気を吸い込んで、胸を膨らませた。

自身のコントロールが難しくなっているのか、震える唇で、口を開いた。

「小夜を刺したナイフの柄の部分に、ガムテープが巻かれていた」
私の知らない事実がまた一つ零れ出す。

「最初から、殺すつもりだったのだろう？」

「それは……ちがう。ちがうの……」

舞生は懸命に首を横に振るが、それについての説明をしようとはしなかった。

アカガネは問いを重ねる。

「殺す気は無かったとしてもだ、どうして小夜をそのままにしたんだ？」

舞生は涙声で、

「直人に会いたかったんだもの。直人が突然いなくなるから、私、我慢できなくて……」

「人の命を奪ってまで、直人にか……」

舞生は返事の代わりに、小さなしゃっくりをあげる。

「まあまあ、アカガネさん。きっと舞生も逃げることで必死だったし、始めから刺そうだなんて思っていないよ。舞生と小夜さんって親友同士だったんでしょ？なおさらじゃん」

「お前が口を挟むな」

強い口調が私を払う。

「私は退かないよ。舞生がこうして泣いて謝ってるんだからさ、許してあげてよ」

私はアカガネが手から離そうとしない刀に注意を移す。

「少なくとも、その物騒な刀みたいなのは手放してくれないかな。今にもアカガネさん、舞生を斬りつけそうだから」

「この場で斬り殺そうと思っていた」

舞生の充血した目が瞬時に見開かれる。

「今でも、その気持ちは変わっていない」

「ねえねえ、そんな楽しくないこと止めようよ」

腰に手の甲を当てて、子供に注意するように私は言う。

「人を殺したって、後始末が大変なだけだよ。死体を処理するのに

どのくらい労力がかかるか、あんた、知らないでしょ？」

「だからお前は黙ってる」

半歩だけ後退ろうとした足を戒める。

「それにさ、舞生をそんなに恨んでいるならさ、一瞬でそれを放出しようというのは勿体無い話だよ。どうせならじわじわいたぶった方が宜しいんじゃない？」

「先にお前から殺してもいいんだぞ」

凄みがかかった声ではあるが、私は動じない。

「ともかく、舞生の話をもう少し聞こうよ。殺すのは、そのあとのあと」

「……」

舞生は黙ったまま項垂れている。

「……俺は、ずっとお前を捜していた。お前を殺すことしか考えられなかった」

「恨むだけじゃ食っていけないって。もっと前向きでクリエイティブな事をしようよ」

突如、私は鳩尾に激しい衝撃を覚えた。呼吸が止まる。

「警告だ。次は無いと思え」

構え無しのストレートに、これほどの威力と早さが伴うものなのかと、私は感心した。

膝から地面に落ちて、私は咳き込む。

「小夜は死ぬ前に言っていた。人を傷つけてまで生きる勇氣は、私にはないと。お前はその言葉を小夜から聞いたことがあるか？」

「……」

舞生は答えない。

「こつとも言っていた。自分は我が儘だったと。そんな自分を、許して欲しいと。お前にその意味が分かるか？」

「……」

舞生は答えない。

アカガネは残念そうに息を吐いて、鞘に収まっていた刀を抜き出

した。

「俺にも分からなかった。お前なら、その意味を知ってるんじゃないかと思った」

「ちよちよちよ、やっぱそれ十五センチメートル以上あるじゃん。

銃砲刀剣類所持等取締法に違反してるよ」

刃の切っ先を私の喉元に向ける。

「どうしてなんだ？小夜に何か罪でもあったというのか？あんなに優しい小夜が、どうして謝りながら死んでいかなきゃいけなかったんだ？」

固唾を呑んだ私は、次に出す筈の言葉すら飲み込んでしまった。

私は舞生に望みを託そうとするが、舞生は一向に喋りだす気配がなかった。

アカガネの持つ刀が頭上に掲げられ、外灯の薄暗い光がそれに反射した。

私は悔しくも、目を閉じる。

舞生の右太股と膨ら脛を貫通した刀は、そのまま地面に突き刺さっていた。

女の子のものとは思えない叫喚が、境内に響く。

背中を仰け反らせ、肩で呼吸し、額一面に汗を流す舞生の双眸は、意外にもアカガネを捉えていた。

アカガネはスーツの懐から、ナイフを取り出す。柄の部分が茶色のガムテープで複数回巻かれている。

「痛いだろう？小夜もきつと、同じ痛みを味わったんだ」

段階的に殺しを行うアカガネに、私は同感すると同時に失望した。ナイフを舞生の顎下に当て、その顎を上げさせる。

舞生の足は肩で串刺しにされていて、身動きが取ることができない。

動こうとするだけで、気を失いかねない程の痛みが走るだろう。

「何か、喋ってくれよ」

アカガネの懇願に近い命令は、舞生を動かさず、彼女は涙を流す。「何か言いたいことあるんだろう？早く言ってくれよ」
頬に流れる涙の滴が、ナイフを這う。

「……ごめんなさい」
何度も放たれたその掠れ声が、虚しく夜空に散る。

「……ごめんなさい」
ナイフが左股に突き立てられる。
涙に混じれた悲鳴が、耳をつんざく。

私は無意識に自分を抱きしめ、健在であることを確認していた。

「……ごめん……なさい」

もうそろそろ、いいんじゃないかと思う。

私は横目で、遠く離れたところで肩を寄せ合う直人とナキを確認する。

もうそろそろ、許してあげてもいいんじゃないかと、思う。

「……わたしが……わかるかった……ほんとうに……ごめん」
次はどこを刺そうかと、アカガネの目が一瞬泳ぐ。

その隙に、私はそのナイフを奪って、行動に移ることができる。

しかし、その後はどうすれば良いだろうか。

私には分からない。

運良くナイフを奪えたところで、それでアカガネと対等に戦えるだろうか。

不意打ちを食らって、私はまだ呼吸が整え切れていない。その状態で挑むのだ。

アカガネの太刀を避けきれず、足を切断される私を想像する。

それも悪くない。

それも悪くないと思った。

「アカガネさん、別にさ、もう少し待ってくれても良いじゃん。舞生、あと二年も無いんだよ。それをわざわざ急いで苦しめること無いよ」

言動の一貫性などこの際どうでもいい。私はアカガネの注意を逸

らす。

そして、ゆっくり深呼吸をしながら、地面から立ち上がる。

「未来のこと、考えようよ。復讐、私も好きだけどさ、残るモノはなにも無いよ」

言い終えたその時、私はアカガネからショルダータックルを受け、後ろに転倒した。

受け身を取ることができず、本日二度目の背部強打に痛みを感じながらも、もう一カ所に、痛みよりも鋭い、燃えるような熱源を腹部に感じた。

触診を試みる前に、意識が甘美な速度で遠退いていく。

ま、こんなエンドか。

星一つ瞬かない空の下で、私は静かにほくそ笑んだ。

さてこれで、直人が考えた作戦が上手くいくかどうか。

私は信じていなかったために、私なりの方法を取った。

アカガネは私を殺すことで、舞生への復讐心を収めることができるだろうか。

淡い期待は、やがて追憶に変化する。

復讐について、私には否定できない現実があった。

高一の夏、プールとプール脇の草むらで強姦された後、私は一人の教師に発見された。

教師は私に病院まで連れて行ってくれ、私が診察を受けた後、こう言った。

「今回の事件は表沙汰にできない」

私を犯した生徒の一人に、学校の理事長の息子がいたらしい。告発しようとするれば何らかの圧力がかかるだろう、と彼は言う。

しかし黙ってはいられないと私は反論すると、彼は提案した。

「僕に復讐を代理させてくれないだろうか？」

そして、その報酬として、彼自身の復讐も果たしたいと言う。

「僕は母子家庭に育ち、母親は必死に働いて、僕を教師にしてくれたんだ。教師になれば、安心して食べていける。おまじないのように僕に言い聞かせてくれたよ」

私は悪い予感がした。それは、彼に発見された直後から続いていた。

「君は知らないだろう？ 僕のお母さんは、君のご両親に殺されたんだよ」

さて、みんなの大好きな復讐はひとまず終えたのだろうか？

私は目を開け、そこがまだ暗黒の空の下であることに気を落とした。

病院でも自室でもない。

復讐はまだ続いていた。

私は起き上がろうとしたが、腹部に激しい痛みを覚え、のたうち回りたいた衝動に駆られた。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……」

初冬の夜空に、未だに懺悔の言葉は残響している。

私は頭だけを動かして、周囲を見回してみた。

血まみれで、私と同じように倒れている舞生がいる。

それは予想できた。

しかし、もう一人、血まみれの人物がいた。

天琴ナキである。

彼女は舞生の頭を膝に乗せ、自らの手首を舞生の口に添えていた。ごめんなさい、という言葉は、ナキの口から呟かれている。

誰かが私の上体を起こした。

腹部全体がずたずたに切り裂かれるような激しい痛みに、気を失いそうになる。

「十色さん、大丈夫ですか!？」

大丈夫じゃないよ、と漏らす。

作戦通りじゃねえよ、と毒づく。

「終わりました。今、終わっただんです」

あ、そう。

私は無関心を装って、瞳を閉じる。

それがいけなかったのか、彼は私を激しく揺さぶった。

更なる激痛が腹部を走った。

吐き出す寸前にも似た、やりきれない苦痛が頭の全体を支配し、

思考の連続性が喪失された。

ははは、と笑う暇もなく、私は再度、無意識の海に沈んでいく。

学校の放課後の集会で、連続失踪事件の新たな犠牲者が発表された。

六人目になる。全員で十人になる予定で、その十人目は私だ。

学校の帰り道、直人に出会う。

ナキの新しい部屋を探してきた帰りだと言う。

「決まりました。十色さんの館からは、歩いて十分くらいです」

かつての、記憶を失った廃人の時の彼とは、全く違う。

光を取り戻した眼の色は、意志に満ち溢れている。

「ま、近くなってもいいんだけどさ。心配な気持ちは、距離に依存しない」

それは嘘でしょうと、彼は冷笑する。私はそれを不快だと感じない。

「それにしても、本当にナキは覚えていないのかな?……あの時の出来事」

舞生は死に、ナキは記憶がリセットされ、アカガネは姿を消した。そして直人は、ここにいる。

「十色さんは、僕を疑っている」

彼の声は楽しそうだった。私も、そうだね、と同調する。

「僕はまだ演技を続けている。十色さんは言いたいんですね？」

私は黙って頷いた。

「姉さんを助けたかった。その気持ちには偽りはありません」

ここに君高直人という少年がいる。

私が彼から説明を受けた作戦はこうだ。

前提条件は“アカガネの復讐を果たさせ、舞生とナキを確保する”だった。

それを実現するために、彼はポイントを絞って説明していく。

“アカガネは舞生に対して贖罪を求めるが、アカガネがそれを許す可能性は低い。”

“アカガネの復讐は舞生に対するものなので、舞生を殺害することで完遂される”

“ナキには絶対治癒能力があるため、少量の出血を伴う負傷なら治癒することができる”

“ナキの絶対治癒能力を活用するには、治癒対象者の血が流れなければならぬ”

以上の四つのポイントを挙げられ、それらを踏まえた上で立てられた作戦は単純だった。

私と舞生でアカガネを挑発し、舞生を負傷させる。そこで舞生は死んだふりをし、アカガネをその場から退場させる。その後、舞生を治癒させ、事無きを得る。ただ、それだけの段取りで済む筈の話だった。

しかし、それには大きな誤算があった。

その誤算を、直人は気付いていた。

彼は、嘘をついていた。

「僕が突然、記憶を取り戻した時、どんな印象を受けました？」

下校途中の会話は続いている。

「前触れゼロだからね。怪しいとは思ったさ。それに出来すぎ感がぶんぶんしてたしね。それはずっと前からだけど」

ナキが連れ去られた後、館に戻った直人は突然、「思い出した」と叫んだ。

そして舞生の手を掴み、早口で捲し立てた。

「姉さん、僕、思い出したよ。僕は思い出したんだ！」きよとんと見つめる舞生と私を余所に、彼は記憶を辿るように語り始める。

僕はある施設の仲間の助けを借りて、病院から脱出した。

脱出先で偶然、天琴家の生き残りの、天琴ナキに見つけられた。

僕はケガをしていて、それを見た彼女が、自らの頭を壁に叩き付け、その血を僕に飲ませた。

その後、僕は気を失って、気付けばナキの部屋にいた。

その頃には、前の記憶がまったく無かった。ナキも喋れなくなると教えてくれた。

僕はナキに匿ってもらっていたが、直ぐに警察に見つかって、病院に戻された。

病院で検査を受けた後、僕は解放された。あの娘の血を飲んだ以上、ここにいる理由はない。僕は医者にそう言われた。

その後僕は自分自身が良くわからないまま、ナキと同棲した。

そして今日が訪れた。ナキが攫われ、舞生と再会したことで、思い出すきっかけを得た。

その後直人は一杯の水を飲んで喉を潤した後、作戦がある、と言い出したのだ。

私は腕を組んで直人の話を聞いていたが、対抗策が無かったので彼に従う事にしたのである。

「まるで……そうだね。ナキの能力を強調するような話だったよ」

「そうなんです。僕はナキの血を飲んで、冷血病を直し、その代わ

りに記憶を失った」

「そしてその副作用はナキにも、という話だね。すっかり騙されたよ」

直人は言う。

「ナキには副作用なんてなかった。ナキはあの時、“ごめんなさい”と云ってしまった」

「誤算だったね」

直人は少し俯いて、言葉をしまい込む。

「そして、もともと、ナキには絶対治療能力なんていう大それた能力は無かった」

私は直人の手を取る。

「手が冷たい人は心が温かいだなんて、今、言ってみようかな」

直人はその時初めて、不得意そうな本当の表情を見せた。

道端に咲く柊から、仄かな甘い芳香が鼻孔に届く。

珍しい薫りに立ち止まるうとしたが、直人は歩みを止めず、話を続ける。

「賭けだった。僕では治らなかった。でも、姉さんなら治るかも知れない」

一縷の望みに、全てをかける。未来に対して希望を持っていたら、私もそうしていただろう。

「ナキが、本当に天琴夫妻の長女であることは、確かめなかったの？」

「確かめた。彼女は真正正銘の天琴夫妻の娘だ。けれども、彼女には力が受け継がれていなかった」

声を落とす。

「しかし僕は諦める訳にはいかなかった。病院の内情を告発すると、いう義務もあった。だからアカガネに見つかった時はかなり焦ったけれど、どうにか誤魔化した」

「治ったように見せかけ、一度病院に戻された後に解放されたとい

う話を、アカガネに聞かせたんだね？」

「そう。そしてナキが能力を持つていることに説得力を与えるために、僕は記憶を無くし、ナキに言葉を禁じさせた」

「そしてアカガネはそれを信じちゃって、直人の追跡を止めたわけか」

でも、と私は言葉を続けた。

「信じるかね、普通」

直人は微かに笑った。

「ギリギリだった。あそこで僕は連れ戻されるものだと思っていた」「咄嗟の嘘にしても、出来が悪いけどね」

私の冗談に、「十色さんならどうするの？」と噛みつかれる。

私なら、そんな状況を回避するために苦心する。瞬時の判断は苦手だ。

「でも不思議なのはナキだよ。どうしてあいつ、覚えてないんだろっ？」

天琴ナキは事件のあった日の事を覚えていなかった。それおろか、直人と出会った記憶も無いと言う。

「都合の悪いことは忘れる。生きるための障害となるなら、それは認められるべき回避方法ではあると思う」

直人の言うことは納得できる。ただ、直人の事まで忘れる必要はあったのだろうか？

「だとするとだよ。直人はナキに対して、相当酷い事をしてきた、という事だね」

直人は苦笑する。

「役作りの中には、過剰なものもあったかも知れません」

さて、あの不潔な性生活は役作りに必要だったのか？大いなる疑問だ。

「心から馬鹿になりたいと思ってました。何も考えず、ただ本能の赴くまま動物的に生きる。悪くなかったですよ」

「避妊、本当に大丈夫なんだろうね？」

「それは大丈夫です。ちゃんと付けてましたから」

「ほんとかなあ。ゴムなんて見たこと無いみたいな、見事な演技してたけど？」

「まあ、細かい事はいいじゃないですか」
館の前に着いた。

直人とは、ここでお別れになる。

「これからどうするの？」

「病院を告発します。少なくとも彼らは、治療薬の開発に成功します」

「それをマスコミに流して、冷血病患者を救うんだね」

「はい」

「だとしたら、生きて再会は難しそうだなあ」

マスコミが逆に守ってくれるかも知れないが、世間に出る以上、彼の命は危険に晒される。

「そうでしょう。ただ、未来は開かれます」

「未来？」

「僕の意志を引き継いだ者が、必ず現れます。そういう人がまた、十色さんを訊ねてくるでしょう？」

「なんでだよ」

私は可笑しくて笑った。

「私なんて、ただの一般人じゃないか。どうしてそんな人を訪ねてくるの」

それに加え、私は直人より長くない。

「何故か、そんな気がするんです。高い質量が互いを引きつける。万有引力の法則ですよ」

そして彼は手を振って、住宅街の中に消えていった。

その後、私は自室に戻り、PCの電源を入れる。

表計算ソフトを立ち上げ、新規でファイルを作成した。

ファイル名は「桜計画」。

連続失踪事件の全貌を、ここに残そうと思った。

犯人の名前は、執事の名前に置換しておく。

未来のためだ。

私は呟く。

憎しみの連鎖はここで断ち切る。

それが私にできる、未来への準備だ。

ファイルは一通り完成し、パスワードロックをかけることにした。何にしようかと、迷う。

目の前の書架に目を移し、様々な本のタイトルを斜め読んでいく。その中の一つで、ひっかかったものがあつたので、手に取ってみる。

図書館から借りたものらしく、期限は切れていた。私らしいな、と思う。

その英題の一部をパスワードにする。

そしてその本を持って、私は部屋を出た。

今回の件で最も迷惑を被った彼女に、その本を渡しに行く。

学校生活最後の下校日は、雨だった。

私は雛から借りた傘を広げる。

そして駅のホームに経っていると、彼女がそっと隣に並ぶのだ。

「雛」

久しぶりだった。

舞生の事件以来だったので、一瞬、舞生が戻ってきたのかと思っ
た。

雛は夢げに微笑んで、「といるだ」と確かめるように答えた。

連続した雨音にそっと添えられる、鈴のような愛らしい声色だ。

こんな声だったと、懐かしく思うと同時に、舞生との差異を感じずにはいられなかった。

舞生にしてあげられたことはあまり多くなかったと、今更ながら
思い出し、後悔した。

「電車が来るね」

電光掲示板に「ただ今到着します」の文字が明滅し、私と雛はラ
インに立った。

電車が減速しながらホームに入り、空気の塊がスカート裾を揺
らす。その風は、雛にも私にも平等だ。

「雛ねえ、私、あれからまた、色々あったよ」

傘でローファアーツのつま先を弾きながら、私は報告する。

電車の中の人は多く、隣の人の会話がしつかりと聞こえる密度だ。
そんな中、私は臆することなく雛に話しかける。

私の独り言に、異様な視線を投げかける人がいくつも見受けられ
たが、数えたところで、キリも意味も無かった。

「またちゃんとね、未来について考えなきゃなあと思ったよ」

「未来？」

雛はその小顔と細い首で、美しい角度を作る。

「人類とか、地球とかね、そんなスケールの大きなものじゃなくて、
私個人の未来」

微かに頷く雛。

「今日が最後になっちゃうから、今更未来の話なんて無駄かも知れ
ない」

額にハンカチーフを当てていたサラリーマンの男性が、ちらりと
私を見る。

「私に訪れない日の事を考える。そこで生きる人々の事を考える。
今でもやっぱり難しいけど」

腹部に刺された傷をさする。跡は生涯残るとは言われているが、
明日がない私には無縁だ。

「私のことを覚えてくれなくていいから、私の大切な人が幸せであ
ってほしい。そんな単純なことだけど、決意するまで時間がかかっ
たなあ」

雛は相変わらず、学生鞆に両手をそろえて、静かに頷く。
その頬には微かな笑みが浮かんでいる。

「今日ね、殺さなきゃいけない人がいるの」
誰？

雛は同じ角度で首を傾げる。

「大切なひと、かな。私の未来を託したい人」

電車を降りて、改札を出る。

再び傘を開く。

雛が並ぶ。

「今更仕方ないけどさ、本当にずっと前から聞きたかったんだよ」
私は誰もいなくなつた路地で、雛に問う。

「どうして私が生きて、雛が死んじゃつたの？」

雛は黙つて、私を見つめる。

「雛の彼氏が私を強姦したこと、雛はどうして知つたの？」
雛の笑みは絶えない。

そんなことはどうでもいいとも言つるように、歩道の遙か先を見つめている。

「私の両親は人からお金や命を奪つて富豪になつた。いつかは復讐されるのは分かつてるし、それが両親で済まされないのも知つていた。私は、それを全て受け入れるつもりだった」

私は続ける。

「だから、近いうちに殺されると思つてたし、殺してくれる人の見当もついてた。でも、雛が、その人の復讐に巻き込まれる必要なんて」

その時、雛は私の唇に一差し指を当てた。

雛が口を開く。

「もういいよ」

その声は、はっきりと、私の耳に届く。

「私も、十色と同じなんだよ」

私は立ち止まった。雛は止まらない。

「十色に希望を託したかったから」

そして後ろを振り向く。雛と向き合う。

「少しでも長く、生きてもらいたかったんだよ」

雛の家の前に立っていた。

雨は絶え間なく降り続けていたが、私は雛に傘を返した。

「ありがとう」

その言葉が、私と雛の口から同時に発せられる。

二人は少し可笑しくなって笑い、私はお腹の痛みを思い出した。

今度は私が、ハンカチーフを頭にかける。

雛は手を小さく振って、「さようなら」とは言わず、玄関の中に消えていった。

私はその後ろ姿を見送る。

門の前に立ち止まっていると、玄関が開いた。
はっとする。

雛が戻ってくる。

それは今までに無い展開だった。

傘の手元を握る手が、自然と強くなっていた。

小柄な女性が現れる。

雛、ではなかった。

彼女は私を見つけて、「あら」と声をかける。

「十色ちゃん」

雛の母だ。

私は頭のハンカチーフをとって、礼をする。

「久しぶりね。一年ぶりかしら」

「……そう、ですね」

私は頷きながら、これは雛が導いたものだとな得した。

「お母さんに、お伝えしたいことがあって」

「あら、何でしょう？それよりも、中に入って。雨が酷いわ」
彼女の誘いを、私は断る。

「いえ、ここで結構です。ここで、言わせてください」
降りしきる雨は、頭から私を濡らし始めていた。
額に前髪が張り付き、視界は濁る。

洗い流してくれればいいと思う。私の罪を含めた全てを、水に流
してくれればいいと思う。

「雛さんは自殺したんじゃないんです」
彼女の表情が固まる。

「私が殺したんです」
大きく息を吸う。私が、震えているのが分かる。

「私、無垢な雛が羨ましくて、優しい雛が大好きで……」
目を閉じた。

瞼の裏に、雛の笑顔が浮かぶ。

「でも私、雛にはなれなかった……」
お母さんはどんな顔をしているのか分からない。それを見る勇気
が足りない。

「私を、恨んで下さい」
両手両膝を付いて、私は頭を下げた。

「許して下さいとは言いません。……代わりに、私を……私を恨ん
でください」

憎悪と応報で連鎖する世界は愚かだ。

だからこそ、その愚かさを許し、愛することができる。

私もその一端となり、愛と死を生んだ。

これからも、世界はそう在り続けて欲しい。

それが、私が望む未来だ。

連鎖（後書き）

全ての復讐の連鎖を止めるため、
少女が犠牲になります。

現実

連続失踪事件の犯人を見つけて欲しいと先生に言われた時、私は高校三年生になったばかりで、風に舞う染井吉野の花弁と夢中で戯れていた。

先生から学生便覧と事件のファイルが入った紙袋を投げ渡された私は、そのモーメントに負けて薄紅色の桜の絨毯に倒れた。どうにか抱えきった紙袋の中から紐で閉じられた分厚いファイルが勢いよく飛び出し、私の鼻は強打される。一時的に機能麻痺から脱した嗅覚は、先生の吸う煙草の匂いと、春の息吹で踊る生き物たちのステージの香りを一緒に感知する。

土を払いながら立ち上がった私は、桜の幹に寄りかかり、その調査ファイルを開く。

写真がいくつか貼られていて、その中の一人に私は目を釘付けにされた。

「好きな男のタイプはと、聞かれちゃ困る君だけど」

俳句のように歌う先生は、煙草に火を付けて、私の耳元に副流煙を吐き付ける。

私はいやいやしながら、ファイルを抱えて逃げる。

「女の子、君のタイプだと思ってね。紹介さ」

私は横目で先生を睨み、先生はそれが堪らないのか嬉しそうに微笑んだ。

「奥手の君だから、こういう斡旋が適当だと判断したんだよ」

そう云って、先生は私の肩を軽く叩いた。

「卒業までに解決しとけばいいや。それじゃあ、よろしく」

立ち去る先生を尻目に、私はもう一度、先生がマークした最もあやしい容疑者の顔写真を見た。つぶらな瞳、その上の睫毛はよく手入れがされていてくつきりとしている。髪は少し肩にかかる程度で、その先端は軽くウェーブがかかっている。とても柔らかい印象を受

ける。鼻は小さく、口元はしっかり引き締まっっていて、穏やかさの裏に鋭い意志と知性を隠し持っているように思える。

もちろん、私は彼女に見覚えがあり、彼女の事は噂レベルでよく知っている。同級生で、私と同じ学科の子だ。今までクラスは一緒になることはなかったが、今年の春から席が前隣になる。私の初恋の人で、その恋はまだ終わっていない。

小学生の五年生の頃だったろうか。私の両親は夫婦揃って市内の水族館に飼育係として勤めていたが、水槽の破裂事故で一瞬にして他界した。少額の保険金が下りたが、全て借金に充てられた。その後、私は先生に引き取られて今の生活が保障されているが、働かぬ者喰うべからずの教育方針で、随時発生する先生の本職の手伝いをしなければならぬ。

先生の本当の仕事は、職業上、人には言えないらしい。私も教えてもらっていない。仕事内容は多種多様で、子供の私には完遂できないものが圧倒的多数を占める。もともと頭の弱い私が先生の仕事を手伝える訳がないのだが、幾度と無く失敗する私を大目に見て、仕方なく衣食住を提供してくれる。だから、私は先生に感謝しなければならぬ。今後も、頭が上がることはないのだろう。

始業式の日には先生から渡された書類は、この学校関係者のみならず、全国的に有名になってしまった事件に関する事だった。

一昨年の夏から始まった、四半期連続失踪事件。生徒、教諭、事務員達が季節の変わり目に突然の失踪を遂げる。中には退学届、退職届を出した者もいるが、そのほとんどが突発的に発生していて、何者かの犯行である見通しが一般的になっていた。今までに犠牲者は六人出っていて、三人の男子生徒、女子生徒、女性教師、事務職員が消えている。無論、警察は既に介入していて、被害者の捜索と犯人の割り出しを並行して行っているらしいが、一向に進展は無い。

私は大学ノートに事件関係者のリストのコピーを切って貼り、授業のノートをとるふりをしながら、そのリストを目で追っていた。もつとも、今さら私がこの事件を追っても、手がかりなど得られる筈がなかった。関係者の全員には既に徹底的な事情聴取が為されているし、事件当時のアリバイも調べ上げられている。警察も手上げのこの状態に、無能な私が調べ直したところで、新たな進展は何も望めないのだが。

授業は世界史をやっていて、担当は今年で定年になる教授だ。単方向的な授業の進め方をするので、私は心置きなく仕事に集中するもつとも、仕事を授業より優先させた事で解決まで導けた事件は一つもないし、授業を優先させたとしても、解決できた事件は一つもない。

「あと四本くらい、桜を植えようと思うんだけど、どう思う？」
気が付くと、私の捜査ノートの上には学校全体の敷地図が広げられていた。

私は固まる。

「私はこのあたりが良いと思ってただけど、直接足を運んでみたらね、大した場所じゃないのよ。こんな目立ちそうな所なのにね、案外死角になっちゃうもので、誰にも見えないんだ」

そう言つて、彼女は細くて白い腕を惜し気もなく私の前に出し、校庭の外れにある防風林の端を指差した。指先の爪には凜と咲く小さな白百合が、密かにネイルアートされている。

そして私は確かめる。手首には大動脈を垂直にして深く引かれた刃物の傷跡。

彼女は続ける。

「それでねえ、校庭の周りはいもういいかなあつて感じになつてさ。既に綺麗に並んでいるわけだし、その規則性を乱すのは私の美学に反しているのよ」

私は黙つて彼女の言葉に頷き、次の言葉を待った。
突然聞かれたせいもあるが、もとより私には桜の植える場所につ

いて意見を持っていなかった。

彼女は頬杖を付き、敷地図をシャープペンで突く。「どうしようかな。どうしようかな」

「授業中です。私語は慎みなさい」教卓から叱咤の聲が飛び、それは私達に向けられていた。

彼女は「へいへい」とつまらなさそうに前を向き、閉じていたノートとテキストをようやく開いた。

私は何事もなかったかのように、黒板に板書された内容を一字一句漏らさずノートに転写し、平静を取り戻そうとした。しかし、心臓の鼓動は激しく、彼女の髪からは微かにシトラス系の甘い香りが仄かに漂い、私の頭はぼうっと熱くなつたまま、冷めなかった。

授業終了のチャイムでやっと私は我に返った。

号令が済んだ後、彼女は私に一言、

「場所、考えといて」

と言い残して、颯爽と教室を後にした。

私は今更になって、事件関係者のリストを彼女に見られたかも知れない、と不安になり、気分を落としたまま家路に着いた。

その日の午後八時には、同じ学年の女子生徒が陸上部の練習を終えた後に消息不明になり、連続失踪事件の被害者数がカウントアップされた。七人目である。

翌日の放課後、全校集会が開かれ、失踪した女子生徒の名前が発表された。

季節に一度行われる恒例行事のようなものだ。

私は小さな欠伸をする。緊張の中に潜んでいた僅かな退屈さに、私自身が驚いた。

人が突然いなくなるという事件が目の前で連続して起きていて、次は私なのかも知れない。なのに、不思議と恐れと不安を感じな

った。理由はない。ただ漠然と、私は被害に遭わないと信じているからだろうか。いや、それは違う。

失踪してしまう事に、私は微かな希望を抱いている。そんな気がするのだ。

終わってしまうことは嫌いじゃなかった。それはいつでも構わないとさえ思っている。

「決まった？」

集会が終わって生徒が解散を命じられた後、彼女はのろのろと体育館を出る生徒の列を無視して、私の隣に並んだ。

何の事かと逡巡していると、彼女は自らの腰に手を当てて、

「植える場所。昨日、考えておいてと言ったでしょ」

私はわざとらしく「あー」と手を叩き、

「校門脇なんてのはどうかな？あそこ、寂しいから」

彼女はチャームポイントの巻き髪を静かに揺らして、二重まぶたをゆっくりと下ろした。カールされた睫毛が緩やかな線になり、小さな笑窪ができる。それが彼女の笑顔だと分かった時、私の胸は高鳴った。

「そっか。その手があつたか。すっかり忘れてた。サンキュ」

彼女は短い挨拶で素早く立ち去り、大勢の生徒達の中に紛れていた。

私はほっと息を吐く。その一方で、僅かな前進を感じていた。夕べまで真剣に考えていた努力が報われた。

とぼとぼと歩く廊下の途中で、私は再び声をかけられた。

一、二年生の時、クラスが一緒に、仲の良かった子だ。今ではクラスが違う。

「大丈夫なの？あの人に声をかけられたみたいだけど」
「だいじょうぶ、と私は答えた。」

「あなたも知っているとと思うけど、あの人に付き合った人って」
私は、うん、と頷いて、その言葉の続きを遮った。

その子の目が、心配そうに私を窺う。

「進路のこと。進路のこと聞かれたただけだから、大丈夫。席が近くて、勉強の事でたまに相談するの」

私はその目から逃げるように、嘘を捲し立てた。

彼女は「ふうん」と受け止める。

「就職なんだっけ？」

話が変わった事に、私はほっと胸を撫で下ろした。

「そっか。そうだよ。奨学金もらっても厳しいから、働く」

「そっか。そうだよね」

その子は悔しそうに下唇を噛みながら、毛先を弄った。

「進学、なんだよね」

私は彼女に確認した。

「そう。正直、私も働きたいんだけどね。親がうるさいの。大学は出ておきなさいって」

私は何も言わなかった。私から言えることは、何もなかった。

「あ、ごめん」

私はいつの間にか俯いていて、その子は私の気持ちをすくい上げるように下から覗き込んでいた。

私はぱつと額を上げ、笑って見せた。

「だいじょうぶ、気にしないで。最近ちょっと忙しくて、疲れてるの」

アパートの鍵を回し、軋むスチールドアを引いた。

六畳一間に簡素なキッチンが付いた、家賃三万円のこの部屋が私の住処だ。

お風呂は無く、トイレは共同で、洗濯は徒歩五分のコインランドリーを利用する必要がある。

私は制服を脱いでハンガーにかけ、ジーンズとシャツに着替える。もう二年も着古していて、膝の部分は色褪せ、襟の内側は目を凝ら

せば微かに黄ばんでいる。

インディゴのシヨルダーバッグを肩にかけ、リサイクルシヨップで購入した鏡台の前に立つ。その木製の鏡台には前の持ち主の匂いが残っていて、故人の記憶を触発する線香の匂いはなかなか消え去らない。私は、あまり自分と目を合わせないように、鏡に写った全身を確認する。

部屋の鍵を前ポケットに入れてから、冷蔵庫から食パンを取り出して齧る。今日の夕飯はそれでお終いになる。

部屋を出て、鍵をかけていると、携帯電話が震えた。着信音は「なし」に設定していた。

施錠を終えてから、通話ボタンを押す。

「今からバイトなのか？」

聞き慣れた男性の声だ。

私は否定も肯定もせず、

「時間がありません。失礼します」

「待て。切るな」

彼の声は太く、低く、電話越しでも私の身体を震わせる。

「明日、何のバイトが入ってた？」

「コンビニです。国道沿いの方」

「倍は出すから。絶対だぞ」

私は淡泊な声で電話を切り、電源を落とした。

電話をかけてくる相手は、彼以外にいない。

学校の授業の大半は、眠気によって妨害されている。

興味がほとんど無い、ということもあった。

理解できない訳ではない。ただ、つまらないのだ。

授業が終わった後、巻髪の彼女は身体を横に向けて足を開き、気怠そうにこめかみに人差し指を当てた。百合は秋桜になっている。

目立たないようにしているのか、その色はまたしても白だ。

私は現代国語の教科書をしまい、鞆の中からハードカバーの本を取り出した。

ページをめくる。

初めて本を購入した時に付属していた、紀伊国屋書店の栞が現れる。その時以来、本は全て図書館から借りていた。栞はずっとそのままだ。

「帰らないの？」

彼女は暇を持って余していたのか、悪戯っぽい光を堪えた瞳で、私に尋ねた。

「 約束があるから」

「ふうん。いつもは早く帰るから、バイトでもしてるんだと思っていただけ、今日はオフか」

私は驚き、周囲に誰もいないことを確認した。教室には私と彼女だけである。幸運にも、クラスメイトは既に帰ってしまったようだ。「そっか。そうだよな。そういえば、校則違反だったっけ。知られちゃマズイね」

彼女はゴメンゴメンと顔の前で両手を合わせた。

どこかの名門のお嬢様を思わせる気品ある彼女に、そのような仕草は不似合いだとは思いつつも、強い親しみを感じた。

「内緒しておくから。特に、教師達には死んでも教えない」

私は本を閉じ、教室の時計を確かめた。

「誰との約束なの？」

彼女は身を乗り出してきたので、私は思わず体を強ばらせた。

よく冷えたジャスマンティールを彷彿させる、爽やかな香りが鼻腔をかすめる。一体、幾つの香水を愛用しているのだろうと疑問に思う。

「 ともだち」

どもらずに言えた。

彼女は残念そうに両手を宙に上げ、

「そうなの。そうなんだ
と暗い声で落とした。」

何が彼女の期待に添えなかったのか。

私はそれを考えているうちに、彼女は机の上にある本に興味を移した。

「海辺のカフカ。村上春樹かあ。へえ、こんなの読むんだ」

彼女はパラパラとページをめくる。表紙に貼られた図書館のシールが見られ、私は恥ずかしかった。

「面白い？」

彼女のストレートな質問に、私は窮した。

「あ、いや、えっと」

彼女は詰め寄る。

「どうなの？」

私は仕方なく、

「良く分からない」

そう答えた。

彼女はそれを聞いて、してやったりという顔をして、

「ふふ、そうだよね」

と笑う。そして、

「かわいい」

と私に馴染ませるように言葉を塗った。

例によって私は、その言葉から逃げた。

「私はそもそも、本なんてあまり読まないのだけれど」

と云いながら、彼女はB6サイズの手帳を鞆から出した。表紙には誰もが貼っているような小さなプリント写真は一切無く、無機質なモノトーンカラーだけがそこにあった。

開かれた手帳には、黒一色の細くて小さな筆跡が、神経質過ぎないほど、規則正しく並んでいる。

「読んでいる本をつまらないという瞬間の表情」

声を出して、彼女はそれに書き加えていく。

私は呆気にとられ、彼女の一挙一動を見張った。

「あつ、これね。エロ手帳なの。エッチな事には興味ある？」

「な、無いわけじゃないけど」

言葉に詰まった。

「あるとは言えないよね。君はいかにもそつという性格のように見える」

酷いと思った。明らかな誘導だった。

「今の表情もポイントが高いけど、ちょっとかわいそうな気がしてくるから、お預けにしといて」

彼女は秋桜の爪で記録をめくる。

「これはね、人がカワイイとか、エッチだなんて思つた瞬間を記録しているの」

何の為に、と訊こうとしたが、彼女に対してそれは愚問のように思えた。

「青ヒゲの女の子が口を尖らせた時とか、汗を染みこんだビブスを投げ渡された時の、マネージャーの眉間の皺の寄せ方とか」

更に言葉を失う私を余所に、彼女は続ける。

「男子もあるよ。スタンダードなやつだったら、シャツの袖をまくつて見せる上腕筋とか、水泳選手の引き締まった大殿筋が水滴を弾くところとか」

「だ、男性は、筋肉だけなの？」

何とか切り返してみる。

「もちろん私の主観がメインだから、私の趣味になつてしまうね。

でも、色んな人に取材したり確認とつたりしてるから、あながち蔑ろにはできないかもよ。例えば、そう、これこれ」

目次が振つてあるのか、ページにはシールによるインデックスが貼られている。

「両親の呼称が、父さんから親父、母さんからお袋に代わる瞬間つて、最高だよな。女の子つて、どう頑張つてもそつ呼べないからね。男のセクシャルな特権」

しかし、それに魅力を感じるのには私にとって難しい。

「その他にも色々あるよ。君も、何かアンテナにビビッと引っかかるものがあったら申告してよ」

「う、うん」

苦笑いながら、私は頷く。きっと私の性に関する受信機は、彼女の収集の役には立たないだろう。

彼女は立ち上がり、小さく伸びた。

気怠さを追い払う無防備な表情と、体内の圧を調整するような気の抜けた呻き。

私はそんな彼女を見て、とてもセクシーだと思った。私はその手帳を持っていたなら、すぐにそれを記録するだろう。

「先行くね。身体をお大事に」

バイトの事を気遣ってくれたのか、私は黙って頷くと、彼女は「あつ」と声を上げて立ち止まった。

「校門の脇にしたよ。気付いてた？」

桜の木の事である。

「あつ、ごめん、気付かなかった。もう、植えたんだ」

「うん」と彼女は手の甲を両脇に抱え、自慢げに答えた。

「私の仕事だからね。誰にも許可は取ってないけどさ」

そして少し落ち込んだ素振りや、彼女は床に視線を落とした。

「担任の部屋からなら、見えるのかな。かなり小さいから、難しいかも」

最後まで言い切らないまま彼女は廊下に消え、私は彼女を追った。どうして、彼女は知っているのだろうか？

私の彼女に対する疑問は膨らんでいく。

私は、私と担任の関係が第三者に漏れる可能性を検討してみたが、彼女と担任に関係が存在しない限り、それは露呈するはずのない事実だった。

私は考えるのをやめ、教室の黒板の上に飾られている時計を確認する。小説を仕舞う。

午後九時。教官室の窓から覗ける景色には、新しく植えたと思われる桜の木は発見できなかった。

シヨーツを上げ、ブラを付けて、ブラウスのボタンを閉める。最近では頭がすっかりと働いていないせいか、第三ボタンだけ付け忘れることが頻発している。

「最近、あいつと仲が良いみたいだな」

暗闇の中から、液晶のバックライトで浮かび上がった担任の顔が現れる。

安物の黒革のベルトは、既に閉められていた。

「別に。仲良くないです」

私は素っ気なく言い放ち、彼からお金を受け取った。一ヶ月は生活を続けられる額だ。私がやり遂げる事ができる数少ない仕事の、多額な報酬だ。

「どんな話をするんだ？」

彼の右手の中のマウスがカチカチと鳴いている。

「ただの世間話です」

「世間話といっても、色々あるだろう。テレビの事とか、経済の事とか」

「家にはテレビはありません。新聞もとってません。失礼します」

「ちよつと」

彼は立ち上がって、私の肩を押さえた。部屋を出ようとした私を振り向かせる。

「あいつには気を付けろよ」

私は無表情を努める。

「君がいなくなったら」

彼の息を飲む音が、PCの排気音の中に紛れた。私がいなくなったら、こんな所に困る人がいる。

その事実は、私が予想していたとおり、それほど嬉しくなかった。
「バイセクシャルの噂がある」

私は彼から目を反らした。

「これまでの被害者がそれを確かにしている。最近ではそれを恐れてあいつに近づく奴は減ったが、それでも止まらない」

「帰ります」

私は鞆を持って、部屋を出た。背後から呼び止める声が聞こえたが、私はそれを無視した。

しんと静まりかえった夜の学校の廊下を歩く。教官室の中には、まだ灯りが点っている部屋がいくつかあった。

私は、出来るだけ人目に付かぬよう、人の往来の少ない通路を選ぶ。

体育館の前を横切った時、まだ照明が落とされていない事に小さな驚きを感じた。中からはバスケットボールが弾かれる音が響いている。周りには八分咲きの桜が体育館の照明によって照らされ、春風に揺らされる度に淡い朱色を彩っている。

私は不意に校門まで走った。

向かって左側の、土が敷かれた領域に、新しく植えられた桜の苗木を探した。反対側には守衛室があり、中からは訝しく私を見つめる守衛がいたが、私は構わなかった。

そしてそれはすぐに見つかる。約一メートル程の、本当に小さな苗木だが、それは確かに在った。

私はその前にしゃがみ込み、膝の中に顔を埋めた。

本当に植えられていたそれに、私は言葉を失った。

それはすぐに抜き取られるだろう。

失踪事件の容疑がかかっている彼女は、あたかも死体をそこに埋めたように、周囲に思わせているのだ。それが仮にフェイクだと分かっただけでも、捜査する側は着手せずにはいられない。

どうしたらこの桜を守るのだろう。

彼女はそれを必死に考えた筈だ。

私はこの苗木を目の前にして、その重大さに打ちのめされる。

私はそこに座り込んだまま、それについて考え続けた。

「供養すらままならない現実だ。そこで彼女は何を考えるのだろうか。」

部活動を終えたバスケット部員に声をかけられ、私は立ち上がった。

答えは出なかった。

帰宅後、ポストの中をチェックすると、不動産広告の中に混じって定型封筒が入っていた。

厚さにして一センチメートルほど。一対二の比を持った、綺麗な長方形の形でそれは膨らんでいる。

爆弾等の危険物を送られる覚えのない私は、警戒もせず、糊を剥がした。

中身を確認した私は、誰にも見られないよう、直ぐに自室に潜り込む。

そして、滅多に使わない携帯電話を鞆から取り出して、数少ないアドレス帳のメモリから先生の番号を呼び出した。

十数回のコールの後、先生は眠そうな声で出る。

「珍しいね。君からかけてくるなんて」

私は単刀直入に尋ねる。

「お金、先生ですか？」

先生はすぐには返答せず、

「君の手に、お金が届いたってことか……」

と、まるで人ごとのように呟いた。

「前払いで、強制的に新しい仕事を頼んだって、受け付けませんか」

先生は本当に困った、という声を出して、

「うーん……… そうなの。色々、体使って働いてもらおうかなって、今考えたところだけれど」

「お断りします。お金は返します」

「あ、いや、返さなくて良いよ。特別報酬として受け取れよ」

私は困った。心当たりがないからだ。

「受け取る理由がありません」

「まあまあ、受け取りなつて。きつと綺麗なお金なんだから、貰つて損はないだろう？それに今回の事件の調査にも、色々お金は使つんだからさ」

「それは後で経費として、しっかり落とさせてもらいます」

ひゅう、と口笛が聞こえ、

「手厳しいね。まあ、君にはそのくらいの態度が丁度良いよ」

そう言つて、先生の方から電話を切つた。

私は呆然と立ち尽くした。

机の上には、五十万。全て、新札である。

「桜を植えるポイントだけど、まあ、特に他の木と比べて変わったところはないんだよ。間隔を確保して、日当たり、水はけが良くて肥沃な土壌。当然だね」

私はコクリと頷く。彼女は続ける。

「昨日植えた苗木は、あと三年もすれば君の身長を超える程大きくなるけれど、それまでが問題なんだ。ちゃんと手入れしてくれる人はいないし、何せ、すぐ抜かれちゃうからね。それも一回じゃなくて、何度も。本当に、困つたものだよ」

抜くのは警察だけじゃない。悪戯でやる人もいるし、植木業者が入って来ることもあるだろう。

「手入れは、頻繁にするの？」

私は彼女に尋ねる。

「そうね。一日に一回は巡回するかな。水とか肥料をあげるんだ。元気のないやつには、声をかけながらね」

化学の実験の最中だった。私と彼女はペアになり、談話をしながらも淡々と作業を続けている。

「今までに何本植えたの？」

私の問いかけに、彼女は少し難しい表情を浮かべ、

「そうだなあ。年に四本だから、今までに七本は植えたのか」

「七本」

私は反芻する。

その数は、多いのか少ないのか、よく分からない。

「でも、ほとんど負けちゃったよ。敵は人間だけじゃないからね。他の動物とか、同族だったりもする」

フラスコの中の液体は沸点を超え、ぐつぐつと音を立てていた。

「子育てって、人も植物もホント難しいよね。私、金魚とかハムスターだってすぐに殺しちゃうしさ」

私はフラスコの中に試料を入れ、温度計で液体の温度を測った。

彼女はその値をノートのメモする。

「だからねえ、いつも思うのよ。育てる力がない奴が、生命を預かってちゃいけないんだなって。愛だけじゃ、本当にどうにもならないよ」

そう言っつて、彼女は制服のブレザーのポケットから、ピルケースを取り出し、誰にも見えないように私のスカートの上に置いた。

「普通、ちゃんとお医者さんに診て貰って、その後処方してもらうんだけどね。あんたの場合、お金と時間がないでしょ。学生からその二つを取っちゃったら、何が残るか分からないさ。本当に辛いよね」

私は急いで首を横に振った。

「受け取っていてよ。孕んじゃってからだと遅いし。ここの教諭の給与だって、大した期待できないんだぞ」

そう言っつて、無理矢理私のポケットの中に入れる。

そして実験手順を確認するように服用法を小声で伝える。

「二十八日タイプで、始まった日から服用してください。白いやつを一日一錠。二十一日続けたら、ピンクに切り替えて一日一錠。ノンホルモンのやつね。中にメモリ付いているから、飲む度に回していけば間違いないかな」

私は他の人に聞こえていないのかが物凄く気になって、ずっと下を向いていた。顔が熱い。

「毎日じゃなきゃだめだよ。その時々だと全く効果がないから」

「ちょ、ちよつと」

私は、ようやく機能する口を使って、訂正する。

「なにになに？」

「誤解してる」

「え、何を？」

目をパチパチ、音が聞こえそうなくらいに開閉させて、彼女は私の言葉を待つ。

「要らないの。そ、そこまでいってないから」

「ええつ」

と、彼女は大声を出して驚き、周囲が一斉に彼女を注目した。

私はいよいよ恥ずかしくなって、実験室を飛び出したくなった。

彼女は咄嗟に判断する。

「あ、え、ゴホン。実験の結果に驚いただけです。お騒がせしました！」

胸を張ってわざとらしく言い訳をし、担当教師に「ゴメンナサイ」と平謝りする。何故か私の肩も掴まれ、一緒に頭を下げる。

周りのざわめきは止まらず、中からは次の犠牲者が決まった、という話も聞こえてきて、私は何も言えなくなった。

教師からの二度目の注意で、辺りはようやく沈静化した。私達はほっと息を吐き、簡素な丸椅子に腰を下ろす。

その日の午後、私は彼女に呼び出された。

出入り禁止になっている屋上の鍵を、彼女はどんな魔法を使ったのか目の前で一瞬にして解錠した。

初めての屋上と、そこに吹き付ける風の歓迎で、私は少し気分が高まる。

ペンキの剥がれたフェンスに、二人で並んで空を感じる。

「途中までつて言つてたけど」

彼女が柄にもなく言葉を濁す。

「本当なの？」

普通なら最後までやるのが肉体関係と言いたいのか、彼女の大きな黒目は疑問で染められていた。

「胸とか、キスとかだけだから」

「はあ？女子高生相手にそんな中途半端なことできるのかよ」

彼女の声は怒っているように聞こえたが、その中に今までにない真剣さを感じた。

「担任の先生は なんとというか」

「インポテンツ？」

「ち、違うと思う」

先生の名誉の為に、否定しておく。

「先生、興奮してくると、ズボン越しに固いものを押しつけてくるから、多分あれが」

「あ、あ、えつと、大丈夫だよ、そこまで言わなくて大丈夫」

彼女の方が恥ずかしくなったのか、言葉を遮られた。彼女自身は慣れている筈なのに、何故だろう？私の思い違いだろうか。

彼女は口に手を当てて咳を払い、続けた。

「先生も我慢してるんだね。ちょっとは見直したよ」

私は頷く。

「だから、避妊はしなくても良いと思う」

「そりゃそうだ」

「それで、お金も要らないの」

先日ポストに入っていた、五十万円が詰められた封筒を今、彼女

に返す。

彼女はそれを見て、意見する。

「好きでもない男に体を弄られているのは、お金をもらう為なんですよ？」

「それだけじゃないの。バイトしていること、先生は知っていて、その口止め料も入ってる」

「そんなのおかしいよ。お前の家庭状況じゃ、バイトでもしないとやっていけないんだろう？」

「うん。両親はいないし、兄さんも突然会社辞めてから、仕送りができなくなつた。私が働くしかないもの」

「奨学金はもらっているの？」

「もらってる。それでも追い付かない」

「うそ、それであいつは君の弱みにつけ込んでそんなことを」

私は急いで先生を庇う。

「で、でも、たくさんお金もらってるし。それ以外のこと、上手くできないから」

彼女は本当に怒つたように、私を睨む。

「君はそれでいいの？」

私は怯える。

「よ、良くないと思う。けど、先生はそんなに悪い人じゃないから」

「悪い人じゃないって 十分悪い事されてるじゃない」

私は言葉に困つた。それでも言い返さなければならぬと思う。

「かわいそうだな、と思うの。あの人も、お母さんがいないって」

「あいつの母親の不在を、君で埋めようとしているだけじゃんか」

「求められたら、答えてあげたいよ。そうじゃなきゃ、悲しいもの。お互い、悲しくなるだけ」

彼女は沈黙した。

私は悲しくなると同時に、彼女へ訊こうと思っていた様々な疑問

が膨らんでくるのを感じていた。それはもう、抑えるには遅すぎて、気が付くと私は言葉にしてしまっていた。

「あなたは、あなたは、私の事をどう思っているの？」

私は彼女の名前を呼ぶことができなかった。名前を呼ぶには資格が足りないように思えた。

私は続ける。

「あなただって、私がかわいそうなんですよ。頭、良くないし、容姿もこんなだし。それに、お金持ってないから」

「駄目だよ。そんなの違う」

彼女の否定を受け止めず、私は更に続ける。

「桜を植える話だって、退屈だったから声をかけた。真剣になってくれる人なんて、私のような陰気で馬鹿なやつしかいないんだからそれだったら私」

頬に衝撃が走り、私は最後まで言い切ることができなかった。そして私の頬は、間もなく熱くなった。

「そんなこと言うと、私、嫌いになるよ」

彼女の大きな瞳は紅く、濡れていて、哀しみに歪んでいた。

私は彼女と向かい合う。

「君のこと、嫌いにはなりたくない。絶対、嫌いになんかなりたくないのに、どうしてそんな事を言うの」

彼女は私に背中を向けて、一歩ずつ、ゆっくりと前に進み、私から離れていった。

私は遠くなっていく彼女が怖くなって、その背中を追った。

混じりけの無い青空と入道雲。その中に浮かぶ紺色のブレザーが、私の視界を支配する。

「私の手首の傷、気付いてたよね？」

彼女はゆっくりと振り返り、左の手首を私に見えるように突き出す。

白く膨れた傷跡が一本、そこにはある。

「隠してないのは、別に見せたいって訳でもないんだけど」

右手で剃刀を持つ真似をする。

「過去を隠したいとは思わないんだよね。普通ならここにリストバンドするわけでしょ。でもそうになると、何か嫌じゃん。他人はなんとも思わないかも知れないけど、私がそれをつけたり、見たりする度に、死のうとした自分を否定するみたいでさ」

文脈は良く分からなかったが、私は彼女の告白に息を飲んだ。

「手首はこの一本で本当に死にそうになったからやめた。その後、腕とか足とかもやってみたけど、まさしく自傷行為でしかなかったよ。それも、ただかわいそうな自分を演じたいが為だったし」

彼女は半袖やソックスをめぐって、脇の下や足首を見せる。

切り傷はほとんど見えなくて、無駄毛一本もない白い肌にはまた息を飲んだ。

「要するに、だよ」

彼女は私の両手を取り、頬に寄せた。

私は目のやり場を失い、俯く。

「弱っている自分が好き、という気持ちは分かるけど、私は弱っている君を見たくないの」

彼女の双眸は真っ直ぐと私を貫いている。

「分かる？あんたが心配なの。とても」

それって何なのだろうか？

私は頭が悪いから、自分の都合の良いようにしか解釈できない。

だから私は、彼女の伝えようとしている気持ちをしっかりと受け止められない。

ここから逃げたくなる。

「待て。待て」

私を包む両手は更に強く、熱く、握られ、私は完全に逃げ場を失っていた。

身長が私よりひとまわり大きい彼女は、その手を私の背後に回し、身動きの取れない状態にする。

彼女の胸の膨らみの間に、私の鼻が触れ、仄かな体臭と強すぎな

い香水が、思考を麻痺させる。

「これが、初めてだったら良かったのにな」
「彼女は呟く。」

私は何のことか分からなかった。

彼女は諭すように、また自身に言い聞かせるように続ける。

「初体験だよ。こんな幻想を抱いてた。どうして、今になるのかな」

「わ、私は」

「いいよ、何も言わなくて」

そう言っつて、私を強く抱き寄せる。

「いつそのまま殺しちゃいたいくらい、そうだね、愛しい、よ」

私は大声で泣くことなんてもうしばらく無いだろうと思っていたが、今、その状況下にいることに私は驚いていた。悲しくても、嬉しくても、感情が溢れれば泣いてしまう。その事実を受け止めようとしたが、すぐには難しかった。

学校のトイレに駆け込もうと思ったが、泣き声を聞かれるのも恥ずかしいと思い、私は部屋に帰ることにした。視界は涙でぐしょぐしょに濡れ、鼻水は拭いても拭いても上唇まで伝ってくる。

アパートに着くと、隣室から火が出ていて、私の感情のスカラージ量は更に高まった。結果として、更に泣きたくなった。

どうやら既に消防隊員が到着しているらしく、消火活動が始まっていた。

私は泣く力さえ失い、その場にしゃがみ込んでしまった。

一度に多くの事が起きている。

その事実を把握できるものの、何に対して、どのような判断を下せばよいのか、その思考の道筋をすっかり立てることができない。

相変わらず、私の意識は霞む。

ただ、目の前の事態をぼんやりと眺める。

どのくらい時間が経ったのか、私はいつの間にか両腕を支えられながら、焼け跡で真っ黒になった私の部屋を前にしていた。消火は終わったらしい。全焼とまではいかないにしても、所持品の半分以上は使い物にならなくなっていた。

私の耳元で、心地良い声がする。

「ごめん」

私の両腕を支えていたのは彼女で、何故か、磁器のような白い透明な肌は、灰で黒ずんでいた。

「煙が酷くて、途中で消防の人に止められちゃった。だから、これだけ」

そう言って、彼女が渡してくれたのは、私の枕だった。

海辺のカフカ、上下巻セット。

返却期限はとくに過ぎていて、私はとっさにそれを受け取って表紙の図書館のバーコードを手で隠した。

彼女は目を細めて笑う。

私はそれを見て、全身に走っていた緊張の線がぷつりと切られるのを感じた。

またその場に崩れ落ちて、私はやっとで、落ち着いて泣くことができた。

彼女の住居は私が住んでいたアパートから歩いて十分程の距離で、実は近所だった。

単身で住むにはかなり大きな館に私は住人として招待され、一室を与えられた。それまでは彼女の母親が使っていたという。母親がいなくなってから八年は経つらしいが、婦人の残した高級な生活の香りは、様々な家具に染みついていた。煙草は吸わなかったらしい。彼女の両親は昔に姿を消していて、この館に残されたのは、彼女と、執事さんだけだと言う。

執事さんはこの館での細々としたルールや仕来りを私に丁寧に説明してくれる。食事の時間や門限などについてだ。館の主である彼女は、それを一度も守ったことはないと言う。

「足りないものがあればなんなりとお申し付けください」と執事は言い残し、部屋から出て行った。私は早速、数少ない身の回りの品を各場所に配置していった。それはほんの僅かな時間で終えてしまう。

作業を終え、一呼吸置いた時、ドアをノックする、乾いた音が部屋に響いた。

「わたし」と彼女の声が聞こえる。声を出すより体を動かした方が楽だと感じた私は、急いでドアを開ける。彼女はシャワーを浴びたばかりなのか、朱く火照った頬で、私に言った。

「疲れてると思うけど　ちよつといいかな？」

私は頷いて、彼女の後に従った。

部屋に来て欲しいという。

彼女の部屋は広く、アトリエと暗室で二分されていた。まず始めに暗室に通してくれる。暗室の天井には幾枚もの写真が紐によって吊されていた。私達が入ってきた扉の風圧で、それは不気味な残像を残しながら揺れる。

彼女は壁に設置されたスイッチを押し、部屋を僅かに明るくした。セーフライトだろう。乾かす為に吊された写真のいくつかの内容が、かるうじて判別できる程度だ。その一枚一枚を追っていくと、その殆どの被写体が、全裸や半裸状態であることがわかる。若い女性、少女だ。

「写真を撮らなくなってるね。今から一年と二ヶ月前。あつつい夏だったなあ」

彼女は、部屋の隅で闇に埋もれたキャビネットからアルバムを取り出し、私に見せた。写真の中で彼女は、陸上選手のユニフォーム姿で宙を舞っていた。砂上に着地し、砂粒を豪快に弾いているもの

もある。走り幅跳びだろうか。

「あと四百もやってた。それに水泳もね」

彼女はアルバムをぱたんと閉じて、キャビネットに戻した。

「それでね、健全にスポーツがしたかったんだけど、なかなか上手くいかなくてね。両親がいなくなったのもあってか、不幸は不幸を呼ぶみたいで」

彼女は両手を後ろに回して、ゆっくりと干された写真の列をなぞるように歩き出した。

「そこに乾かしてある写真、全部私なの」

空気がようやく、異様さを醸し出し始めた。

彼女の段階的な告白に、視界がぐらりと揺れるような衝撃を覚える。

「ネガが送られてきてね。その時点で棄てるべきなんでしょうけど、とりあえず現像してみようと思ったの。性の探求。格好つければ、そんなところかもね」

自嘲気味に笑う。

「でも駄目だった。乾かすところまではできたのよね。後は触ることもできやしない」

彼女は写真の一枚に触れようと手を伸ばすが、それ以上、指先は写真に近づくことはなかった。

「見てる分には、予想通り、我ながらエロティシズムだなあとと思うんだけどね。触ることができないのよ。何故だと思う？」

私は考えてみたが、的を射た答えを見つけることはできなかった。

「他人が撮ったものだから？」

彼女は中性的な笑みを浮かべて、答えた。

「近い、かもね。撮影者の負のエネルギーというのかな、なんか気持ち悪くて」

そこで彼女は突然、パンパンと手を叩き、

「初めて人に明かした、私の秘密なの。執事にも見せたことないんだよ」

私は溜飲を下げる。

「だから、今後とも宜しくってことね。ま、辛いことばかりの世の中だけれど、この国じゃ春が来るんだからさ」

そう笑う背後で、写真達がクスクスと忍び笑いをしている。

私には、良く分からなかった。

「あ、あともう一つね。見せておきたいものがあるんだ」

私達は暗室を出て、彼女の部屋に戻った。

通りがかった際、目にはしていたが、それは今、順番を守って説明されるようだ。

「これこれ。見てみて。タイトルは決めてないんだけどさ」

地面に人が眠っていた。その上には桜が咲いている。

その二言で説明が足りるような、下書き段階の、シンプルな絵だった。

「写真の代わりに絵を描くようになったよ。ほとんど抽象画だけだね」

私は唾を飲み込んだ。

その音は、今度こそ、彼女に耳に届いただろう。

彼女との生活が始まった。

一番の大きな変化は、家事をする必要が無くなった事だった。

掃除、炊事、洗濯の一切を執事さんがやってくれた為、私の生活にゆとりが生まれた。

空いた時間は趣味の読書にまわし、残りは今まで通りアルバイトに勤しんだ。お金のことまで面倒を見てもらうつもりはなかったからである。

貸して貰った部屋の代金も、いつかはきちんと払う。無期限無利息。火事で窮地に追い込まれた私が、おこがましくも転居する際に提示した条件だ。

彼女は家ではいつも絵を描いていて、ごくたまに電子ドラムを叩いている。そして絵を描いたりドラムを叩くのに疲れたり飽きたりすると、私の部屋に来て写真を撮る。私は必死になってそれを拒むが、彼女はそんな私の表情を一番撮りたいのだと言う。

暗室の写真は彼女に無断で回収し、今は私の手元にある。私はその写真を見るのが怖いため、嚴重に封をして、机の引き出しの一番奥に入れておく。いつかは処分しなければと自分によく言い聞かせる。

彼女は過去の写真が全てなくなった暗室を見て、しばらくの間沈黙し、口をぱくぱく開いていた。独り言なのだろうか、私にはまったく聞き取れなかったが、その後彼女はにっと笑い、私の肩を叩いた。

新しい写真が、暗室の空に浮かんでは広がっていく。

七月に入り、新たな犠牲者が出た時、私は季節が春から夏に変わったことを自覚した。

集会の後の廊下を歩きながら、夏といえば、夏といえばなんだろう、と自問を繰り返していると、河川敷で行われる花火大会のポスターが目にいった。花火大会ときたら、浴衣である。

浴衣は金銭面の関係で一回も着用したことがなかったが、想像するだけならお金はかからない。

私は私の浴衣姿ではなく、彼女の浴衣姿を想像する。

薄紅色をベースとした白桜の咲き乱れた模様。頭髪は前髪を右に流して、後ろはまとめて漆塗りのかんざしで止める。かんざしには三輪の白百合が装飾されていて、帯はシンプルに白、もしくは朱色。できるだけ淡い方が良い。

私は妄想に耽っているうちに階段を一步踏み外す。身体が瞬時に

支えを失い、軽くなる。

よるめいて、前の人の背中にぶつかり、ドミノ倒しを始めようとした時、私は後ろから襟を掴まれる。

そのままぐいっと引っ張ってもらい、私は九死に一生を得る。

「これじゃあ、予定外の犠牲者が一人、増えるじゃないか」

そう言っつて、先生は私の体を傾斜させ、膝の裏に手を伸ばした。そのまま持ち上げられる。

「生徒諸君、彼女は具合が悪そうだから、僕が保健室に連れて行くよ。次の授業の先生って誰だっけ？」

私が答える前に、学級長が明瞭な声で「安東先生です」と答える。先生は、

「オーケイ。ありがとう、助かったよ。彼に宜しく伝えておいてくれ。僕からも後で言っておくから」

その後、もちろん保健室に連れて行かれる筈はなく、先生の教官室に運び込まれる。

ドアの表に貼ってある所在表のマグネットを「不在」に動かし、カーテンを閉めた。

先生は大きく息を吐く。

「お前は相変わらず小さくて軽くて、持ち運びの点では非常に便利なのだが」

私はソファアに落とされ、小さな悲鳴を上げる。

「調査の方はまったく進んでいないようだね」

私は姿勢を正す。

「調査は進んでいます。容疑者に接近して、情報を集めています」
先生は白衣のポケットに入っていた黒のボールペンを取り出し、

私の頭を軽く叩いた。

「ほほう。それで、何か新しい情報でも掴んだのかい？」

私は上目遣いで、先生を睨んだ。

「彼女は、この事件にまったく関係がありません」

先生は面白そうに唸った。

「うむむ。それはそれは、随分確信が込められた見解だね。根拠はあるの?」

私は説明する。

「事件当日のアリバイがあります。少なくとも、今回の失踪事件については、犯行が行われたと思われる昨夜十二時、彼女はずっと家にいました。犯行は不可能です」

間断なく、

「共犯の可能性は?」

「無いとは言えません。けれども、彼女の単独犯ではないことは確かです」

「君は、君はその推測に満足しているようだね」

「どういう事ですか?」

「つまり、彼女は第三者によって容疑がかけられるよう仕組まれている。そう言いたいのだろうか?」

「そうです」

「それが、彼女がそのように思わせようとしている可能性も含んでいるんだよ」

先生は煙草に火を付ける。

「君が共犯というのはどうかな?」

「え?」

「話としては随分面白いと思うんだよ。容疑者に接近した探偵が同情して犯行に加担する。共犯探偵だね」

そう云って、先生は冷ややかに笑った。

「もつとも、君みたいな頭脳指数の低い子がやるから面白いのだけれども。結末としたら、完全に利用されて、君一人の単独犯で片づく。そこに愛が絡めば、文句無しだね」

私は絶句した。

少なくとも、頭が鈍いという点は否定できなかった。

「彼女は君を使って、犯罪を完全なものにしようとしている。案外、この可能性は低くない。君と僕の繋がりや、彼女は知っているから

ね。僕は君を、彼女は僕と君を掌握している」

先生と彼女の関係を尋ねようとしたが、怖くて聞けなかった。それはもう、先生の発言で明らかにされたようなものだった。

「ともかく、僕はそういう結果でも全然構わないということだ。精々、頑張ってくれたまえ」

私は立ち上がった、もう一度、先生を強く睨んだ。

「彼女を否定されるのは、とてつもなく不快みたいだね。君のかわい顔が台無しだよ」

私は黙ったまま、教官室を後にする。

ドアを閉め、教室に向かおうとした時、彼女はそこにいた。

まるで先生と私のやりとりが終わるのを待っていたかのように、窓際に背中を預けていた。

腕組みしていた手を、照れくさそうに首の後ろに回した。

「具合、良くなさそうだね」

私の顔色を見て察したのか、彼女はトーンを落として確認する。

「大丈夫、だよ。それより、話があるの」

彼女は身体を翻して、窓の外に視線を移す。

「そうだね。私も、もうそろそろ限界かな、と思ってたところなんだけど。もう少し待ってくれないかな。できれば秋まで」

「秋になれば、何かが変わるの？」

彼女は真剣な表情で頷いた。

「絵を完成させたいんだ」

吸い付くように、彼女は私に体を寄せる。

「あと三ヶ月はかかりそうなんだ」

周囲には誰もいない。

「それまで、待ってもらえるかな？」

その言葉はさり気なく私の口内に囁かれ、喉の奥で残響した。

塞がれた唇に、私は身動きが取れなくなった。

瞳を閉じた私は、自分が断ることができないことを確信した。

熱く絡められた接点が離れ、唾液が引力に負けて放物線を描いて

落ちる。

私は彼女を、卑怯だと思った。

そんな私を察してか、彼女は申し訳なさそうに目尻を下げた。
「最後まで、続けたいんだ」

そして私は待った。

一人、辛抱して待つのは慣れていた。

そして、八人目の犠牲者が出る。

私達は売店前の花壇の中に桜を植え、

「意外とここって盲点だよな」

と私は言った。

彼女は控えめに笑って、「そうだね」と答えた。

翌日、苗木は無くなっていた。

彼女はそれを報告した後、私に言った。

「絵が完成したよ」

そして、

「放課後、時間をくれないかな。例の事件の事で、話があるから」

放課後、私達は館に帰り、一時間程休憩を入れた後、応接間のソファーに座って向き合う事になった。彼女がアールグレイを出してくれて、私は「クッキーを焼けば良かった」と云った。「作ったことがないでしょ」と彼女が指摘する。二人は穏やかに笑う。

執事さんには暇が出されていて、今日は不在らしかった。

このタイミングを待っていたと、彼女は云う。

「これは復讐なの」

私はカップの中に、ミルクと砂糖を目一杯入れる。

「一昨年の夏、何があったかは知ってるよね。言葉より、あの写真が克明に物語ってる」

彼女は優雅に、紅茶に口を添える。それは本当に、飲まずにただ添える、それだけの動作に見えた。

「その時の事件は表沙汰にならなくて、先生達の間で処理されたの。主犯が理事長の息子だったから、先生達に圧力がかったんでしょうね。反発した人もいたみたいだけど、逆に不祥事をでっちあげられて職を追われたみたい。まあ、その他にも複雑な事情があったのだけれど、私から見れば怠慢ね」

「それで、その関係者を？」

「片っ端からね。まずは相手と適当に仲良くなって、昔のことは忘れたって思わせてから、どこか都合の良い場所に呼び出すの。公園の外れとか、墓地とかね。青姦に使われそうな、人気のないところ。そこで私は変装して待っていて、相手が現れたら背後から首を絞める。私、身長高いでしょ。それで、体格差はカバーできると思ってたんだけど、そうでもなくて。おかげでかなり鍛えることになったよ」

彼女は袖をまくって、私に力瘤を見せた。

腕にできた傷は、その時に抵抗を受けたもので、アームカットとは無関係だと言う。

「死体を運ぶのは大変だったから、執事に手伝ってもらった。車でこの館まで運んでね、地下に隠すの。そこで十分に乾燥させてから分解して燃やすんだ。ここにはなんでも揃っているから。うちってさ、ボイラーもあるけど、釜でもお風呂が焚けるんだよね。和洋折衷ね」

私は自分をしっかり持つよう、何度も言い聞かせ、確かめなければいけない事を確認する。

「全部、全員を、やったの？」

彼女は気怠そうに、身体を斜めに傾ける。

「そうだね。あと一人残ってるよ。関係者は全員で九人で、奇しくも四ヶ月に一度のペースになってさ。乾燥して分解するのに時間がかかるからね。骨は海や川に捨てるから、その度に遠出しなき

やいけない」

「望みはないのだろうか？この事態から少しでも良い方向に展開しないのだろうか？私は必死に考える。」

「最後まで、やらなくちゃいけないの？」

その声は、自分でも分かる程、震えていた。

「まあ、ここまで来たんだしね。相手の方もとつくに気付いていると思うけど、止められないんだ。生き残ることで感じる罪悪感はずっと大きくて、私が手をかけるまでもなく自殺してしまうのかも知れない。けど、罰は平等にさ、与えたいじゃん？」

彼女の眼光は屈折せず、私を射抜く。

「知ってたんでしょ？君はその話を担任としていた」

私は答えず、俯いた。

「バレない方がおかしいと思ってた。でも不思議と証拠が上がってこない。警察もお手上げみたい。なんか最後までやりきれって言われている気分だよ。がんばれ、やっちゃえって」

足を組み直し、彼女は冷めた紅茶を初めて飲み込んだ。

小さな喉が、ゆっくりと、艶やかに、隆起する。

「先生に伝えておいてくれないかな。卒業まで待つて欲しいって。その時初めて、彼女の声が哀しみを孕んで、微かに濡れていた。」

「最後はあいつだからさ。好きな物は最後にとっておくタイプでね。最も悪い奴を最後にやるんだ」

私は胸につかえる言葉を一つ一つすくって、文章を作る。

「本当なの？先生が、全ての原因なの？」

彼女は答えなかった。

「そうだとしても、私にはできない。見過ごすなんてこともう目を合わせる事はできなかった。」

彼女は深い溜息の後、

「すごく残念なことだけど」

と言って立ち上がった。

私の前に立ち、膝を折って、私の目線の高さに合わせると、もう

一度深く呼吸をした。

彼女は両手で私の頭を抑え、唇を重ねた。

あまりにも突然のことに、私は抵抗し、足を動かせる限り動かし
た。

テーブルの脚が私の抵抗で被害を受け、上に乗っていた二つの力
ツブはソーサーとの間で音を立てて揺れた。

彼女の手は私の首にかかり、気管を押さえる。

私は瞬時に、抵抗することを止める。

声を出そうとしてみたが、掠れるばかりで、言葉にならない。

呼吸が難しくなる。酸素を供給できない体は、苦しいと藻掻いて
いる。

けれども、それと同時に、行き場のない快樂が小爆発を繰り返
していた。爆風で粉々になった理性をよそに、私は快樂を享受する。

頭が真っ白になっていく。これはこれで良いかもしれない。このま
ま消えてしまうのも悪くない。終わってしまったことは、嫌いじゃな
い。

私は緊張して動作を忘れていた両腕を動かそうとしてみる。

その腕で彼女を抱こうと試みる。

私の身長は低く、腕も短いので、それをやり遂げる自信はなかつ
たけれど、とにかくやってみようと思った。

視界は色彩を失い、様々な輪郭は精細を欠いていった。何よりも、
瞼を押し上げる力さえ惜しい。

私はどうにか彼女にしがみつく。

思いの外、それは成功して、私は調子に乗って彼女を抱き寄せよ
うと思った。

もちろん、そんな力は残されていなかったが、私は強欲に、それ
がしたいと思った。最後まで、自分に我が儘になっても良いと思
った。

頬に熱いものを感じる。それは液体だ。

こうちゃ　紅茶だろうか。液体といたら、それしかない。

でも、紅茶は既に冷めているはずだ。

多分、私は死んだ。

私は死んだのだけれども、何故か今、意識がある。となればこれは、死んだ後の世界なのか。

お決まりの疑問だ。

しかし、私はそれについて考えるのを止める。

目の前を、彼女が歩いているからだ。

私はその背中を負っている。

学校の、帰り道だと思う。

景色は妙に歪んでいて、流動的だ。そこに意識を集中しようと思えばするほど、視点を中心に渦が始まって、強いぼかしかかってくる。そしてそれに捕らわれていると、彼女の背中が遠くなる。私は彼女を追うこと強いられているようだ。

「今更だけど、進路を変えるつもりはないかな？」

彼女は振り返らず、前に歩きながら私に尋ねる。

その声は、周りの景色が歪んでいるせいか、それにつられて少しくぐもったように聞こえる。

「もう遅いよ。それにお金のこともあるし」

高校三年生で、二学期も終わろうとしている。今から進学するなんて、無謀な話だ。

「浪人してもいいからさ。挑戦すべきだよ。それにお金のことなら、うちにはたくさんあるし」

私は頷かなかった。代わりに訊ねる。

「あなたはどうするの？」

彼女は立ち止まった。

「あ、そっか。復讐ばっか考えてて、進路の事、まったく考えてなかった。どうするのかなあ」

「なによもう」

私は彼女を小突いて、彼女は「あはは」と笑った。しかし、その

顔はぼけていて良く見えない。

私達は再度歩き出す。

「でもさ、私は君のことが心配なのよ。真面目だし、努力家だからさ。こつこつ勉強して、大学行つて欲しいんだよね」

「大学行かなくても、どうにか生きていけるよ」

「生きていけるかもしれないけどね、幸せになれないかも知れない」
彼女は続け、

「学歴は一生ついてくるから。それで対人関係が上手くいかないつてこともある。待遇なんて、高卒と大卒じゃあまったく違うんだから」

私は少し考えた。

「あなたも大学に行くつていうのなら、私も考える。だってそうじやなきゃ、説得力がないもの」

彼女は「そうだね」と笑い、表情にわずかな翳りを落としたように見えた。理不尽な程強烈なぼかしの向こうに、確かにそれを感じた。

「できれば行きたいんだけど、それはちょっと難しいんだよね」

彼女はもう一度立ち止まって、「あれを見て」と向こうを指差した。

その方向には黒い渦がある。

放課後の夕闇より、一際濃い、真夜中の黒だ。目を凝らせば、そこに星の瞬きが見える。

「高一の夏休み、陸上部の合宿中でね、やられちゃったのよ」

闇の中に、人の輪が見える。輪の中には人が倒れていて、それが彼女だと気付くには時間がかからなかった。手首の傷は、ついていない。

「その後、女の子の友達と喧嘩になつてね、目の前で手首を切られたの。凄い勢いだった。ついた血がね、なかなか取れないの。錯覚なんだろうけど、匂いも残つてさ」

その時の光景もそこに写し出されている。暗くて良く分からない

が、二人の少女が口論した後、突然一人の少女が突然包丁を取り出し、自らの左手首を切断する勢いで包丁を押し当てる。

相手の少女はその傷口を止めようとするが、それを拒み、何かの短い罵声を浴びせ、そのまま走って消えた。取り残された少女は、彼女の血で全身が赤く染められていた。

「この二つの事件の関連性を知っている人は少ないのだけれど、結果としてそれは良くなかった。私はある人に脅され、その関係者を消していくことになった」

闇は次第に夕方の太陽を飲み込んでいって、辺りはいつの間にか夜になっていた。

血まみれの少女は、私を見つける。

「逃げて」

そう叫んでいるが、その声は遙かに遠く、私に強制力を与えない。隣に立っていた彼女が、私に言う。

「ま、大学に進学して欲しいってこと。君が行くなら、私も行く」
「ぼかしかかっていた彼女の顔は、いつの間にか明瞭になっていた。」

しかしそれは彼女の顔でなく、私がよく知っている人の顔だった。
もう一度、彼は云う。

「君が行くなら、私も行く。舞台は用意してあるよ」

目覚めるとベットの上だった。

上半身を勢いよく起こす。

丁寧にも、直後にモーニングベルが鳴る。

朝七時。

何事も無かったかのように、私は朝を迎えている。

首筋に手を当ててみた。

意識を失う前の記憶を呼び戻そうとするが、頭が芯の方からぼう

つと熱く、その熱で記憶は融解してしまったのか、輪郭がはつきりしない。ただ昨日があつて、彼女と会話して、それで終わり。それで終わりだ。

とりあえず私は朝の支度を始める。

顔を洗い、ご飯を食べて、歯を磨いて、髪をセットしなきゃいけない。時計曰く、平日らしい。となると、私は学校に行かなきゃいけないのだ。

私は食卓に移動し、執事さんの姿を探すが、見つけることはできなかった。

いつもは二人分用意されている食事が、今日は一人分になっていく。もつとも、彼女が朝食を食べているところは一度も見たことはない。

普段と違う様子ではあつたが、平常通り学校に登校する為にも、私は朝食を済ませ、顔を洗って、歯を磨き、制服に着替え、髪を整える。ついでに、彼女から教えて貰った簡単な化粧も施す。予定通り、出発まで十分ほど余裕ができる。テレビをつける。ニュース番組にチャンネルを合わせ、新聞に目を通す。

私はそこに、九人目に犠牲者の名前を見つける。

思わず外に出た。

季節を確認する。

昇降口を上がり、靴箱にローファーを入れていると、ざわめきが聞こえてきた。

掲示板の前に生徒が群がっている。

九人目の被害者についてのことだろう。

私は何故かこうやって生きていて、代わりに誰かが死んでいる。罪悪感は無かった。しかし、生きている、という実感も薄かった。人をかきわけて、それを確認する気力は出ない。

酸素の足りない頭で、のそのそ足を前に出し、教室に向かう。鞆を机の上に置き、座る。自然と彼女の席に意識が収束する。

まだ来ていないようだ。

無理もない。昨日、あんな事もあつたし、私はどんな顔をして彼女に会えば良いのか分からなかった。できれば、昨日の事はさっぱり忘れて、いつもの笑顔で声をかけて欲しかった。そうしたら私も、何事も無かつたかのように笑つて、今まで通りの関係を続けることができる。

授業が始まり、昼休みが入り、また授業が始まって、何事もなく一日が終わつた。

結局、彼女は一日中欠席で、私は内心ほつとしていた。時間が経てば、昨日の感情の昂ぶりも幾分か抑えられているだろうと、自分自身に言い聞かせた。

私は席を立つて、飾り気のない鞆を持って帰路につこうとした。学級長が私に何かを言おうとして、すれ違い様に立ち止まったが、私は早々と立ち去る事にした。人とまともな会話ができないような気がした。

「集会、出ないのかい？」

教官室の前を通つた時、先生に呼び止められた。

私は何のことだか分からないと言って、逃げようとした。

「おいおい、そりやないだろう。校内放送もしたし、掲示板にも告知したぞ」

私は首をかしげた。今日は何も聞いていないし、見ていなかった。まさか。シヨックが大きすぎたのか

先生は顎に手を添える。悩んだり、考えたりする時の癖だ。

「そうだとしても、現実は見えておかないとな」

そう言つて、先生は一瞬で私を抱えて、移動を始めた。

「あ、歩けますよ。歩きます」

先生は「へえ」と生返事をして、とんとんと階段を降りていった。その度に私の全身が上下に大きく揺れる。

通りがかる後輩達に凝視され、私は恥ずかしくてますます何も考えられなくなる。

昇降口前の掲示板の前に私は下ろされ、一枚の張り紙を見ると命じられた。

そこには九人目の犠牲者の名前があつて、その件で放課後に集会があると書かれている。

「それで、それは今日の午前八時に張り替えたもので、お前に見せたいのは、昨夜未明から貼られていたこっちの方なんだな」

先生は四つ折りにしたコピー紙を私の前に広げる。

「この事も含めて集会を開こうとしてね。じきに報道にも流れて、彼女が犯人ということになる」

どうして？

私は呟く。

どうして、そういうことになるの？

私は先生の胸を叩く。

どうして、どうして？

「彼女はまだ発見されていない。でも、直に発見されるだろう」

先生は私の小さな暴力を、微動だにせずに受け止める。

「それは君の手によつてだ。僕たち大人では見当はつくが、それをしようとは思わない。君にやって欲しいんだ」

気が付けば私は走っていた。という事はなく。

私はふらついていた。そして、今にも倒れそうだった。

どこに行けば良いか分からなかったし、今朝から頭に血が巡らず、思考の方向も定まらなかつた。

私は一本の桜の木に、半ば投げ出す形で身を預ける。衝撃で剥がれ落ちた樹皮がスカートの上に落ちる。

“ 過去九人の失踪事件の犯人は私です。

ごめんなさい。

新しい命の下で、贖罪します”

最後には彼女の名前。綺麗な字だった。

新しい命。

私はそれについて考える。

新しい命だ。

膝の上に零れた、老衰して乾燥した樹皮を手にする。

育てるのが難しい。彼女はそう言っていた。

新たに宿す命は、彼女にかけられた容疑によって、一つずつ、確実に奪い去られていったのだ。

もしかしたら、それは桜に限ったことではないのかも知れない。

彼女が生み出そうとした全てが、誰かに監視され、壊されていったのかも知れない。

分からない。

何故、そうなってしまふのかは分からない。

けれども、一つだけ確かな事がある。

彼女は犯人ではない。

彼女に殺されそうとした記憶は消えない。

けれども、私は彼女を信じている。彼女は犯人ではない。

よく考えれば、簡単なことだった。

私は立つ。

そして今度は、しっかりと力を入れ、歩き出すことができた。

その速度は次第に大きくなり、ついに私は走っていた。

息は切れ、肺は大きく膨らんで縮み、額から流れ出る汗を袖で拭いた。

どこだろう。

私には確信があった。

彼女が居る場所。それは、一つしかなかった。

私は体育館の方へ走った。

体育館の中からは教務主事の声がスピーカーを通して聞こえてくる。

探す。探す。

それは、あるはずだった。

新しい命が、そこにあるはずだった。

私は酸欠でよろよろになりながらも、ついにその一本を見つけた。

そして直ぐに私は掘り返す。

土は軟らかい。

掘り返す。

それは明らかに、何かの目的のために掘られた後のものだった。

よく見れば、土の色には下層の焦げ茶色が混ざっている。

掘り返す。

爪の中には土が入り、剥がれそうになる。構わない。

掘り返す。

そして私は、その髪に触れる。

柔らかく、光沢のある美しいそれは、私の触覚よって鮮明に記憶

されていた。

穴の周りに盛り上げられていた土の山に私は顔を埋め、込み上げ

る悲しみに耐えた。

やるせない気持ちに、涙が溢れそうになった。

どうして？どうして？

疑問と怒りが抑えても抑えても暴れ出すが、圧倒的な悲しみにそ

れは瞬時に溶けていった。

「さん！」

誰かが私の名を呼んで、肩を揺らした。

私はその場から、動くことが出来なかった。

気が付けば、私によって放り出された桜の苗木が、駆けつけた人

々の足に踏まれていた。

遺産相続について話がある、と執事さんが話を持ち出した。

彼女がいなくなってから、二ヶ月が経っていた。

秋の終わり、冬の始まりに起きた。

季節と命のピリオドは、彼女で最後になるのだろうか。

「お嬢様が失踪される前、私に授けて下さいました。今、ご覧になりますか？」

丁寧に差し渡されたその便箋を目にして、私は彼に訊ねた。

「彼女は、知っていたのですか？」

執事さんは目を伏せ、ゆっくりと頭を横に振りながら答えた。

「私は何も存じません。ただお嬢様は黙って受け取ってくれと申し
ておりました。そして、時期が来たら貴女に渡すようにと。前例は
ございません」

私は便箋を受け取り、開いた。

預貯金の三分の一を執事さんに与え、その他全ての財産である、
土地、家屋、その中にある家財を全て私に相続すること。最後にラ
メの入ったピンクの蛍光ペンで、「相続税はちゃんと払うんだぞ」
と残されている。

私は再度繰り返された疑問符を、ここでも投げつける。「どうし
て？」

彼は厳かに言う。

「お嬢様は、常に貴女様の事を気に掛けているご様子でした。それ
だけです」

学校を卒業して、私は浪人生活を迎えた。

執事さんには辞めてもらい、私は一人でこの館に住むことにした。
先生には、仕事を続けていくという条件の下、許しをもらえた。

管理に関する事務的な手続きの方法は、執事さんから引き継いだ。

彼女が使用していたPCを使い、表計算ソフトでコスト管理を行おうとしたところ、目的が類似したファイルが既にあり、私は驚いた。大雑把に思われた彼女の性格からは考えられない作業成果だった。そして、この館を維持する費用が、以前私が借りていたアパートの家賃の十数倍であることにも目を見張った。総資産から計算すると納得はいくのだが。

ファイルを色々閲覧していると、私のアパートが火事にあつた際の事務手続きに必要な書類も、このPCで作成されていた。参考になるなど、感心すると同時に、彼女がそこまで手を回してくれたことに胸が少し熱くなった。

そして私は一つのファイルを見つける。

ファイル名は「桜計画」。

パスワードロックがされており、私はそのパスワードを知る由もなかった。

失敗覚悟で、入力を試みる。

彼女の姓名、harukawatoiro

だめ。入力フォームが揺れる。確かに姓名ではパスワードの意味がない。

とりあえず逆さにしてみる。

Toiroharukawa

もちろんだめだろう。

性、名だけにし、アルファベットを逆さに入力しても受け付けなかった。

発想を変える。

桜、sakura

だめ。母音を省こう。Sk

だめ。英語ではどうだろう。

Cherryblossoms

Sをとってみたり。

Cherryblossom

だめだ。

あと、他にはないだろうか。

例えば、私の名前。

可能性はかなり低いが、試しに入れてみる。

amakoto

だめ。

naki

だめだ。

私は諦めて、革張りの椅子の背もたれに身を垂れた。

彼女は一体何を思っつて、桜を植えていったのだろうか。

もう一度考えてみる。

罪を償おうとしてだったのか。

命の交換、それを人間と植物の間で取り交わそうとしていたのか？

その考えがもつともストレートで、納得ができる。

しかし、私の頭の中には、どうしてもひっかかるものがある。

彼女が発見された後、校内にある桜の木の本格的な掘り返しが行われた。

しかし、彼女が殺したといわれている九人の死体は出てこなかった。別の白骨化した死体はでてきたが、かなり昔のもので、彼女が手がけたものとは考えにくかった。

そもそも本当に、彼女が犯人なのだろうか？

未だにその疑問を私は払拭できない。物証は一切無い。けれど、私の感情は彼女が犯人であることを肯定しない。

私は腕を組み、モニタから注意を逸らした。

PCの背後に広がっている書架に、目を移す。

本は読まないと言っていた割には、活字の本はかなり多く、専門書が大半を占めていた。洋書もある。

私は、その中の一冊に見覚えのある小説を見つける。

「海辺のカフカ」

思わず手に取った。表には図書館のシールが貼られている。

この館に越した際、すっかりとしたベッドの枕を与えられたので、私はこの存在を忘れていた。前はこの本の上下巻を重ねてタオルを巻き、枕の代わりにしていた。その固さを今、懐かしむ。彼女は火事場から救い出したそれを、この書架にしまっていたのだ。本を開く。

それは十五歳の少年と、不思議な力を持った老人の話だ。私が十五歳の時に図書館から借りて読んだ際、強い衝撃を受け、そのまま自分の持ち物にしてしまったのだ。かといって、私がこの物語を通して感じた事や、この物語が何を言わんとしているかは、一切説明できない。自己探求の話。私が言えるのはそれくらいだ。

私はその英題を手元のPCで調べる。K a f k a o n t h e s h a r e .

まさかとは思ったが、入力してみた。だめだ。ではこれならどうだろう。

K a f k a .

チェコ語でカラスの意味を持ち、フランス・カフカは「変身」しか読んだことがない。

それが通ったとしたら、また一つ、彼女に対する疑問が増える。この意図は一体何なのだろう？

私はファイルを閉じて、目を閉じて、暗闇の中で彼女の口元を想像した。

その計画を私が知ってしまった時、彼女がどんな言葉をどんな調子で語りかけてくるか。

今なら、唇の動きから、呼吸をするタイミングの細部まで、全てが描けるような気がした。

私は私の口を開き、それを試してみる。

「そう、執事なんだ。私が愛す彼は、私の復讐を代理した」
一呼吸。

「そしてその計画の一部を知った君は、彼の手によって部屋に火を

付けられた。そして館に招かれ、食事に毒を盛られた。君が気付かなかったのは、私がそれを未然に見抜き、防ぐ事ができたから」

髪をかき上げる。毛先は相変わらず軽やかに舞う。

「私は彼に交渉し、彼の罪と私の罪を精算したんだ」

背もたれに全体重を預け、そのまま後ろに倒れた。

頭と背中に強い衝撃を覚え、私は一瞬呼吸ができなくなった。

それでも、それでも私は、想像を続ける。

それは、その行為は、私自身を最も悲しくすることを、誰よりも知っている。

「君の為じゃないよ。全ては彼のため。私は彼を、愛していたから」

気が付くとまた私はどこかに座り込んでいて、目の前の光景を受け入れられずにいた。

辺りは熱く、また、赤い。

何かが燃えているようだった。直近の記憶が呼び起こされるが、それとは規模が違っていた。

館が燃えている。

私はそれを門の所から離れて眺めていた。

「大丈夫？」

前触れもなく、先生が現れる。私の認識能力が低下しているせいだろうか、そう感じる。

先生は私の名前を呼び、「こっちを向け」と何度も繰り返している。

私は仕方なく、先生の声が聞こえる方に身体を向ける。

すると先生は、黄土色の紙袋を私に投げ渡した。

私はまたその運動量に負けて、手入れが行き届いていない白の芝生の上に倒れた。

先生は冷たく言う。

「パンツ、見えてるぞ」

私は咄嗟にスカートで隠し、ずるずると立ち上がった。大丈夫。

きつと染みまで見られてない。

「ま、よくわかんないけど、また燃えちゃってるみたいだね」

先生は今にも口笛を吹き出しそうな、上機嫌な様子だ。

「消防、呼ばなきゃ」

「あ、もう呼んだよ。見つけた時にはかなり進行してたから、全焼は免れないな」

私は紙袋を抱えたまま、またずると地面に腰を下ろした。

「君は無事そうだから、安心したけど。電話を貰った時は吃驚したよ。今から火を付ける、なんて言い出すからね」

「わたしが、言ったんですか？」

「そうだよ。覚えてないの？」

私は力なく否定した。全く記憶が無かった。

「ともかく、無事で良かったよ。まだあの事件から起きてから日が浅いからね。君をもう少ししっかり監視しておいた方が良かったのだけれど。忙しかったからさ」

先生は熱さのせいか、頭を掻きながら、続ける。

「何か、持ち出したりしていないかな。館から」

私は再び首を横に振った。何も覚えていなかった。

彼女の「桜計画」を見て、また泣いた。

そして、泣き疲れて、彼女の使っていたベッドに倒れた。

その後、気が付いたらこの事態である。

「たとえば、そのポケットに入ってるやつ、何かな？」

先生にそう言われて、私は初めて気が付いた。

そこには、嚴重に封がされた写真が入っている。

「大事そうな封筒に見えるけど、中に何が入っているか、説明できる？」

私は先生に説明する気力が無かったので、そのまま先生に渡した。

先生は封を切り、写真を一通り見た後、顎に手を添えた。

「日時から推測して、彼女が暴行を受けた事件のものだね。これは酷い」

写真を私に返す。

「君の今の状態から見て、これは僕が持っていた方が良いのだけだ。ちょっと怖いから、君に返しておくよ。大事だったから、無意識にこれだけ持ち出したんだろう」

そして私は気付く事ができない。その写真の数が一枚だけ減っている事に。

「ま、こんな状況で言うことじゃないけど。次の事件のファイルを見ておいてよ。きっと元気が出るよ」

そう言っ、先生は立ち去っていた。熱いのは嫌だから、と言う。私は仕方なく、轟音を立てながら崩れ落ちる館を前にして、ファイルを開く。

そこにはもしかしたら、次の私の住居が記されているかも知れなかった。

そうだとしても、感情を動かすことに私は疲れていて、それほど驚く事もないだろうと思っていた。

ファイルのページを投げやりにめくり、時折、飛んできた灰がページに挟まった。

その中の一ページで、私はある写真を目にし、手が止まる。見覚えのある写真だった。錯覚だと自分に言い聞かせる。

焦げて縮れた睫毛を無視して、何度も目を擦った。その手には涙がついていた。

間もなく、赤焦げた頬にもそれは流れる。

疲れて、感情を切ろうと思っても、それとは無関係に、私は泣きたがる。

泣くことだけが、私の特技のように思える。

いつか見た夢の通りだった。

彼女は生きていた。

彼女は今、大学にいる。

現実（後書き）

色々な人に騙されながら生きていく。
そうやって未来は開かれます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3809c/>

メロディメイカー

2010年10月8日15時45分発行